

# 七隈の杜

第8号  
2012年

FUKUOKA UNIVERSITY

**巻頭言**

イコールフットイング政策 衛藤 卓也

**特集**

「生きる力」と「学び」との関わり  
人らしき人に 坂本 昭  
現代日本における医薬品にかかわる問題点  
薬とともに43年 小野 信文

**論壇**

福岡大学総合科学研究チーム  
「胃癌多発国を対象とした胃癌診断の  
global e-learning system の開発：国際共同研究」の紹介  
八尾 建史

**随筆**

希望のキャリア教育 寺崎 里水

**地域交流**

旧知の仲 坂本 和昭

**地域ネット推進センターだより**

福大病院 診療拠点病院と地域のつながり 志村 英生

**読書の窓**

すべては読書からはじまった  
本を作ること、読むこと。その怖さと魅力 入江香都子

**みんなの広場**

「夢」から学ぶこと 今井 祐樹

福岡大学

## 福岡大学の三つのポリシー

福岡大学は、「建学の精神」に基づいた全人教育を目標として、「教育研究の理念」に掲げる三つの共存をはかることによって、真理と自由を追求し、自発的で創造性豊かな人間を育成し、社会の発展に寄与することを使命としています。地域に密着し、地域と融合した総合大学として、コミュニケーションを大切にし、社会から信頼される人材を育成します。

### アドミッションポリシー

本学の「建学の精神」を理解した、次のような人たちを広く国内外から受け入れます。

1. 考え方がしっかりしており独断や偏見にとらわれない生き方を求める人
2. 温和で包容力がありバランス感覚に優れた能力を身につけたい人
3. 誠実で責任感が強く何事にも屈しない人生をめざす人
4. 新しいこと、困難なことに自ら進んで取り組んで行こうとする人

### カリキュラムポリシー

本学の「教育研究の理念」に基づき、すべての学生に提供する「共通教育科目」と、各学部学科に設置する「専門教育科目」の二つを大きな柱とし、それぞれの学部学科の教育目標にあわせたカリキュラムを編成します。また、正課外教育においても、充実した各種教育プログラムを展開し、全教職員で本学学生の人間の成長を支援し、全人教育を実現します。

1. 全学に提供する共通教育科目をとおして、専門性にとらわれない幅広い視野と豊かな人間性を持つ人材を育成
2. 各学部学科が設置する専門教育科目をとおして、専門的な知識や技能を高め、社会の進歩や変革に応え得る深い学識を有する人材を育成
3. 様々な教育プログラムをとおして、国際性と地域性を兼ね備えた21世紀に通用する人材を育成

### ディプロマポリシー

本学の教育課程においては、厳格な成績評価を行い、所定の単位を修め、次の能力を備えた学生に卒業を認定し、学位を授与します。

1. 修得した知識・技能・態度により、自らが発見した新たな課題を解決する力
2. 職業生活、社会生活に必要な知的活動を支えるコミュニケーション能力や論理的思考力
3. 自律しながらも他者と協調して行動でき、社会の一員として社会の発展に寄与できる力

## 建学の精神

思想堅実・穏健中正・質実剛健・積極進取



新緑のキャンパス（8、10号館前広場）

## 教育研究の理念

「人材教育」と「人間教育」の共存  
「学部教育」と「総合教育」の共存  
「地域性」と「国際性」の共存

福岡大学の教育研究は、「建学の精神」に基づいた全人教育を理想とし、この三つの共存をはかることによって、真理と自由を追求し、自発的で創造性豊かな人間を育成し、社会の発展に寄与することを目的とする。

目次

建学の精神

福岡大学の三つのポリシー

目次 2

W・モリスのケルムスコット・プレス / 前田 雅晴 6

コレクション  
今日のギャラリー

野見山暁治「卑弥呼の国」 8

野見山暁治作「卑弥呼の国」について / 植野 健造 9

巻頭言

イコルフッティング政策 / 衛藤 卓也 10

特集

「生きる力」と「学び」との関わり  
人らしき人に / 坂本 昭 16

論壇

現代日本における医薬品にかかわる問題点  
薬とともに43年 / 小野 信文 24

家族内財の配分・利他的な心と家族 / 姜 文源 33

福岡大学総合科学研究チーム  
「胃癌多発国を対象とした胃癌診断の global e-learning system の  
開発・国際共同研究」の紹介 / 八尾 建史 41

随筆

生き続けるまちの姿 / 池添 昌幸 51

希望のキャリア教育 / 寺崎 里水 57

有機EL技術のこれからと私たちの生活 / 古賀 裕二 63

産学官連携

爆発事故

その現象と事故事例 / 加藤 勝美 68

地域交流

旧知の仲 / 坂本 和昭 76

地域ネット推進  
センターだより

福大病院 診療拠点病院と地域のつながり / 志村 英生 80

国際交流

日本での9年間を振り返って／張 春瀟 85  
Bienvenue aux Francophones／小川 伸 90

ふるさとを想う

故郷の名前／遠藤 文彦 96

キャンパス風景 101

読書の窓

すべては読書からはじまった

本を作ること、読むこと。その怖さと魅力 / 入江 香都子 102

みんなの広場

「夢」から学ぶこと／今井 祐樹 108

「ひろがれ！」福大”弁当の日”／太宰 潮 114

福岡大学指定寮 指定寮の紹介と入寮のすすめ / 山口 雅剛 119

ボランティアと私

東日本災害ボランティア「福岡大学派遣隊」／森高 麗菜 123

「ななくま元気にするっ隊」活動報告／永石 琴乃 130

未来への第一歩／高尾 彩瑛子 135

多くの「鍵」を見出して／山田 望月 138

福岡大学  
インフォメーション

「会計専門職プログラム」の開設／中川 誠士 142

福岡大学校歌 148

格付け&外部評価 149

編集後記 150

# W・モリスのケルムスコット・プレス



晶文社から「ウィリアム・モリス・コレクション」として主要作品が翻訳出版されている（品切の作品もある）。

## エリス編『ジェフリー・チョーサー作品集』

ケルムスコット・プレスで制作された書籍の中で最大。縦424×横291mmの大型の書籍には、単なる文字の印刷にとどまらず、美術品のように細部にわたって装飾が施されている（1896年発刊）。

## 『輝く平原の物語』

ケルムスコット・プレスで印刷・製本された最初の書籍（1891年発刊）。縦200×横140mm。

# W・モリスのケルムスコット・プレス

人文学部英語学科教授 前田 雅晴

英国ヴィクトリア朝の始まりは、長い産業革命を経て、それまでにない巨大な産業社会が出現した時期とほぼ一致する。ウィリアム・モリス（William Morris, 1834-1896）はちょうどそのころロンドン郊外ウォルサムストウで生まれた。

モリスが活躍した分野は、文学・美術工芸（家具、織物のデザインなど）・印刷・造本等々極めて多彩で、また社会主義者として政治的にも積極的な活動を行った。巨人故に彼の全体像を的確にとらえることは難しいが、根底には人文主義的社会主義とでも表すべき理想主義が脈打っていたと言えるだろう。

1891年にモリスが設立したケルムスコット・プレスは近代初のプライベート・プレスと言われるがこれは彼の理想主義の具現の一つにほかならない。彼の印刷・造本への関心はオックスフォード大学在学中に遡る。中世彩飾手稿本の研究、模写、そして自ら彩飾手稿本作製まで試みている。ロマネス

クやゴシックの書法研究とその実践は近代書法の先駆的業績と言われているが、活字に關しても、1883年、ある印刷職人との運命的出会いを機に自ら活字体のデザインを決意し、苦勞の末15世紀ヴェネチアのニコラ・ジャンソンのローマ字体をモデルとしたゴルドン・タイプという活字を作り上げた。彼は中世に強い憧憬を抱いていたが、それは当時の産業資本主義に毒されていない、中世の職人が生み出した実用的で美的な工芸品への憧憬であった。

ケルムスコット・プレスはそうした彼の中世趣味の総決算と言つべきもので、生み出された書物の数々はまさに彼の中世精神の結晶だった。初期印刷の持つている純粹さ、美的主張を堅持しつつ読みやすい本作りには主眼を置いた。1891年、自著『輝く平原の物語』(The Story of the Giltting Plan)の出版を皮切りに、1898年印刷工房が閉じられるまでの間に53書目66巻の書物を印刷出版した。

本のページの内・天・外・地の余白部分を、その順に20%ずつ広げていくのが中世書物作りの流儀だったが、工房の最高傑作チョーサー作品集(The Works of Geoffrey Chaucer)でもこの鉄則を踏襲している。見出し部分はトロイ活字、本文にはこの作品のために彼が苦心して作り上げたチョーサー活字を使用している。1894年印刷開始、1896年6月に完成を見たが、奇しくも彼が亡くなるわずか数カ月前のことだった。ダヴズ・プレスの『欽定英訳聖書』、アシエデン・プレスの『ダンテ全集』そして『チョーサー作品集』は広く世界三大美書と絶賛されるものである。

工房の書物の数々はモリスの理想の具現であった。科学技術の目覚ましい進歩により、モリスが憧れた遠い中世の人々にとっては夢のようなユートピアが半ば現実となっているヴィクトリア時代。しかしその最先端の印刷技術をもってしても彼の理想の書物を生み出し得なかったという点に皮肉を感じる。科学技術がどんなに進歩しようと中心には常に「人」が存在しなくてはならないという当たり前のことを教えてくれるのだが、それはそのまま科学万能の現代に生きる我々へのメッセージでもある。

URL: <http://www.lib.fukuoka-u.ac.jp/e-library/tenji/kp.htm>  
(図書館ホームページ「電子図書館」)

## 今日のギャラリー



野見山暁治「卓弥呼の国」

油彩・キャンパス、額装 149.5×553.3cm

1986年作 福岡大学所蔵

右下に署名・年記：1986 / Nomiyama

この作品は、福岡大学文系センター棟4階の第4会議室奥のロビーに展示されており、同棟5階の国際会議室ロビーの壁面に設置されている石彫レリーフの下絵にあたる。

作者の野見山暁治（のみやま・ぎょうじ、1920 - ）は現在の福岡県飯塚市の生まれ。1938年東京美術学校に入学、1943年卒業、ただちに応召、満州に派遣されるが、発病し帰国。1952年から1964年にかけてフランスに留学、田淵安一、金山康喜らと交友。滞仏中の1958年ブリュッセル美術館で個展開催、同年第2回安井賞を受賞した。帰国後、1968年東京芸術大学助教授、1972年から教授を務めた。1978年『四百字のデッサン』で日本エッセイスト・クラブ賞を受賞。2000年文化功労者に選ばれる。子ども向けの絵本やエッセイといった著書も多い。

### 野見山暁治作「卓弥呼の国」について

人文学部文化学科教授 植野 健造

1984年、福岡大学は創立50周年を迎え、その記念事業の一環として文系センター棟が建設された。その後、1985年同センター棟5階の「国際会議室」ロビー壁面に、福岡大学が21世紀に向けて躍動するにふさわしい絵画を飾ることになり、福岡県出身で東京芸術大学名誉教授、野見山暁治画伯に作品を依頼することになった。これを受けて野見山画伯は壁面全部を油絵やフレスコ画にするなどの構想を検討したが、永久性を考慮した場合「石彫」しかないと考え、そのことについて、当時の東京芸術大学助教授、麻生秀穂先生（壁画専攻）に協力を求めた。両者の協議の結果、黒みかげ石を使用した石彫レリーフを設置することになった。

野見山画伯は絵の制作にあたり、同センター棟1階ラウンジから博多湾を眺めていると、他の国々から風が博多湾に向かって吹いてくるような印象を受け、さらにその風がひとつになって集まってくる人々が創ったという伝説の国のイメージが湧きあがり、一挙に油絵にして描きあげたのが「卓弥呼の国」

と題した作品であると、着想の内容を述べたことである。その後「卓弥呼の国」は、麻生先生のもとで約半年間かけて、石彫レリーフとして制作され、1987年3月に石材27枚をつなぎ合わせ横約11・3メートル、高さ約3メートルの壁面に石彫レリーフが完成設置された。麻生先生は単に油絵を模倣するのではなく、材料である南アフリカ産「黒みかげ石」の特性に表現力を託したといわれる。なお、油彩画の本作品は下絵ではあるが、石彫レリーフとは別の、独立した堂々たる完成作であることは言うまでもない。

#### 参考文献

- ・『石彫レリーフ「卓弥呼の国」』（解説リーフレット）、福岡大学、1987年3月
- ・野見山暁治「レリーフの壁」、西日本新聞、1987年5月19日夕刊
- ・谷口鉄雄「野見山暁治氏の福岡大学大壁画について」、西日本新聞、1987年10月1日夕刊
- \* 本稿をなすにあたり、「ギャラリーおいし」より資料の提供を受けました。記して感謝申し上げます。

# イコールフットイング政策

学長 衛藤 卓也

## 1 イコールフットイング 歴史的事例

イコールフットイング (equal footing) とは、平等な基盤<sup>①</sup> という意味の言葉である。それは、各種産業が競争を行うとき、イコールフットイングの条件の下で競争するのが望ましいとする考え方のことで、要は、競争は同じ土俵の上で行われるのが基本原則であるということである。

実は、交通の領域で、イコールフットイング政策が、戦後（1945年8月終戦）の高度経済成長期（1955年～1965年代）の最中<sup>②</sup>に主張されたのである。当時、貨物輸送の分野でトラック輸送

オリンピックが開催され東海道新幹線が華々しく開業したその年に、皮肉にも初めて単年度赤字に転落し、その後は赤字が累積していくことになった。この大幅な赤字現象とその因果関係がもととなり、1987年4月の分割・民営化へと進んでいったわけである。

さて当時、成長著しいトラックが、収益性の高い貨物を国鉄から次々と奪うようになり、国鉄は収益性の低い貨物を中心に輸送するといった状況になったわけである。もつかる貨物だけをトラックが収奪するという構図が出来上がり、クリーム・スキミング (cream skimming) すなわち、いいとこ取り<sup>③</sup> という現象が生じた。トラックは競争上の優位性を確保することになったが、鉄道側からすれば、こうした事態を招いた主な原因は、国鉄は線路等のインフラ施設（固定施設）の費用を負担しているのに対し、トラックは道路などのインフラ施設の費用を十分に負担しておらず、トラックの方が有利な立場に

が急成長し、貨物を奪われていた国鉄は苦しい立場に追い込まれたが、その大きな要因は、トラックと比べて競争上不利となっていることが指摘されたのである。国有鉄道としての国鉄（1949年、公企業としての「日本国有鉄道」が3公社の一つとして誕生、それまでは政府直営の国有鉄道であった）は、陸上交通の分野で独占的地位を保持していたが、戦後のモータリゼーション（マイカーやトラック、バスなど自動車の普及）の急進展によってその独占的地位を奪われ、交通市場は競争的市場構造へとシフトしていったのである。国鉄は、1964年、東京

置かれているというものであった。このため、鉄道側の主張に配慮して、インフラ施設の費用負担の不平等を是正し、公平な競争条件の下で市場競争を行うべきだという観点から、イコールフットイング政策が主張されたのである。それを受けて、道路特定財源制度（自動車の取得、所有、利用の各段階に応じて課せられる税で、国税と地方税に分かれる）が拡充され、受益者負担の原則が強化されていき、不平等説は沈静化していったのである。

## 2 補助とイコールフットイング政策

さて、話を大学の世界に戻すと、少し前から主に私立大学関係者の中でイコールフットイングという言葉が飛び交うようになった。

### (1) 補助と規制

そこでまず、政府（中央政府、その中心は文部科学省）が政策の柱とする補助と規制について触れておきたい。補助と規制は、アメとムチの關係に類似

ラスの価値を実現するためにはその財の消費を促進するのが望ましいと考える財である。そこには、「…するのが望ましい」といった規範的な価値判断が入っており、その価値判断は社会的に意味のあるもので、かつ社会的なコンセンサス（同意）を前提にしている。価値財の典型的な事例は義務教育サービスで、これは、すべての子どもたちに拘束的な義務教育を課するのが望ましいと国民が判断したものである。麻薬などはマイナスの価値財で、国民が「価値のないもの」としてこれを認めていない財である。

大学の高等教育サービスは、拘束的な義務教育サービスとは異なり、それを受ける義務はなく、志願者が大学を自由に選択できる非拘束的・選択的なサービスである。ただ、高等教育サービスは、それによって学生が直接に受益するという直接効果をもたらすだけでなく、国や地域社会を支え発展させるといった間接効果をもたらすのである。つまり、大きなプラスの間接効果＝社会的価値があるため、高

表 私立大学等経常費補助金上位20校 (千円)

順位	大学名	平成22年度		平成21年度	
		補助金額	補助金額	補助金額	順位
1	日本大学	10,209,891	10,728,111	1	
2	慶應義塾大学	9,351,964	8,704,153	3	
3	早稲田大学	9,291,043	9,191,493	2	
4	東海大学	6,677,973	6,310,048	4	
5	立命館大学	5,153,671	4,749,393	6	
6	近畿大学	4,736,523	4,846,574	5	
7	福岡大学	4,206,872	3,992,224	9	
8	順天堂大学	4,070,346	4,020,389	8	
9	明治大学	3,878,585	3,709,227	10	
10	北里大学	3,795,127	4,110,451	7	
11	昭和大学	3,757,727	3,677,684	11	
12	同志社大学	3,428,575	3,023,992	18	
13	関西学院大学	3,248,806	2,966,488	19	
14	東京女子医科大学	3,218,911	3,165,299	13	
15	法政大学	3,126,931	3,197,213	12	
16	中央大学	3,019,517	3,109,268	16	
17	東京理科大学	2,995,790	2,855,240	20	
18	東京慈恵会医科大学	2,967,163	3,140,816	15	
19	関西大学	2,844,894	3,060,252	17	
20	日本医科大学	2,613,473	3,144,222	14	

日本私立学校振興・共済事業団ホームページ (<http://www.shigaku.go.jp/>) から編集・引用

しており、補助はアメ、規制はムチに相当する。政府の補助は、政府が大学の教育や研究を推進し、後押しするために行う政策である。補助金は最も典型的、かつ有効な経済的手法であり、その中心軸としての補助金には、国立大学の場合は運営費交付金、私立大学の場合は経常費補助金が存在する(表参照)。

一方、政府の規制は、法律や設置基準等に基づき各大学に対して認可や許可、届け出、行政指導などを通じて一定の制約や義務を加えるものである。最近では、大学の新規設置や学部の増設・改組などの規制は緩和されているが(量的規制の緩和)、認証評価の義務化や事業報告書作成の義務化などの規制は強化されている(質的規制の強化)。

(2) 補助の根拠

次に、政府の補助の根拠について考えてみたい。大学の高等教育サービスは価値財(merit goods)としての側面を有している。価値財とは、その財が大きなプラスの国家的・社会的価値を有し、そのプ

等教育サービスにはそれを国家レベルで持続的に維持すべき価値財的な側面があると言えるのである。こうして、高等教育サービスの供給に対して国が助成し補助する本質的な根拠は、高等教育サービスの価値財的側面にあると考えるのである。

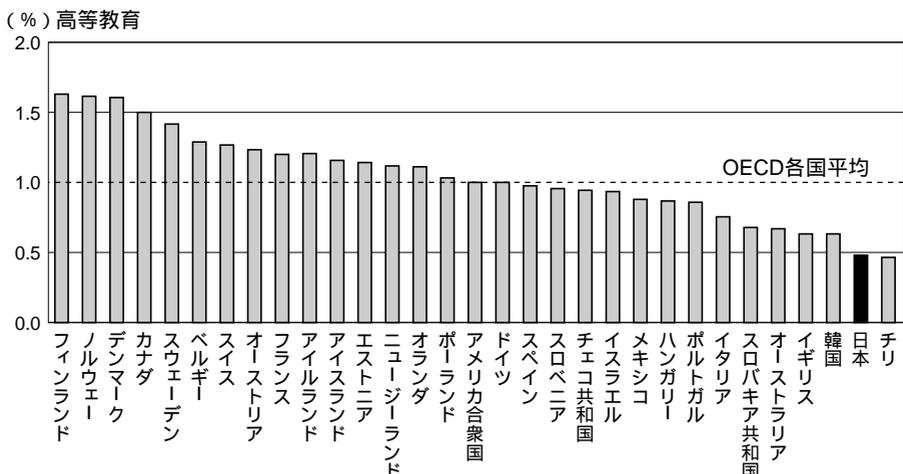
実際、本学においても国・政府から多額の補助経常費補助金、その他( )を受けており、大学の維持に不可欠な貴重な資金として大切に活用しているところである。ちなみに、地方政府(福岡県)からも補助も受けていることを付け加えておきたい。

(3) 補助とイコールフットリング政策

政府の補助については、①補助の水準(レベル)について、および②補助の構造(ストラクチャー)について、その「あり方」を考え、提示することができる。

そこで、この2点について、望ましいと思われる補助の方途を述べてみたい。

図 高等教育に対する公財政支出の対 GDP 比



『図表でみる教育 OECD インディケータ (2011年版)』

る高等教育サービスは、国立、私立を問わず大きな相違は見られないはずで、機能的に同種の高等教育サービスが提供されているという観点からすれば、補助の不公平感はぬぐえないのである。ここから、私立大学への補助を一層充実させ、国立、私立の間でイコールフットイングの状態に近づけることが必要となる。もちろん、まったく均等にすべきだというわけではなく、これまでの歴史的経緯や事情を考慮して、あるいは合理的な制約条件を設けることによって国立・私立間の差異は容認されてよいと思うが、少なくとも公平感が感じられるような形にするのが望ましいと考える。イコールフットイング政策の推進は、公平性の高い補助の構造にすることにつながるであろう。

イコールフットイング政策は、私立大学に補助金を多く配分することを意味する。それは、補助金の総額を増やさなければ、国立大学の補助金を減らすことにつながる。しかし、低いレベルの補助金総額

① 補助の水準について 補助額の増額をわが国の高等教育に対する公財政支出（国と地方政府による支出）の水準は、対GDP比で0.5%と非常に低く、OECD加盟国（31カ国）の中で最下位となっている（図参照）。公財政支出の核を成す補助額の水準が低いということは、その分、家計の負担が大きくなっていることを意味する。国づくりにとって現在も将来も人づくりは欠かせない要諦であり、そのための補助額の増額は不可欠である。これは、グローバルな視点から見たイコールフットイング政策の推進と言ってよいであろう。

② 補助の構造について イコールフットイング政策の推進を

わが国の大学への補助は、国立大学と私立大学との間で大きな格差がある。学生数は国立対私立で2.3:7.7と私立が圧倒的に多いのに対し、補助金は7.8:2.2という具合に国の補助が国立に圧倒的に傾斜した形になっている。本来、学生が受け

のカテゴリーではなく、OECD諸国と比べて遜色のないレベルの補助金総額のカテゴリーの中でイコールフットイング政策をとれば、問題はなくなる。また、イコールフットイング政策による私立大学への補助金の増額については、教育・研究に責任を持つてしっかりやるような条件を大学に義務づけることが不可欠であろう。

イコールフットイング政策によって、各地に点在する私立大学の経営基盤が強化され、私立大学間の共存共栄が図られ、安心度・安定度の高い環境の中の教育・研究の持続が期待されるであろう。何よりも、学生への教育支援（学習、課外、ボランティア、海外研修・留学、外国人留学生、インターンシップなどへの支援活動）によって、大学の教育力アップ、人材育成の強化が図られることになる。

# 「生きる力」と「学び」の関わり

## 人らしき人に

問われる「学び」の場

最近、学生さんたちと接していますと個人差はありますが、「生きる力」と「学び」との関わりで戸惑いを感じる時があります。「単位」や「成績」には関心を持ちますが、学生としての「生き方」や「学び」そのもの、いうならば知識・技能の活用や応用への関心は低いようです。また、一つの答え・正解は出せても、自分で考えて判断することには苦手なようです。このことは、本人自身が学んだことを生

活や仕事に生かしていけるたくましい「生きる力」が育ってきているのかと、心配になります。

人間は「学び」なくしては生きられない、まさに学習的な動物以外の何ものでもありません。人間として、よりよく自分で「学び」、「行つ」こと、そのことが「生きる力」ではないでしょうか。より人間らしく生きるためには、そのための「生きる力」を家庭、地域、学校などのあらゆる生活・社会の場で身に付けていかなばなりません。なかでも、学校は、

学ぶ「学力」と行つ「経験」の意図的な陶冶の場として、その重要性を誰も否定できません。

それだけに、学校が選抜のメカニズムを強め、逆に人間陶冶の場としての役割を弱めてきたら、どうなるのでしょうか。「学び」が狭い「学力」となること、知性や理性に問題が生じて、人間としての「行い」と乖離します。今、大学を含めて「学び」の場としての学校は、この「生きる力」そのものが問い直されているのです。そこで、この「生きる力」を今の側面から、つまり「学び」との関わりで論じてみたいと思います。

「公的な面」からの問い直し

この「生きる力」の公的な問い直しの発端は、1991年の中央教育審議会答申です。学校教育に根強く残る「学校歴」意識、学校間「格差」・「序列」、日本の競争メカニズムを指摘したことに始まります。端的にいいますと、公教育において成績主義が狭い

「学力」観を強め、その下での競争主義が児童生徒の「生き方」に問題を生じさせてきたということにほかなりません。このために、1996年の同審議会答申は、これからの改革方向として、「生きる力」の育成とゆとりある生活をキャッチ・フレーズに学校5日制を提言したのです。翌年の教育課程審議会答申では、「ゆとり」を取り戻し教育の本来的な目標である「生きる力」を育成できるカリキュラム作成を提言しています。これを受けて、1999年に告示された学習指導要領で、「生きる力」の育成が学校教育の基本理念とされました。

ところが、この「生きる力」は、ゆとり教育批判と学力低下の下で厳しい状況を迎えたのです。「新しい学力」観の下で「基礎・基本的な内容の確実な定着」の徹底を図るために、これまでの指導内容が3割程度の削減となりました。「この背景には、「自主学习」や「生活体験」の定着・拡充がありました。しかしOECDによる学習到達度調査(PISA)

で日本の順位が下がると、いわゆる「ゆとり路線」への批判と学力低下論が結び付いたのです。

このことをどう解すべきでしょうか。学力や教育批判は簡単です。大事なことは、「ゆとり」か「詰め込み」か、ということではなく、基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着とこれらを活用する力の育成です。当然、生きるためには、知識・技能の活用「が力ギとなります。単に、量の問題ではなく、何のために「学力」を身に付けなければならぬのか、その問い直しといってもよいでしょう。ホワイトヘッドもいっように深く徹底して教え、学ばすことです。ただ知ることの「知」であればソクラテスのいう「無知」の状態になってしまいます。そのためには生活や社会との関わり、いっならは自らの学びを支える「体験」が大事となるのです。

こうした流れの中で、2003年には、先の1996年の答申を踏まえて「生きる力」は、「確かな学力」、「豊かな人間性」、「健康体力」の三つの構成要素を用いることによって、学歴や人間性の評価に「一つの変化を求めたといえます。「新しい」とは、従来の「古い」に比べ、「自ら学ぶ意欲と社会の変化に対応できる能力」を強調しています。詳細を述べる余裕はありませんが、結論からいいますと従来の評価の観点が「知識・理解」を重視していたのに対して、「新しい学力」観は「関心・意欲・態度」という児童生徒の情意的な側面を重視した点に注目せねばなりません。学力の「結果」より、その「過程」の重視です。さらに、2003年には、「確かな学力」として、「自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」と規定されました。

大学入試の受験者がピークの際に「新しい学力」が、そして日本の学力が国際的に問題となった時に「確かな学力」が強調されています。この流れは、単なる学力の向上ではなく、「順位」よりも「個性」を重視することで、「人」がより「人」となること

素として総括されたのです。これらの三つの統合はまさに全人教育、全面発達を意味するもので、この知・徳・体のバランスの大事さは、説明の余地がありません。狭い「知」の世界のみでは、人間の成長は偏ってしまいます。とはいえ、ホンネとタテマエが交差する学校の現状では、このバランスはどうしても壊れてしまうのです。それだけに「生きる力」の基本理念を小・中・高それぞれの段階で「学び」と「行い」の両面から正しく理解・定着せねばなりません。そうでないと、狭い「学力」観のもとでは一面的な人間形成を押し進め、人間としての主体性や自己実現への意欲、いわゆる「人らしさ」を低下させることにつながるからです。

「生きる力」としての学力

学校教育において、学力観は「新しい学力」から「確かな学力」として移行してきました。「学力」には新しいも古いもないのですが、「新しい」とい

「自分」が「自分」になること、まさに教育の本質に戻ること示唆しています。要するに、これまでみてきたような「主要5科目」、「偏差値」、「受験学力」などの狭い学力観から脱皮しないと現実の学校教育に残存する「学歴」、「格差」、「競争」などに関わる深刻な諸問題を解決することが不可能ということです。すべての児童生徒が人間として自己成長していける「学力」でなければなりません。

このようにみてきますと、「新しい学力」も「確かな学力」も自ら考え判断する、いわゆる自己教育力を重視するという立場は全く同じです。ということとは、「学力」そのものが、「自ら学び自ら考える力」を意味していますし、このこと自体が自らの「生きる力」を選択し、よりよく問題を解決を図るといって「生きる力」そのものの核心部分を示しています。当たり前のことですが、「生きる力」は本人自身が成熟させねばなりません。ここに、「生きる力」の知的な側面としての「学力」をその原点に立ち返って、

すべての学校段階で問い直すことが求められているのです。偏差値的尺度で優劣をつける「学力」から、「生きる力」に結び付く「学力」への意識改革が不可欠なのです。大事なことは、どう「学力」を「学ぶ」ことの意味と「生きる」ことの意味から問い直すか、ではないでしょうか。

人間は人間らしく、自分らしく生きるために学ぶのです。そこに「生きる力」が本人自身の体験とも結び付いてくるのです。これまでの教育論をみても、ルソーやペスタロッチらが主張した児童中心主義の考え方、そしてデュロイの経験論、さらに最近の問題解決学習などのさまざまな教育論を挙げるまでもないでしょう。「学力」を進学目的からとらえるのではなく、「生きる力」の構成要素として正しくとらえ直していかねばなりません。「学力」の向上を否定しているではありません。学校は、児童生徒の「生きる力」を向上させるために「自らが学ぶ」意欲を意図的に高めていかねばならないのです。

あります。逆のいい方をしますと、自己の「人格」との関わりが深い教科外、すなわち「特別活動」は軽視されてしまうということです。学力主義が成績主義にすり替えられ、進学目的のための知識の獲得に奔走させられる教育では、とても他者や社会とのつながりと関わる自己の「生きる力」としての体験や経験は期待できません。集団や自立との関わりが深い「特別活動」を通じてこそ、子どもの自律性や実践的態度が養われ、人間としての豊かな言みが可能となり、総合的な「生きる力」が育つ教育基盤が整つていってよいでしょう。

提言Ⅱは、「職業教育」への正しい認識・理解を深めることです。学習成績・入試の図式をより鮮明化する教育では、知識を受験の手段として、その「活用」への関心をなくしてしまいます。その一方で「働くこと」や「職業」への関心を弱めてしまい、「職業教育」への抵抗を大きくします。普通高校と専門（職業）高校との優劣・高低の見方も生んでき

「生きる力」の育成のために

現実には、この「生きる力」の育成に深い関わりを持つ義務教育に対して、根源的な三つの提言を試みてみましょう。この提言は、学校教育を先に述べた全人教育や全面発達から、つまり選抜のメカニズムから人間陶冶という教育の本質に立ち戻って、児童生徒が自ら知識を活用できる機会の重要性を論じることにもなります。また、自分を自分で知ることにはかなりません。このことは、目先の成績や進学との関わりだけでとらえる「学力」ではなくて、人生や生涯を見据えた「生きる力」の広い見方からの「学力」向上を図る条件整備ともいってよいでしょう。

提言Ⅰは、「特別活動」への意義・関心を深めることです。まず、体験活動の充実です。狭い学力中心では、どうしても成績と関わりが深い「教科」にウェイトが置かれます。主要5科目という「主要」の意味は何でしょうか。未履修問題もこの延長上にあります。普・工・商・農という高校の序列化を表す差別的な表現さえ存在するのです。生徒を学力や学歴で差別することは許されません。「生きる力」を育てる教育は、人生における社会・職業生活を視野に、小学校では「生きる力」の基礎、中学校では「生きる力」を選ぶ力、高等学校では「生き方（在り方）」を考える力、を強く求めてきます。この上に、大学では専門分野と職業との関係を踏まえた職業教育の高い質の確保が問われています。現在、多くの大学で、学生への社会的・職業的自立に向けた指導体制の整備・実施が進められています。こうした典型的な動きがキャリア教育の全学校段階への導入にほかなりません。キャリア教育は、目先の進路（職業）選択ではなくて、マインドがいつように生活や職業の具体的体験活動を通じて「多くの実践経験が積み重ねられ、それらがさまざまの試練を経る中で生まれるものだ」と解したいものです。

提言Ⅲは、「生徒指導」の哲学・理念をしっかりと

ととらえることです。学校教育において、「個性」よりも成績の「順位」が優先されるようになると、教育が手段化され、自己概念の明確化が難しくなり、無気力の児童生徒が多くなることは経験上でも明らかといえます。そこでは、生徒指導が児童生徒の補導や矯正として解されやすくなるからです。今まさに問われていることは、「学校の人間化」にほかなりません。このことは、「生きる力」でいう「豊かな人間性」、つまり「自分」と「他人」とのつながりを強める大切さです。この面で、生徒指導は進路指導も取り込んだ「生きる力」を育てる広い指導領域だけに、この正しい哲学・理念の定着によってこそ、自己指導力や社会性を育てる条件・環境が整ってくるといえます。

人らしく「生きる力」を

こうした三つの提言の意味するところは、これからの学校が、「経験すること」、「働くこと」、「協力や「知識」を生かせなければ、実際には分かっているという「無知」になってしまいます。「学力」は単なる「知」ではなく、それを活用して自己の「行」に生かさねば何もありません。教育基本法という人格の完成」も、この人としての「生きる力」をどう育成していくかということと重なってきます。結局、「知」を「行」に生かす力こそが「生きる力」とすれば、まさに「人間」としての自覚と、その総合力が問われてきます。

ここに、本学の校歌にある「人らしき人にあるべく輝ける明日を望みて 若き日の今日を学ばん」の「人らしさ」の重みを再認識させられます。高等教育のユニバーサル化の下で、大学教育もこの「人らしき人」を再認識し、総合力としての「生きる力」としての「学び」の育成条件を高等教育というより高い次元で真剣に検討・整備する時期に来ているといえます。大事なことは、「生きる力」を単なるスローガンとしてではなく、小・中・高・大のすべて

すること」をより充実させていくことによって、学びとしての「学力」の質を高め、「生きる力」をより育成していかねばならないということです。この育成が図られれば、スーパーがいう「自己概念の明確化」が可能となり、自分らしく社会でたくましく生きていけるのです。「学力」のみが向上しても自分からなければ進路（職業）選択もできないのです。教育は、ベスタロッチがいうように（頭（知）と手（行）の統合にほかなりません。そのためには教育は「学ぶ」ことと「働く」ことの結び付きまでにせり上げていかねばならないのです。この三つの提言は当たり前のことですが、今日の教育で軽視されている側面であることを今一度、すべての人が再認識・共通理解すべきことだと思います。

そうしますと、「生きる力」は、「知行一致」と重なってくるといえないでしょうか。人間は「知」と「行」がなかなか一致できません。「言うは易く行は難し」です。いつまでもありませんが、「学力」

の学校段階で、その実効をいかにあげていくか、です。そのためには、ここでは述べる事ができませんでしたが、キャリア教育の理念や実践との関わりが不可欠だということはいつまでもありません。

# 現代日本における

# 医薬品にかかわる問題点

## 薬とともに43年

はじめに

2009年度の国民医療費が増加の一途をたどり、36兆円を超え、過去最高であったと発表されました。このまま推移すれば、国家財政は立ち行かなくなり、医療の質を保ちながら、少しでも改善する方が必要です。その一つとして、例年6〜7兆円使用される薬剤費のコストダウンが考えられます。

福岡県では、2007年、全国で初めて独自にジェ

ネリック医薬品使用促進の協議会を立ち上げ、国政でも同年使用を促す国策を実施し始めました。ちなみに、私は薬学部の教員として43年過ごし、現在、福岡県ジェネリック医薬品使用促進協議会に参加しています。

このような状況下、いま一度薬の本質について考えてみましょう。

薬が効くということ

薬効は薬と生体との反応です。薬物(D)のすぐそばに体側の薬物を受け取るもの(R:受容体といいますが「DR」のように合体した状態で、初めて効果を表します。従って、結合状態の「DR」が多ければ多いほど効果が強いと言えます。薬効は変動するので、一つの関数(f)としてとらえることができます。その(f)は、大きく三つの因子によって変化します(薬効=f(薬の固有活性×人の感受性×薬物濃度))。実質的には、結局、一個人の薬効は、薬物血中濃度に強く依存することになります。

「薬効=薬物血中濃度」の関係です。

薬の血中濃度が低ければ、効き目がなく、病状は悪化し、逆に異常に高ければ有害作用(中毒域)を起します。その間の適正な量るとき適正な薬の効果が生まれます。従って、効果を維持することはとても厄介です。少な過ぎてても多過ぎてても駄目で、適正な量が必要とされます。

一方、多くの人々の間では、薬は用いたら必ず効くとは限りません。効かない人も、反対に効き過ぎるのを通り過ぎて、有害作用を呈する人もいます。従って、なるべく多くの人が安全に効くような新薬が必要なのです。

医薬品はどのようにして作られるのか

医薬品について語るとき、欠かせないのが「特許権」です。我々が享受している物品の中で最も厳格に規定されています。国際的に言いますと、各国が独自に審査権を持っていますが、ある国のあるメーカーが、最初に自国のみならず他国も併せて取ると、結果的に世界中から利益を独り占めることになり、他国や他社は手出しができません、その一社から輸入して使うこととなります(利益独占権)。特許の種類もいろいろあり、物質特許、製法特許、製剤特許、用途特許などありますが、詳細については紙面の都合上割愛させていただきます。

見えなかった注意点を問題点が出てきます。合併症  
それは新薬が売り出されると、世界中の人が使いま  
す。その中には臨床試験では得られなかった、また  
権利は、未来永劫続くといい考えはありません。  
（図1参照）。発売後はすべて先発品と同じ規制が  
かかります。

さて、この先発の民間企業の独占的利潤確保の  
権利は、未来永劫続くといい考えはありません。  
それは新薬が売り出されると、世界中の人が使いま  
す。その中には臨床試験では得られなかった、また  
権利は、未来永劫続くといい考えはありません。  
（図1参照）。発売後はすべて先発品と同じ規制が  
かかります。

ジェネリック医薬品（後発医薬品）とは  
定義的に言うと、先に開発された薬（先発医薬品）  
の特許満了後にほかのメーカーが「同じ有効成分、  
同じ効能・効果として申請し、国が認めた薬」です  
（図1参照）。発売後はすべて先発品と同じ規制が  
かかります。

ジェネリック医薬品（後発医薬品）とは  
定義的に言うと、先に開発された薬（先発医薬品）  
の特許満了後にほかのメーカーが「同じ有効成分、  
同じ効能・効果として申請し、国が認めた薬」です  
（図1参照）。発売後はすべて先発品と同じ規制が  
かかります。

制度は世界とつながり、WHOが中心となって、日々、  
世界中から上がってくる情報を整理します。そこで  
問題があれば直ちに世界中に注意や解決方法を知ら  
せ、各国は、末端の医療関係者に通達しなければな  
らないようになっていきます。ここで重篤な障害など  
が出れば国家が保障することになっています。

要点は、新薬メーカーでは物質特許が20年（最長

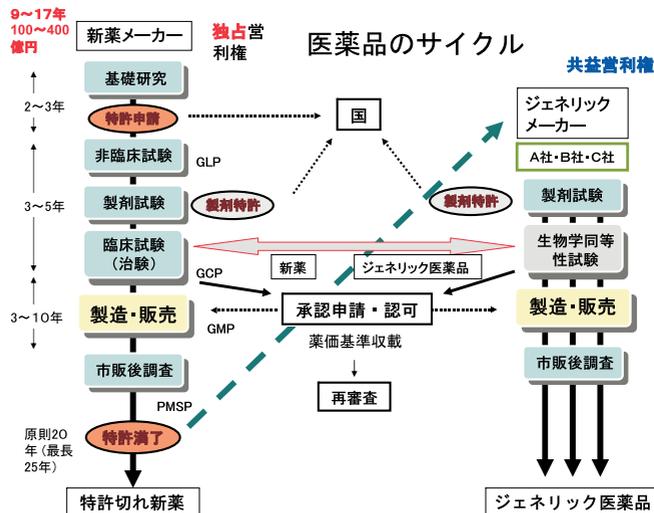


図1 医薬品のサイクル

ということになります。新薬では、売り出すまでに  
100〜400億の開発費用が掛かると言われます。  
図1の各ステップにはとても厳しい規制があり、す  
べてクリアしなければなりません。例えば、動物実  
験のネズミにしても、血統が決められていてしかも  
無菌的に飼育されたものを使わなければなりません。  
またその施設でも厳しい規制があり、ウイルスが通  
らない実験室もあります。中でも患者を対象とした  
臨床試験が最も厳しい規定と膨大な時間と費用を要  
するところです。試験はICHといって、日本・ア  
メリカ・EU共通の高いレベルの規定で行われます。  
しかし、これらの開発に掛かったすべての費用は  
薬価に反映されるので、新薬は高価となり、先発品  
あるいはブランド品とも呼ばれます。市場に出てか  
ら市販後調査が行われ、不具合や問題点などが副  
作用報告として、全国の医療機関から厚生労働省に  
通知され、また必要に応じてフィードバックされ、  
安全性を確保しています。さらに、この副作用報告

を幾つか持つ場合、たくさんの薬を使っている場合  
もあります。それらの相互問題点などはすべて世界  
中の患者さんからの情報です。そのため特許が切れ  
るまではそれらに注意し、さまざまな問題点を改善  
し、独占営利を認めますが、「特許満了後は、その  
薬や情報は万民のため共益財産に帰する」という世  
界共通の理念「先発会社の私的財産保護から世界中  
の人の公益財産となる」を理解し、認めてもらわな  
ければなりません。

すなわち、ジェネリック医薬品は日本国内でみる  
と、外国の良薬を得るとき、海外に特許対価を支払  
うことなしに、必要な医薬品を自前の国産品として  
自由に取りそろえることができることを意味し、ま  
たこの国の企業でも同様にその権利を持っています。  
有効成分含有率が先発品の±20%であることの規定  
や臨床試験の代わりに生物学同等性試験で、先発品  
と人の血中濃度に差がないことを計るなど多数の厳  
格な規定があります。世界中の人の使用データがあ

るので、先発品の臨床試験までは免除され、その前の段階の開発費も不要です。その分、安価に製薬することができます。

さて、我が国の基本となる医薬品は国で決められていて、それが日本薬局方に規定されています。世界各国、独自に同じものを制定し、国の医薬品として認定しています。この中身の大変重要な部分は、医薬品の純度・品質・安定性を規定しています。図2は一例として抗てんかん薬の日本・アメリカ・イギリスにおける品質規定の中身の比較です。まず、純度ですが、日本は世界一高い純度に設定されています。さらに中に含まれているほかの不純物質は、イギリスも少し規定していますが、日本は、塩化物やヒ素の含有限界まで規定するなど、先進国のどこにも見られないような厳しい内容となっています。

日本薬局方に記載されている医薬品はほとんどがジェネリック医薬品に当たります。新薬も日本薬局方外医薬品規格で規制され、この基準に準じていま

ないかという問題が取り上げられることがあります。化学的視点から厳密に言えば、同一物ではありません。これは薬の製剤化からくる問題です。先に述べたように、有効成分は先発品と同一物ですが、人に飲ませるように錠剤化するときには必ず添加剤が必要で、この添加剤の選択や配合は、ほかの特許などの関係で同一にすることができません。しかしこの添加剤は、全く薬効があるものではなく、無害であり、有効成分に何ら影響しないものです。それらの種類や品質について、日本薬局方の規定に準じ、医薬品添加物規格や食品添加物公定書に厳格に規定されています。従って、先発品もジェネリック医薬品も同じ添加剤を使いますが、その組み合わせが多少異なり、臨床的に薬の目的である効果としてみれば、限りなく同一と見なしてよいのです。さらに、製剤的に後から出るので、飲みやすさなどいろいろな工夫をすることができます。

図2 日本・アメリカ・イギリスにおける薬の品質規定の比較  
日本・アメリカ・イギリスの薬局方における  
主要薬の含有量等規格の比較

	日 本	アメリカ	イギリス
バルプロ酸 ナトリウム	98.5%以上	98.0~102.0%	98.5~101.5%
塩 化 物	0.050%以下	-	-
硫 酸 塩	0.048%以下	-	0.1%以下
重 金 属	20ppm以下	0.002%以下	20ppm
ヒ 素	2 ppm以下	-	-

ただし、アメリカ、イギリスではバルプロ酸フリー(なし)として記載

結論的に、世界で最も高い品質を課している

す。すなわち、我が国の医薬品は世界一高品質と云うことができます。

ジェネリック医薬品は先発品と同一物か、そうで

安全性が高いのは、先発品とジェネリック医薬品とはどちらでしょう

断然ジェネリック医薬品です。1997年~2007年までに国から全医療機関に緊急に伝えられた問題点を見ると、圧倒的に新薬に多いことが明らかです(16件中11件)。早いものは販売後数カ月で副作用や注意点が表れています。もちろんそれを呈した患者は重篤にならないように治療されますが、これも先ほどの副作用報告に載り、世界中に発信されるだけでなく、世界からも知らされてきます。先発品は臨床試験でより良い効き目と安全性を調べますが、それが絶対的なデータではありません。また、残りの件のジェネリック医薬品となったものでも、10~20年後にこの緊急安全性情報が出るものもありますが、これはジェネリック医薬品に問題があるのではなく、医薬品とはこのようなものです。使われるケースが少ないとなかなかはっきりした真実が見えてきません。長い間に使われて例数が増え、薬の

世界のジェネリック医薬品シェア比較 (2010)

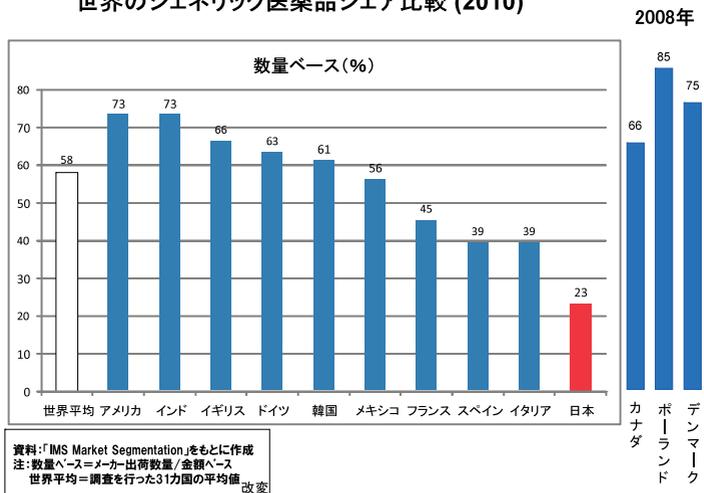
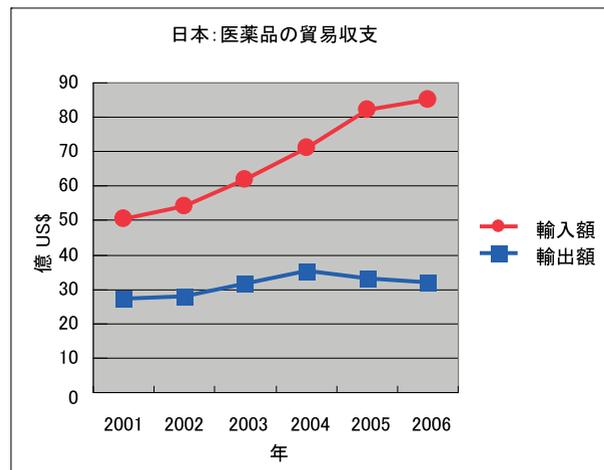


図4 世界のジェネリック医薬品シェア比較

性質が明らかになり、先発品製薬会社もジェネリック医薬品会社も等しく注意をしなければならぬこともあります。

ジェネリック医薬品の使用状況と医療経済学的視点  
少し、視点を考えてみましょう。図3は日本の医薬品に関する貿易収支です。赤が輸入で黒が輸出です。明らかなように、収支は赤字で、大量に海外から医薬品を輸入しています。この中には特許が切れた新薬も大量に含まれています。日本も個々の先発メーカーとしては頑張っているのですが、新薬の国際競争には遅れをとっています。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、スイスに歯が立ちません。

世界に誇る技術と能力を持っているのに、なぜなのでしょう。すべての医薬品・医療関係者に考えていただきたいのですが、一般市民も含めて、「高い方が安心」「見慣れた薬が良い」「聞いたことがない会社だね」とか、ほかの商品・食品のような感覚で見



90億ドル(2006年平均レート116円換算で1兆0440億円) OECD Report 2008

図3 日本の医薬品に関する貿易収支

ているのではないのでしょうか。抱かれている不信感  
はこのような漫然とした不安感からくるのではない  
でしょうか。医学・薬学は科学です。現代科学の  
もとに考えれば、ジェネリック医薬品は先発品と何  
ら遜色ない医薬品なのです。

世界のジェネリック医薬品の使用率

世界各国のジェネリック医薬品の使用状況を図4  
に示します。その中から、一例としてアメリカを見  
てみましょう。製薬会社世界ランキング10社の中に  
新薬メーカーが半数を占めるトップの国でも、ジェ  
ネリック医薬品が73%も使われていることは、何を  
意味するのでしょうか。これに対し、我が国はやっと  
23%を超えたくらいです。

世界的に、薬物療法に新しい考え方が生まれてい  
ると感じます。従来の医薬品で十分良い人々には安  
全性の高い安価なものを使い、そうではなく新薬が  
絶対的に必要な人には新薬を使うという個々人に  
あった薬物療法が行われていると感じます。「患者  
中心の医療」という言葉は耳にしますが、日本では  
まだ遠い感があります。特許が切れている高価な新  
薬(「特許切れ新薬」「長期収載品」ともいう)を使  
い続けているのです。

おわりに

新薬の開発競争は先進国間で激しさを加速させています。これにも対応が必要です。

一方、先ほど述べましたように、ジェネリック医薬品は特許が切れる前までは、世界中で一流の先駆品であったわけで、それを国内のジェネリック会社が国産品として取りそろえることができるということは、重要な意味を持つと思います。

グローバル化がますます進展する中で、世界平和の危機や貿易摩擦などがあつてはなりません。万が一の時や類を見ない天変地異の時などに国産で備えておくことは、国民の健康・一定の医療水準の保持に対する最後のセーフティネットと言えるのではないのでしょうか。

また、我が国のジェネリック医薬品会社は、その高品質さをセールスポイントとして、世界市場に挑戦し、国家財政に寄与すべきと考えます。そういう環境を皆で整えることが極めて重要であります。

さらに、我が国は「国民皆保険制度」を採っています。これは理念的に国際的模範となる制度です。

若い人がその時代のお年寄りの面倒を見るという意味です。しかし、残念ながら少子高齢化が進み、破綻の憂き目を漂わせています。改革は必要ですが、今、できることから成すべきと思います。高齢者の方々のお子さんあるいはお孫さんも、社会人として給料の一部から保険料を納めているでしょう。高齢者は、それを使わせてもらうのですから、できるだけ負担を軽くするジェネリック医薬品も積極的に使ってほしいものです。

本編が、医薬品について真に考えるきっかけとなれば幸甚に存じます。

文献ならびに資料

日本薬局方

厚生労働省 統計情報・白書

[http://www.mhlw.go.jp/toukei\\_jakusho/](http://www.mhlw.go.jp/toukei_jakusho/)

## 家族内財の配分…利他的な心と家族

経済学部 教授 姜文源

本稿では家族を中心に人の利他的な心が社会に与える影響について話をしたい。まずはアメリカで起きた女性解放運動から話を始め、この女性解放運動は白人家族を守るための動きであつたがそれが結果的に黒人家庭を崩壊させたことを説明する。黒人家族の崩壊は全体的な家族神話の崩壊をもたらし、離婚率が増えるなどのさまざまな家族内の問題を引き起こすようになった。家族内の問題を解決するには利他的な心が必要である。本稿では人の利他的な心が他人の利他的な心を誘発することを説明し、私たち一人一人の利他的な心が健全な社会を維持していく上で非常に大事であると主張する。

### 1 アメリカの女性解放運動

1960年代はケインズ的な財政政策が積極的に採用されてインフレ率がとても高い時期だった。さらに、この時代になって①新車を買うこと、②カラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機などの新しい家電を持つこと、さらには③子どもを大学に行かせることが普通になってきた。私たちの消費は社会的なものであるもあって、私たちはできるだけ社会的に普通のレベルには達したいとの欲望を持つものである。自分が幸せかどうかは他人との比較によって判断されるものでもある。60年代のアメリカでは、標準的な生活維持するための必要所得が急増した。男性が

家族の大黒柱になれた時代は終わるのである。

アメリカの女性解放運動は1969年から始まったとされる。この年に多くの白人家族の母親たちは町に出て、「女性にも仕事を」とデモをするようになった。69年というのにも意味があって、このころになると戦後のベビーブーム時代に生まれた子どもたちが大学に進学するようになったのである。つまり、女性解放運動が69年に起きたというのはこの運動の背景に経済的な原因があったことを示唆する事実でもある。男性が大黒柱になれず、標準的な生活をしていくには女性も労働市場に労働を供給する必要が出てきたのだ。この運動は白人家族の母親たちが子どもを大学に進学させるために、そして新車を買ったために、つまりは家族の「普通の生活」を守るために起きた。

しかし、家族を守りたかった白人女性の運動は黒人家族を崩壊させるという思わぬ結果を生んだ。女性解放運動の展開を受け、アメリカの企業は黒人男性にとつて結婚するのが自然であり、結婚しないのは不自然である(1)②昔の家族は一家だらんであった、③世の中には完璧な家族が存在する、である。90年代に入るとこのような考え方は社会的な支持を失うことになる。いわば家族神話が崩壊したという時代になるのであった。

1960年代、70年代にかけては、「完璧な家族」を描いたドラマがテレビでよく放送され、人気を得ていた。例えば、アメリカでは「大草原の小さな家」が白人の理想的な家族像を、「Cosby Show」が黒人の理想的な家族像を描いたドラマとして大人気だった。日本でいうと「サザエさん」が日本の温かい家庭生活を描き、人気がある。サザエさんの場合は今でも人気があるが、世界的にみると(昔NHKで何度も再放送していた人気ドラマ)「大草原の小さな家」のような家族ドラマは視聴率が取れなくなったし、制作もされなくなった。このような家族ドラマが描く家族があまりにも非現実的なものになってき

性をリストラし、白人女性を雇うことになる。仕事を無くした黒人男性は家計を維持するのが難しくなり、その後、黒人家族の離婚率が急増することになった。1974年ごろにアメリカではAFDC法が制定されるが、これは黒人の未婚の母、母子家庭を保護するための法律である。黒人家族の崩壊が目立つようになって、未婚の母や母子家庭が増え、「温かい家庭の暮らし」を経験したことのない黒人少年・青年の犯罪が大きな社会問題になってくる。アメリカのことをよく犯罪社会と呼ぶが、その原因を作ったのが70年代に起きた黒人家族の崩壊である。黒人家族の崩壊は、その後、家族の概念をも変える大きな動きの前兆となった。それは「家族神話の崩壊」であった。

## 2 家族神話の崩壊

家族神話というのは三つの内容から成るものであった。その内容は、①結婚しないのはおかしい人たのである。

家族(神話)の崩壊は晩婚化、離婚率の増加、母子家庭の増加、出生率の低下などの社会問題を生んだ。別の言い方をすれば個人が家族という束縛からより自由になったとも言える。確かに、結婚をするのも、しないのも個人の自由な選択であるはずであって、結婚しないことをおかしいと考える理由は何もない。一方、家族の崩壊が多くの社会問題の原因になっているのも事実である。過去においては、社会性や他人とのコミュニケーション能力などは「普通の家族生活」の中で身に付ける能力であった。家族が崩壊していくことによって、自分のことしか考えない悪い意味での個人主義もまん延してきたと思う。この点については次の節で述べたいが、ここでは簡単に中国の一人っ子政策を例に挙げて、個人主義と家族の関係を説明したい。兄弟がならず、一人っ子の場合「私たち」という集団の概念を家族の中で学ぶ機会がない。兄弟がいる場合、子どもは

「私たち（自分と母親、あるいは自分と兄弟）」と「あなた（ほかの兄弟）」、「あなたたち」という区別を学び、「私たち」という他人との連帯を学ぶことができる。兄弟がいないと子どもと母親の関係は「私」と「あなた」の関係でしか成立しなくなる。母親と二人以上の子どもがいるとき（つまり、3人以上の人間関係の中で）、「私たち」という概念が成立するのである（もちろん、父親が子育てに積極的に協力するならば話は別だが、そういうケースは中国では少ない）。最近、中国では（悪い意味での、他人のことに興味を持たない）個人主義が問題になっているが、これは一人っ子政策と関連しているものである。

家族の崩壊は家族の概念そのものをも変えている。「家族とは何か」という家族の定義に関するものだが、経済的にいうと家族の「定義」は扶養手当の適応範囲、家族保険の適応範囲、遺産相続関係を決めるものでもあって重要な意味を持つ。今は絶対多数

### 3 家族内財の配分

ノーベル経済学賞を受賞したG.ベッカーは家族構成員の利己性と利他性についての研究でも有名な教授である。彼はいわば「不良」になる子どもたちを研究して、子どもが利己的になり、他人のことを配慮しない逸脱行為をするのは、家族の中で親の利他性が足りないからだと指摘してきた（このような彼の考えは Rotten Kids Theorem として知られている）。私は彼の考えや理論を家族全般について拡大し、女性がいわば悪妻になるのは夫の利他性が足りないからであるとの理論やデータを構築している。ここではその内容を少し紹介しよう。

私が考える「悪妻のモデル」は以下の定義・経験的事実に基づいている。

- ① 利己的な夫とは家族内財の配分において（簡単にいうと）家族収入の配分において（自分自身の消費水準を優先的に考える人のことをいう。良妻とは夫の判断を尊重する妻のことをいう。

を占める家族の形態というのは存在しない。先進国において共通することだが、例えば、アメリカを例に挙げると、アメリカでは①夫婦と子どもで構成される家族、②夫婦のみの家族、③ひとり親の家族、④一人暮らし、がそれぞれ25%前後を占めている。夫婦と子どもがいる家族を「普通の家族」と考える根拠はなくなっているのである。このような社会的変化と共に、家族とは何か、という「定義の問題」が台頭してきた。昨年（2011年）から、ニューヨークでは「同性愛者同士の間を法的に認める」とこととなった。「同性同士の家族」を認めているか、という問題だったが、そもそも家族の定義がともあいまいになってきて、家族とは何かが分からなくなったともいえる。将来的には「子猫などのペットも家族として認め、ペットに対する保険や扶養家族手当てを認める」とことになるかもしれない。今はそう思えるほど「家族」という「概念」そのものが崩れている。

### 悪妻は良妻の反対。

- ③ 良妻を持つ男性は仕事において良い実績を残す確率が高くなり、その結果、将来の収入増加が見込める。

さて、このような前提の下で私の家族モデルでは、「女性が良妻賢母になるのは夫が家族内で利他的な姿勢を示す場合に限り」ということを証明している。そのメカニズムは単純であって、利己的な夫のいる家庭では女性が良妻になることがその女性や子どもにとって何も「得」にはならないのである。夫が利己的な男性であつたら、女性が良妻になり男性の意見に従い、そして将来の家族収入が増加するとしても、その収入増加のもたらす幸福は夫が（ほぼ）独占することになる。女性が良妻賢母になって、その良妻賢母ぶりが子どもや奥さん自身を含む家族の幸せに結び付くのは男性が利他的な場合に限るのである。そうではない場合、女性には良妻賢母になる「理由」がなくなり、それよりは最初から悪妻になり、

利己的な夫から適正な家族内財配分を、勝ち取る。方がその女性や子どものための得策になる。夫が利他的な姿勢を示す場合に限って、妻も利他的な良妻になるのである。

人の利他的な態度は他人の利他性を引き出すという命題は家族の中だけではなく、社会全般に適用できる命題である。この命題が適用される一つの例を挙げよう。アメリカのニューヨーク州にはとても古い橋があるという。道幅の狭い橋で、車は一台しか通れないという。なのに、朝と晩の出勤・帰宅時間には交通量が多く、いつも渋滞が起きるらしい。なぜ新しい橋を造らないかはよく分からないが、面白いのはこの車一台しか通れない幅の狭い橋が大きな交通トラブルを起こさず維持されているという事実だ。一台しか通れない橋で、交通量も多いとなると、この橋は混雑時には一方通行の橋になると思える。警官が出て交通整理をし、橋が一方通行にならないようにするなら別だが、このニューヨークの橋の前

事例だが、実は私たちの社会がうまく機能するには利他的な心遣いが大事だということ、そして、人の利他性が他人の利他性を引き出すという私たちの命題を証明する事例だとも言えよう。

人間、自然、社会的な信頼の定義自体が流動化するることによって起きる人間の不安をポラニー的な不安という。前で説明したように、今私たちは家族という定義が激しく流動化している時代に生きているのであり、その中で個人の不安が発生することは経済人類学者として著名なポラニーが指摘していた通りである。そして、家族の定義を流動化させているのは利他性の欠如であるかもしれない。私たちは他人に迷惑を掛けない限り自由であるとはJ.S.ミル以来の社会的合意であるといわれる。そう他人に迷惑を掛けない限り、人が利己的になろうが利他的になろうかは本人の自由かもしれない。しかし、人間は本来「社会的動物」であり、利他性というのは選択の問題ではなく、人間が原初的に持っている本性

で警官が交通整理をすることはないという。警官もいなく、車は一台しか通れず、交通量も多い橋のになぜ橋は一方通行にならないのだろうか。その答えは簡単で、橋の前で車を止め反対方向からの車を通す利他的なドライバーが存在するため、この橋は一方通行にはならないのである。例えば、一つの方向で20台ほど車を通ったら次のドライバーは橋を渡らず橋の前で待機する。すると反対方向からの車が橋を渡り、同じく何台か反対方向の車が通った後にまた反対方向の誰かのドライバーが橋を渡らず待機してくれるのである。「反対方向からの車も通らせてあげないといけない」と思う利他的な人が多く存在するため、この幅の狭い橋は警官の管理や監視がなくても橋として機能しているのである。この事例だが、最初は誰か利他的なドライバーたちがいて、その利他的な心遣いがこの橋を利用する多くの人々を納得させ、橋の利用者の中、利他的なドライバーを増やしてきたとも解釈できる。つまり、この橋の一つだと思ふ。動物の世界も弱肉強食だとよくいわれるものの、実は動物は競争よりは協力を選ぶ場合が多いのである。

人には本来利他性が備わっているものだと思うが、今なぜ利己的な行為が目立ち、その利己性が家族の崩壊をももたらしているのだろうか。それは社会のあまりにも多くの部分が市場化・商品化されているからだと思ふ。しかし市場は自然発生的なものだと誤解されることも多いが、市場や商品を規定し、作り出すのは制度であって、自然ではない。

例えば、昔は奴隷の市場というのが存在したが、今は存在しない。なぜか。人間を商品化して売買するのは道徳的に認められるものではないということ、制度的に禁止されているからである。19世紀に中国ではアヘン戦争が起きたわけだが、これもアヘンの市場を制度的に認めるべきかそうではないかといったイギリスと中国の意見対立に起因したものであった。今サブプライムローンの証券化から始まっ

た世界金融・経済危機が問題になっているが、この問題の根底にあるのも「サブプライムローンの活用を認めた制度」と「そのサブプライムローンを証券化する」ことを認めた法律」である。この問題を市場の不安定性として理解する人も多いが、それよりは、制度的な不安定性が今の経済危機の根本にあるはずである。市場の領域を適正に管理・制度化しながら人間の持つ利他性を回復していくのが、今私たちが直面している課題であると私は思っているのである。

よく、「お客さんの笑顔を見るとうれしくなる」といったアルバイトでの経験を話す学生たちを見る。他人の幸せから喜びを感じる気持ちこそが利他性の基本ではないかとも思う。利他性とは現代社会に根強く残るさまざまな「不安」を取り除く大事な人間の本性である。その本性が安易に市場を拡大させてきた制度的不安定性から弱くなってきているのかもしれない。幸いなことに利他性は伝染するものであって、あなたが他人に利他的に接したらその他人

もあなたに利他性を示すものである。他人の笑顔が欲しいときはまずあなたが他人に笑顔を見せればよい。私たちが他人に利他性を見せることによって、利他的なモラルに基づく健全な社会がつけられると思う。それは日本人が昔から美德としてきた「和の精神」だとも思う。

## 福岡大学総合科学研究チーム 「胃癌多発国を対象とした胃癌診断の global e-learning system の開発」の紹介

福岡大学筑紫病院 内視鏡部長 准教授 八尾 建史

昨日、英国の内視鏡セミナーでの講演が終わわり、今、英国の Nottingham から London に向かう East Midland Express Train の中でこの原稿を書いています。車窓からは、羊が牧場で草を食べている典型的な英国ののどかな田園風景を望めます。私は世界中の医師と交流し、現在、「胃癌多発国を対象とした胃癌診断の global e-learning system 開発」という福岡大学総合科学研究チームのプロジェクトリーダーを務めています。福岡大学発の人々の「生きる力」

を支える活動の一部を紹介したいと思いワープロのキーをたたいています。まず、その前に「なぜこのようなプロジェクトを始めることになったか」について説明したいと思います。

私は、現在、福岡大学筑紫病院・内視鏡部の診療部長を務めています。現在、私たちの内視鏡部では、主に胃腸の病気を持つ患者さんの診療を最先端の内視鏡を用いて行っています。内視鏡は、先端にビデオカメラが組み込まれた細い管を患者さんの胃や腸

に入れて、その中の状態をテレビモニターに映し、病気の原因を調べたり、癌の診断や治療などを行ったりする医療機器です。

日本は、1950年、胃カメラの開発に端を発し内視鏡の開発が最も進んだ国です。日本製内視鏡の世界に占めるシェアは90%以上です。私も本邦の専門医としてさまざまな胃腸の病気で苦しむ患者さんの診療に内視鏡を用いてきました。現在、ハイビジョン高画質で人の内部を観察できる内視鏡を用いています。私はこの恵まれた環境のおかげであらゆる胃腸の病気を持つ患者さんに内視鏡を用いた診療を行ってきました。同時に、技術者と新しい機器を開発し、新しい診断法の研究にも懸命に取り組んできました。2000年に、最新のビデオ内視鏡の先端部に、顕微鏡のように80倍まで胃の病巣を拡大できるレンズが組み込まれた内視鏡(拡大内視鏡)が、日本の内視鏡技術者により開発されました(図1)。

私が、その拡大内視鏡を用い患者さんの早期癌を観て胃腸の病巣のみを切除し完全に治療することができま。さらに、手術後にも後遺症が残らず、患者さんは、手術前とまったく変わらない生活を送ることが出来ます。そのために胃癌を早く小さな時期に診断すれば、それで命を落とすこともなく、治療後も、治療前とまったく変わらない元気な生活を送ることが出来ます。

早期胃癌は患者さんに痛みなどの症状を起こすことは一切ないため、症状がなくても内視鏡や胃透視による検診を受けないと早期癌を発見することはできません。一方、胃癌は時期が早ければ早いほど小さく平べったいので、最新のハイビジョン内視鏡を用いても診断が大変難しいのも事実でした。しかし前述した拡大内視鏡を用いると胃の表面の毛細血管という最も細い血管まで明瞭に観察できることが分かりました。そして、癌ではない病変を観察してみると、正常の毛細血管が整然と配列しているのに対し(図2)、診断が難しい小さく平べったい胃癌を

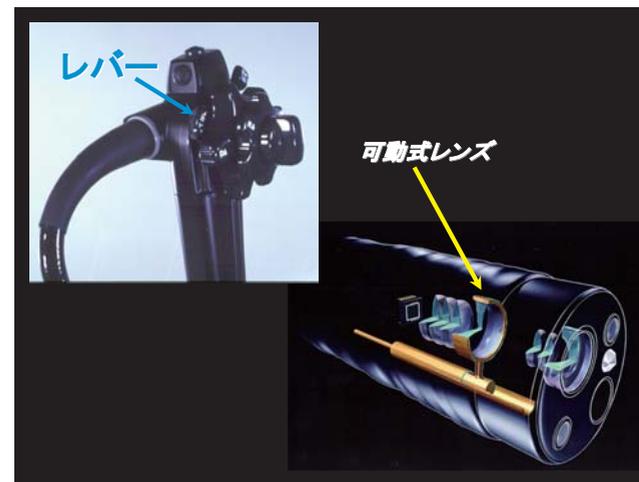


図1 拡大内視鏡。左の写真に内視鏡の手元操作部を示す。レバーを押すと、右の写真に内視鏡先端に組み込まれた可動式レンズが動き、対象を80倍まで拡大することができる。

察したところ、幸運にも早期胃癌の新しい診断法を発見することができ、2002年に世界に先駆けて報告することができました。

その診断法について少し説明を加えます。胃癌は早い時期に発見すれば、胃の内側から内視鏡を用い

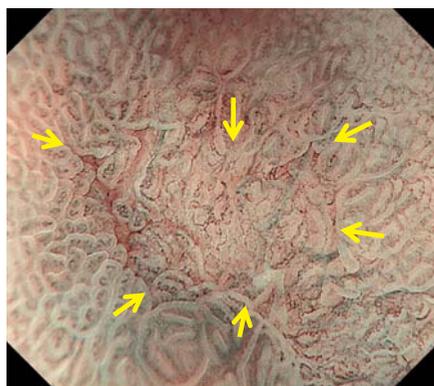


図3 癌の拡大内視鏡像。2mmの大きさの微小な病変(癌)焦げ茶色が血管である。矢印で囲まれた病変の内部に様々な形の微小な血管が観察され、不規則に配列している。このように2mmの癌であっても、拡大内視鏡を用いれば、血管は不均一な形を呈し、不規則的に配列していることから癌と診断できる。



図2 非癌の拡大内視鏡像。2mmの大きさの微小な病変(非癌)焦げ茶色が毛細血管である。矢印で囲まれた病変の内部に規則的な網目状に配列した毛細血管を認める。このように癌でなければ、血管は均一な形であり、規則的に配列している。

ました。講演後すぐ帰国し時差ほけのままeメールをチエックしていると、今まで早期胃癌を一回も診断したことのない英国の一人の先生が、「拡大内視鏡で早期胃癌を診断した」と内視鏡の写真を送ってきていました。私が講演してからわずか3日目の出



図5 2011年3月ボリビアの内視鏡セミナー。中南米各国から選抜された若い医師を指導しました。みんな目も心も輝いています。この若い先生たちが将来の胃癌多発国でのリーダーとして活躍してくれることを願ってやまない。

が少し変わりました。まず一つ目は、これまで私は、日本中や世界中のさまざまな国の先生方と交流でき、地域の医療を福

観察してみると、形も配列も不規則な血管が増生していること(図3)を発見しました。この知見と診断法により、今まで診断できなかったごく早期の癌を正確に診断できることが判明しました。そして、日本をはじめ世界中の医師から広く注目を集め、日本国内外を問わず、広くこの方法は普及するようになりました。そして、私は、おのずと国内や海外の先生方と頻繁に交流するようになりました。この方法について国内外から頻繁に講演の依頼や内視鏡技術指導の依頼があり、数えてみると、この10年間で日本各地に計115回、海外へは、14カ国33回招聘よびいされました。2007年からしか集計していませんが、福岡大学筑紫病院・内視鏡部へは、国内から27人、海外14カ国から25人の若い先生が研修に来ました。海外では、現地の指導的立場にある医師のみならず、次の世代を担う若い先生にも手を取って技術や考え方を教えてきました(図4)。海外の若い先生



図4 2010年コロンビアの内視鏡セミナー。中南米の指導医を集めたセミナーコースです。全員が国民の医療に直結することもあり大変熱心です。

来事でした。その後、私は英国の医師免許を取得し、英国のNottingham 大学病院に招聘され、2005年から1年間、英国の医師や英国に世界各地から留学している医師に日本の最先端の内視鏡技術を指導し、自らも英国の患者さんに内視鏡検査や内視鏡治療を毎日行いました。そして、拡大内視鏡で早期胃癌を診断する方法が、日本に少なく欧米に多い食道癌にも同様に役に立つことを証明することができました。

方もとても熱心で、目を輝かせて自国の患者さんの命を救うための最新の技術を学んでくれます(図5)。そして、訪問した国内外の施設の先生方と、その後もずっと交流が続いています。

2004年に英国のNottingham 大学で講演をし

岡大学筑紫病院で行い、世界の医療にも貢献できる医師としては幸運な立場でした。しかし、残りの時間で日本中や世界中を訪ねてもその国の一部の先生としか交流できないのは事実です。そして、欧米で学術的知見を発表すると確かに学術上の功績は大きいのですが、胃癌で本当に苦しんでいる国は、欧米ではなく、日本・中国・台湾・韓国などの東アジア、ロシア、ヨーロッパではポルトガル、中南米です（図6）。日本の研究者はいつも欧米の方に目を向けていますが、いくら欧米の先生たちを教育しても実際に胃癌で苦しんでいる胃癌多発国の人々の福祉・健康に直接貢献できないのではないかと、とあらためて考えました。そのような経緯で、この3年間、私は、これらの胃癌多発国の医師たちと積極的に交流するようになりました。これが、私のベクトルが変わった一つ目のことです。

また二つ目は、さまざまな国に内視鏡技術指導に行って実際に現地で医師に内視鏡技術を指導していた。早期胃癌は、胃粘膜表面から発生しますが、初期には、ほんのわずかな変化しか示さないで、まず胃の中を内視鏡でくまなく観察し、このわずかな変化を発見することが必要です。そのために、日本では胃を詳細に観察するために、まず、患者さんの胃の中をきれいにする薬を検査前に飲んでもらいます。そして、検査時には、胃が動いていると観察が難しくなるので、胃の動きを止める注射をします。さらに、胃の中に内視鏡を入れてからもほんのわずかな変化も見逃さないため、胃を空気で十分に伸展し、水で胃の表面を何回も何回も胃の表面に付着した泡や粘液を洗い流しながら観察します。そして胃の中に盲点をつくらないように、最低でも20枚、多い時は40枚もの写真を胃のすべての部位について撮影します。これらのことは、基本中の基本で、内視鏡を習い始めの若い先生は、先輩の医師から嫌というほどこの基本についてたたき込まれます。従って、胃

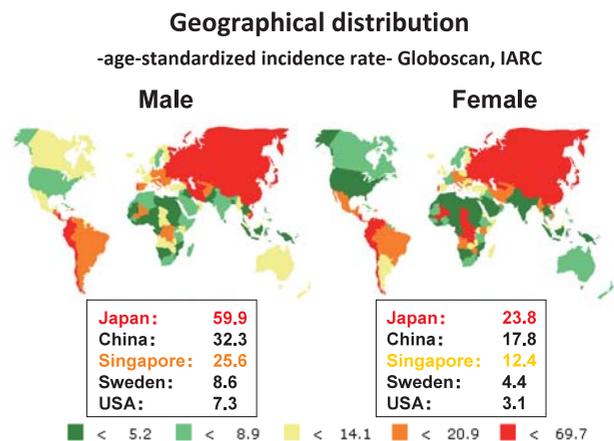


図6 胃癌の多発国の世界分布。赤色・オレンジ色・黄色・薄緑・緑の順番に胃癌の頻度が高い国を示している。赤色は、東アジア、ロシア、中南米、ポルトガルである。  
(GLOBOCAN 2008より引用)

ると、日本国内とはだいぶ事情が異なっていることが分かりました。日本では、胃癌の早期診断のために先人の偉大な先生方がものすごい知恵とエネルギーを費やし、私が内視鏡を習い始めたときには、胃癌を発見するために必要な方法が確立されています。

癌を発見するための日本の内視鏡検査は、10分から15分かかります。

ところが、海外の先生方の内視鏡検査は、日本と異なり、このような基本的なことがまったくできていないほど導入されていません。前述の基本的な準備や詳細な観察もなく、4分程度で泡だらけの胃粘膜をさつと観察して終わります。私が指導している拡大内視鏡は、胃癌を診断するための最先端の方法であることは事実ですが、ほんのわずかな胃粘膜の変化を発見した後の診断法なのです。これが、私の中に生じた矛盾でした。これが、私がふと立ち止まり、考えた二つ目のことでした。

すなわち、確かに最先端の早期胃癌の診断法を教えることも必要ですが、胃癌が多い国のほとんどで、まず小さく平坦な癌を発見する方法が確立されていないことに気が付きました。私が開発した方法は、病変をまず発見した後に、それを胃癌と正確に診断する方法であり、わずかな変化しか呈さない早期胃

癌をまず発見することなくしては、意味がありません。

そこで、国内で私と協同研究をしている仲間の医師と集まり、相談をしました。彼らも海外から頻繁に指導を依頼されている日本の内視鏡医のトップランナーです。海外へ実際の内視鏡の技術指導に行くには、移動に要する時間は長く時差もあり、すべての国のすべての医師に技術を伝達することは、とても難しいと皆考えました。ちなみに、福岡空港から南米のチリまで移動するためには、まず、福岡空港から成田空港へ国内線（2時間）を利用し、成田空港からアメリカへの国際線（約10時間）を利用し、それから、アメリカからチリのサンティアゴまで国際線（約12時間）に乗り継ぎます。最終的には乗り継ぎの待ち時間を含めると、約32時間を要します。

皆で知恵を絞ったところ、京都大学の武藤学先生が、「インターネットでいつでも世界中の誰もが利用できる教育システム、すなわちe-learning system

でテストを行い点数を付けます。その後、e-learning systemで学習していただき、再度、テストを行い、学習後のテストの点数が上がるか否かを評価する計画です。最終的には、学習に参加した医師について実際の内視鏡検査で発見する早期胃癌の数が増えるか否かを調査する予定です。

e-learning systemの内容はまだ未発表なので具体的な内容については述べることができませんが、早期胃癌を内視鏡で効率よく発見するために私たちが日本で伝統的に先人から教わったノウハウや理論を分かりやすく、しかも楽しみながら学習するコンテンツにしたいと考えています。

なにぶん初めての試みですので、予想どおり膨大な労力が必要です。胃癌多発国である国の代表的な施設の先生に声を掛けたところ、反響が大きく、現在、中国、ロシア、チリ、ボリビア、ペルー、ウル

（イーラーニングシステム）を開発してはどうか」と提案しました。e-learning systemは「インターネット回線を利用できれば、時間や距離の制約なく誰もが利用できる新しい教育システムであり、さまざまな教育分野に利用されています。ただし、内視鏡の領域では誰も開発したことがなく、新しいシステムを作成するには、多大な労力に加え多額の費用がかかるのは当然です。そこで私が福岡大学研究推進部の総合科学研究チームという研究支援プロジェクトに応募し、今回の「胃癌多発国を対象とした胃癌診断のglobal e-learning systemの開発・国際共同研究」を申請したところ採用され、活動を開始することができました。本研究チームに支給される予算は2011年度と2012年度の2年間に限られています。しかも、私たちは研究者なので、教育システムを開発しても、本場に役に立つかどうかを科学的に証明することが必要です。そのためには、まずこの取り組みに参加を希望する国の内視鏡で発見され

グアイ、メキシコ、アルゼンチン、コロンビア、ブラジル、ポルトガル、イタリア、トルコ、ブルガリアの胃癌多発国を中心として15カ国から70人の医師が参加の申し込みをしています。ただし、最初はきちんと研究に参加できるか否かを評価するために、現地調査や個人アンケート調査を行い厳密に選考している最中です。これらのあらゆる国々の人々と数えきれないほどの多数のeメールをやりとりし、現在までアメリカとヨーロッパで2回の国際ミーティングを行いました。いくらインターネットといっても、きちんとコミュニケーションがとれ信頼できる相手を研究のパートナーにすることが肝要です。

現在進行中の研究なので、研究成果については、まだ公表できません。少しか述べさせていただきますと、現地調査の結果明らかになったのは、胃癌多発国のほとんどにおいて、「内視鏡で発見されている胃癌のうち早期の胃癌はわずか2%しかありませんでした」という驚愕すべき事実でした。福岡大学

筑紫病院で調査をしたところ、私たちが治療した胃癌のうち、70%以上が早期の胃癌でした。

胃癌は癌による死因としては、いまだに世界で第2位です。多くの人々が手遅れの状態で発見され亡くなっています。海外の胃癌多発国における胃癌の死亡率を減らすためには、私たちが行っている方法のみでは、大海に小石を投げる程度の効果しか得られないかもしれません。なぜならば、(1)胃癌を早期発見するための住民検診のシステムは日本以外ではまったく整備されておらず、これは、各国の政策の問題であり、(2)経済的理由で内視鏡検査を受けることができない人々が多く、これも各国の経済の問題であるからです。私たちはこれらのことには無力です。しかし、教育のモデルを確立すれば、それらの国の政治・経済の条件が整った時点からは、我々が大海に投げた石が、その国の尊い命を救う波紋になる可能性を信じています。私たちの限界を知っていることも重要ですが、私たちにしかできない

いことを着実に実行することは、さらに重要であると考えています。

少し散漫になりましたが、福岡大学の総合科学研究チーム「胃癌多発国を対象とした胃癌診断のglobal e-learning systemの開発・国際共同研究」について紹介させていただきました。医療を通じ地域に加え海外の人々のいのちを守ることに貢献できるチャンスを与えていただいた福岡大学、特に研究推進部のスタッフの面々にこの場を借りて謝辞を申し上げます。

2011年10月29日

# 隨筆

工学部建築学科准教授

人文学部教育・臨床心理学科講師

理学部化学科助教

工学部建築学科  
准教授

池添 昌幸

## 生き続けるまちの姿

1 はじめに 震災からの居住の復興

私たちにとって住宅は、生活を営む上で基礎となる土台であり、生きる力の根本にかかわるものと言えます。まだまだ復興の途上にある東日本震災では、約11・5万棟の住宅が全壊したと報告されています。応急仮設住宅は約5・2万戸が計画され、2011年9月20日現在で約5万戸が完成しており、ようやく応急仮設住宅の供給が完了する段階にきています。

池添 昌幸  
寺崎 里水  
古賀 裕二

応急仮設住宅への入居によって避難所の集団生活から家族生活に移行し、生活の自由度は大きく向上することになります。しかし、画一的で密度が高く建設された仮設住宅は、家族や個人の各々の要求に応えられるものではありません。さらに、近所付き合いなどのコミュニティーが生まれにくいことも大きな問題となります。

現在、日本建築学会をはじめとしてさまざまな機関や専門家が復興のための提案と活動を行っており、応急仮設住宅についても幾つかの新たな試みが実現しています。例えば、岩手県遠野市の穀町団地の仮設住宅では、木造の仮設住宅を玄関が向かい合うように配置し、玄関の通りを屋根付きの木製デッキと



表1 都市と農村のコミュニティの比較

	都市型コミュニティ	農村型コミュニティ
性質	独立した個人としてつながる	同心円を広げてつながる
内容	個人をベースとする公共意識	共同体的な一体意識
人の関係性	異なる集団間の異質な人の結び付き	集団の内部における同質的な結び付き
性格	規範的 / 文明 / 公共性	情緒的 / 文化 / 共同性

参考文献 袁原敬編著：『都市計画 根底から見直し新たな挑戦へ』、学芸出版社、2011年、172ページ



岩手県内の中学校に建設された応急仮設住宅（著者撮影）

ようにデイサービスや相談機能を持ったサポートセンターが設置されています。

今回の震災は復興に時間を要するため、仮設住宅の居住が長期となります。2005年3月の福岡西方沖地震では、仮設住宅が解消するまで約3年を要しました。仮設住宅での長期居住に対して、仮設の商店や生活サービス、就業の場を備えた仮設市街地

すること  
で居住者  
の交流の  
場を計画  
していま  
す<sup>2</sup>。ま  
た、敷地  
内には高  
齢者が安  
心して生  
活できる

の提言もなされています。このような仮設住宅について私見では二段階の供給が必要だと考えています。現在の仮設住宅の大半は最低限の応急の住宅であり、小中学校の運動場に建てられているものも少なくありません。住宅復興は自立再建の支援が基本となりますが、それが叶わず長期に仮住まいする人々も多いと考えられます。何とかうまく仮設住宅用地を回転させながら、恒久的な中低層の集合住宅を建設し、応急的な仮設住宅から恒久的な集合住宅に移って仮住まいする。仮住まいが終わるとその集合住宅は解体・移築して復興住宅等に転用するという考えです。今後、復興まちづくりが本格的に取り組まれますが、居住やコミュニティの私たちは都市と農村では大きく異なり、また各々のまちが地域固有の文化や空間資源を有しています。特に、農村型のコミュニティは、個人が共同体と一体化し情緒的な強い結び付きを持っています。そして、集落を中心とした居住空間は長い時間をかけてかたちづくられたも

のです。今回の復興では、多くのまちや集落を新たに整備しなければなりません。しかし、すべてのまちや集落を同じように高台移転するのではなく、地域の固有性や場所性に応じたビジョンを描くことが、生き続けるまちをつくることにつながると思います。

2 人口減少時代における郊外住宅地の問題

人口減少時代の日本では現在、都市の縮小のあり方が議論されています。都市計画の分野では賢い縮小（スマートシユリンク）の方法が大きなテーマとなり、郊外住宅地の将来像を描くことは重要な研究課題となっています。このことは私も関心があり、福岡都市圏の郊外住宅地を対象として居住の実態や変容過程を調査分析し、居住の持続性について研究しています。ここでは研究の一部を紹介したいと思います。

- 1 住宅被害の状況は消防庁の2011年8月25日発表による。応急仮設住宅の状況は国土交通省HPの応急仮設住宅関連情報参照した。
- 2 応急仮設住宅の試みは社団法人日本建築士連合会「建築士」（第708号、2011年9月）を参照した。

表2は、福岡都市圏に位置する、ある自治体の宅地開発面積を時期別に集計したものです。昭和40年代、50年代に開発された面積の合計は当該自治体の市街化区域の約4分の1となっています。特に昭和40年代後半の開発面積が大きく、開発から約40年が経過しています。これらの住宅地の大半は宅地分譲形式であり、購入者の多くが30代から40代を世帯主とする核家族であると推測できます。すなわち、同

質の居住者層の住宅地であるという特徴があります。そして、現在は子どもが成長・独立し、高齢者の夫婦もしくは単身の世帯の居住が多く、住宅地全体が高齢化しています。近い将来、空き家となる可能性が大きくなります。

表2 住宅地開発の開発時期別の総面積と割合

		総面積 (ha)	割合	調査対象市の市街化区域面積に対する割合
開発完了時期	昭和40年代前半 (S 40~44)	66.2	23.5%	5.6%
	昭和40年代後半 (S 45~49)	152.9	54.2%	12.9%
	昭和50年代前半 (S 50~54)	47.0	16.6%	4.0%
	昭和50年代後半 (S 55~59)	16.1	5.7%	1.4%
合計		282.2	100.0%	23.9%

このような居住が縮小している郊外住宅地をどうするべきか、大きく二つの立場があります。一つは、居住者が少ない住宅地にさまざまな都市サービス(上下水道やゴミ回収

など)を提供するのは都市経営的に不合理であるから、居住地を集約し外れた住宅地は解消しようとする立場です。もう一つは、郊外住宅地も数十年の歴史を持つまちであり、そこで育った人々にとってはふるさとである。居住者自身が住み続けたいと願い、コミュニティとして存続する可能性があれば、時代に応じた魅力のあるまちとして住宅と住環境を改善しようとする立場です。この場合、居住者自身がコミュニティと住宅地を運営する当事者であるという自覚を持ち活動することが前提となります。

私自身は後者の立場で研究に取り組んでおり、まちとして存続するための方法を考えています。まだ、明確なビジョンは持っていませんが幾つかの考えを述べたいと思います。

### 3 生き続けるまちの姿

都市収縮時代において高齢化した郊外住宅地を生き続けるまちとするには、まず、現在居住している

人々のための生活サービスのあり方を考える必要があります。

私の研究室では、1971年に開発された約350区画の郊外戸建住宅団地を対象に居住実態に関する調査を2009年に行いました。この住宅団地では、2008年の高齢化率(65歳以上の人口の割合)が31.3%と高く、空き家・空き地となっている区画の割合は10.7%と約1割となっています。世帯主である父親の多くはサラリーマンですので、現在は退職し日中も家で過ごすことになりす。このような高齢者の方々の外出行動を調査すると次のような特徴が分かりました。

① 毎日の買い物や病院への通院といった日常的な外出行動は、近隣自治体までの行動範囲に収まるが、外出頻度は目的に応じて固有性があり分散している。

② 交通手段は、目的に関係なく固定的であり、全体の4割から5割の世帯が自家用車、約2割が公共交通機関、同じく約2割が徒歩で移動して

いる。

すなわち世帯によって外出の移動手段が固定化しており、そのモビリティ能力が外出場所や外出頻度に影響していると予測できます。

多くの郊外住宅地では鉄道駅から距離があり、身近な公共交通はバスであることが多く、公共交通を改善するには限界があります。また、自動車の利用も高齢になるにつれて自身での運転は難しくなります。つまり、移動手段の改善ではなく、徒歩圏内に必要な施設を整備する方が有効だと考えられます。

生活サービスのニーズを調査した上で、例えばデイサービス等の福祉サービスや銀行のATM等を備えた多機能な地域拠点施設を整備すべきだと考えています。さらに、遠隔診療等の設備を備えれば簡易な診療所として通院も代替できます。これらの多機能な複合施設は従来の公民館の役割を拡充し、地域住民で運営することが条件になると考えています。すなわち、現在の居住者が住み続けるための短期的な

整備と言えます。

さらに、まちが長く生き続けるためには、次の世代へと居住を継承しなければなりません。持ち家が相続され子世帯に継承されれば最良ですが、子世帯が遠方にいる場合は何らかの形で処分されます。これは住宅の古さとも関係しますが、郊外住宅地の持ち家の住み替えはなかなか進まないのが現状です。先述の調査を行った郊外住宅団地では、開発後に転入した世帯が約5割を占めています。そのうち最近10年間で転入した世帯は全体の13%であり、1割強の世帯しか入れ替わっていないこととなります。しかも最近10年の転入世帯は土地を購入して住宅を新築するケースが多く、持ち家の住宅地であることに変わりはありません。調査した住宅団地では借家は全体の5%とわずかで借家化は進んでいません。長期にわたって郊外住宅地が生き続けるためには、戸建て持ち家からの転換が不可欠であると考えています。例えば、一部の宅地を借家とし、テラスハウ

スや二連戸建て住宅といった低層低密の集合住宅地として再生するといった方法です。個々の敷地が勝手に更新するのではなく、全体計画を備えた上で徐々に敷地単位で更新していくことが必要となります。

#### 4 おわりに

日本のまちでは、住宅や土地は個人の財産でありコントロールできない対象でした。一方、道路や公民館は公的な行政が管理するもので、不具合があると役所に連絡し対応してもらったものでした。先述したように現在の住宅地では、地域住民がまちを運営する当事者として自覚し活動することが求められます。そのためには、「コミュニティ」の中で生活し社会の一員であることが自身の生きがいにつながり、また、集まって住み豊かなまちが創られることが共に生き続ける力となることが大切であり、その仕組みづくりが必要となっています。

## 希望のキャリア教育

人文学部教育・臨床心理学科  
講師

寺崎里水

なれなかった自分

私はいつの間にか大人になれると思っていた。1年が過ぎると3年生が4年生になり、小学生が中学生になるように、何年か過ぎるといつの間にか社会人になって、いつの間にか親になれると思っていた。

ところが、世間的に成人とみなされる年齢を過ぎ、一般的に社会人になる年齢もあっさり過ぎたのに、私は社会人にも親にもなれる気配がなかった。周りの友人は大学を卒業すると間もなく社会人になり、ある年齢でバタバタと誰かの「嫁」になっていたが、私は車で日本中を旅行して回ったり、スキー場で働いたり、大学の先生の小難しい話を分かったような顔をして聞きながらお酒を飲んだりすることが楽しくてしよ

うが、ばりばり働く立派な社会人になりたいとか、誰かの妻や誰かの親になりたいと思つときが、自然にやって来るのを待っていたのだ。

そして、そのときはいよいよ来なかった。

どうしてそのときが来る人と、来ない人がいるのだらう。

私がキャリア形成や自立の問題について考えるようになったのは、なりたかったものになつたからではない。なれなかったものについてよくよく考えることがきっかけだ。

#### 強い個人の物語

キャリア教育の講演会で呼ばれる有名人や成功者の多くは、自分は夢を叶えたのだから、みんなにも夢を叶えてほしい、というような話をする。どつやつて夢を見つけ、どつやつてその夢を達成したのか、という話は、同じように生きたいと思つた人を励ますだらう。

その一方で、これといった夢もなく、特技もない人々を抑圧する。一般にキャリア教育の成果として目指されるのは高い目的意識を持ち、個性をアピールしながら、変化の激しい社会の中で積極的に自分の人生を構築することができる強い人間だ。今の消費社会、競争社会、資本主義社会では、人は流されるままに生きることは許されない。時代の流れや社会の変化に翻弄<sup>ほんろう</sup>されて悲劇的な結末を迎えても、そこで流される涙は社会の問題を訴える。「無知の涙」ではなく、自業自得の後悔の涙としてしか受け止められないからだ。だから一般にキャリア教育では、「あなたたちは自分の将来を真剣に考え、計画し、着実に行動してそれを達成し、困難に打ち勝つだけの賢さを持たなければならない」と伝える。果たしてそれでいいのだろうか。平凡に生きたい、時代の波に翻弄<sup>ほんろう</sup>されながら、流されるままに生きていくという希望は、もはや過去の遺物、古き時代の陋<sup>ろう</sup>習<sup>しゅう</sup>に過ぎないのだろうか。

する王子や大富豪、不治の病で引き裂かれる大恋愛、ありのままの自分を大切にしていたらいつのまにか大出世、気のいい仲間たちと共に怪物を倒して世界を救う物語。そして刷り込まれる夢や希望のかけがえのなさ、それに向かつて努力することの尊さ。それらを強化するように、今の小中学校のキャリア教育では、「やりたいこと」「や」「好きなこと」を見つけよう、「夢」に向かつて努力しようというメッセージが繰り返して伝えられている。

しかし実際は、大富豪は通りすがらないし、姫を守りたいといったら男女差別だと言われる。さして貧困でもなく、理解のある親に育てられ、そこそこ健康だが大して優秀でもなく、頼りになる魔法も使えないまま、闘うべき怪物も見当たらず、ありのままの自分でいたらKY(「周りの空気が読めない」の造語)と揶揄<sup>やぶ</sup>されていじめられた。人生の主役は自分のはずなのに、明らかにこれまで消費してきた

生きる僕たちの物語を紡ぐ

少し前、ある音楽グループのボーカルが「昔、<sup>2</sup>『天空の城ラピュタ』を観て、自分の目の前には守るべき少女も追いかけるべき宝もないことに絶望した」と語ったことを紹介した記事(「RO 69」 2011年10月17日 URL:<http://r69.jp/disc/detail/5896>)に対して、インターネット上で多くの反応があつた。そんなの当たり前だ、アニメと自分の人生を一緒にするなんて気持ち悪い、幼いと否定する人もいれば、そういうことに思い至ったボーカルのセンスが良いと肯定する人もいた。そして、「俺らにも守るべき人も追いかけるべき夢もないよね」と共感する人が、決して少なくない数いたのだ。

私たちは子どもころからたくさん物語に出会う。貧しさや無理解な親の反対に負けず勉学を続けて偉大な成果を残した偉人たち、地球征服をたくらむ悪人と科学や魔法の力を駆使して戦うヒーロー、ヒロインたち、さえない私に通りすがりに一目ぼれしむ。

今から約20年前、コミュニケーション・スキルを駆使しながらその場限りの楽しみを追求し、「まったく生きる」ことが、「終わりなき日常を生きる」術とされた。夢がなくても、脇役にしかなれなくても、生き続けなければならない私たちもまた、その場限りの楽しみを追求しながら終わりなき日常を生きている。しかしそれは、価値観が相対化した社会で芽生える自我の不安に対処するためではなく、人生というかけがえのない物語の主人公として壮大な夢を持つて計画的に勤勉に過ごさなければならぬという抑圧を、精一杯無視して生きるための苦肉の策なのではないか。キャリア教育によって物語への欲望を再び背負いこんでしまった私たちには、もはや「まったく生きる」という術すら残されていない。そんな日常を当たり前にするのではなく、「守るべき少女も追いかけるべき宝もない毎日に絶望する

ことなく生き続ける僕たち」の、もう少しマシな物語のあり方を模索することが、キャリア教育の重要な役割だと考える。

守るべき少女と追いかけるべき宝

そこで問いたいのは、本当に私たちの生きる毎日には「守るべき少女も追いかけるべき宝もない」のかという点だ。

「先生はどうして大学の先生になろうと思ったのですか」と私に聞く学生の大半が、女性が大学教員として一人で強く（寂しく）生きる決意をするまでの感動秘話を期待しているようだ。実際の私の職業決定過程はまったくドラマチックではない。前述のような生活を繰り返す過程で、このままでは生活が立ち行かないと気付き、まだ残されている選択肢を吟味して地味に努力した。私には幸い、生活に困っていない親がいて、相対的に高い学力と、どこでも生活していけると思い込むだけのずっずっしさが

れている学校経由の就職は、知識が十分ではないまま労働市場に参入する高校生を守るための制度だったし、資格試験の制度化は特定の職種・職業への参入がどういった経路で行われるのかを明示することになった。女性の職業社会への参入は、法令が整備された現在でもなお困難なままである。いわば、選択できない選択肢を見て悲しむ少女を守るための戦い、誰でも教育を受ければ就きたい職に就ける社会という宝を追いかける戦いが、ずっと続けられてきているのだ。

怪獣というあからさまな悪人や、単純な熱意にたやすく感動して理解を示す上司、友情は永遠で結婚は幸せ、死は悲しみという単純な物語ばかりを消費している場合、誰が悪で誰が善なのが分からない複雑に入り組んだ現代の社会構造を物語としてとらえることは難しい。それに、アニメやマンガと違って、変化がきわめてゆっくり現れる現実の社会は、変えることのできない既定の事実としてしかイメー

あった。また、未熟な私を受け入れてくれる職場の理解もあった。たまたま時間をかけて職業を選択できるだけの社会的条件がそろっていたに過ぎない。（だいたい、私がこの先も大学教員とせずと一人で生きていくとどうして決めつけるのだ）

しかし、女性が職業を持って一人で生活する権利を得て、それを実際に実現するまでの歴史的な過程には壮大なドラマがある。

教育を受ければ、身分によらず、自分の望む地位に到達することができるというキャッチフレーズのもとに近代教育が開始され、多くの人が学校教育を受けようになった大正の時代から、人はなりたいた職業となれる職業とのギャップに悩み続けてきた。教育を受けることよって目の前に広がる世界の中で、実際に自分が選択できる選択肢は限られている。選択肢を増やすには、学校教育の整備拡充だけではなく、さまざまな福祉政策や労働政策を充実させなければならなかった。日本の高校で現在も広く行わ

じされないかもしれない。

そんな彼らに対して、私たちが流されるままに生きられない不自由さを強制されるに至った歴史的な経緯や社会構造の問題を物語として伝え、社会と自分をつなぐ回路を提供すること、リアルな生活の中での守るべき少女と追いかけるべき宝について考えさせることは、新たな希望を提供することになるだろう。

希望のキャリア教育

先日、外国の人たちに日本の教育制度を紹介する講座を担当した。日本の教育制度は優れた人材を輩出しているという説明をしていたのだが、デイスカッションを通じて出された「22歳で一生を通じて働く会社を選択するなんて困難なことがどうしてできるのか」という問いにうまく答えることができなかった。

確かに、18歳や22歳で学校教育を終えると同時に

就職し、定年を迎えるまでの長い間、同じ会社で勤めあげるといふ日本社会の「常識」は、キャリア形成の過程をやり直しのきかない一方通行の道にしてしまふ。だからこそ、キャリア教育が伝える「自分の将来を真剣に考え、計画し、着実に行動してそれを達成し、困難に打ち勝つだけの賢さを持たなければならぬ」というメッセージは重みを増すのだが、だがしかしキャリア教育は、この手の困難な選択を容易にするためだけにあるのではない。

社会は変えられる。強い個人にならなくても、生きたいように生きる権利は保障されなくてはならない。そこから始めればきっと、守るべき少女も追いかけるべき宝も見えてくる。

- \* 1 永山則夫著『無知の涙』増補新版、河出書房新社、1990
- \* 2 『天空の城ラピュタ』スタジオジブリのアニメ映画。1986年公開。監督は宮崎駿。
- \* 3 宮台真司著『終わりのなき日常を生きる オウム完全克服マニュアル』ちくま文庫、1998

## 有機EL技術のこれからと私たちの生活

理学部化学科  
助教

古賀 裕二

近年、有機ELディスプレイは携帯電話やスマートフォンなどの小型ディスプレイとして製品化されている。その仕組みを簡単に説明すると、ある種の有機物の薄い膜に5V程度の直流電圧をかけると発光する、というものである。発光体に有機物が使われており、電圧をかけると発光することから、有機electroluminescence、略して有機ELと呼ばれる。

現在、家庭用テレビおよび種々のディスプレイとして普及している液晶ディスプレイが、電圧をかける向きを変える性質の分子を利用して、後ろのバックライトから来る光を通したり、遮ったりして表示するのと比べると、自らが光るといふ点で有機ELディスプレイは大きく異なる。

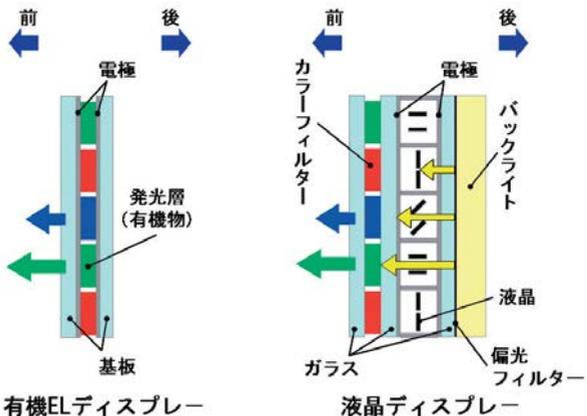
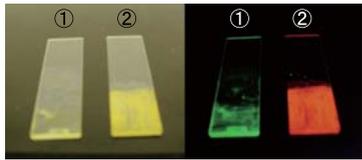
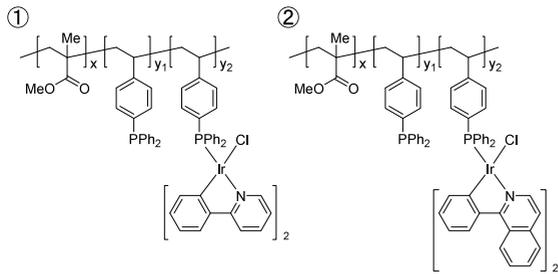


図1 有機ELディスプレイと液晶ディスプレイの仕組み

現在、有機ELディスプレイは液晶ディスプレイに続く次世代のディスプレイとして期待されている。具体的にどのような点で優れているかという点、

- ① 薄型で軽量(バックライトが不要)。
- ② 低消費電力で明るい。



石英ガラスの板に塗った高分子発光材料の発光の様子  
(左：蛍光灯下、右：紫外光下。紫外光によっても発光する。)

図4 筆者らが開発した高分子発光材料

と製造コストが高いということである。現在の製造方法はパネルを頑丈な箱に入れ、箱の中を真空にし、発光材料などを蒸着させて薄膜を作る（真空蒸着法、というものである）。そのため、テレビのパネルが入る大きさの真空にできる頑丈な箱が必要であり、それを製膜する度に真空にするのだからとても生産

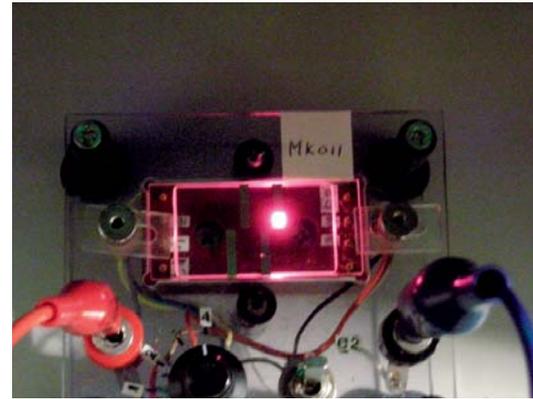


図2 有機EL素子の発光の様子  
(中心で赤く光っているものが筆者開発材料)

- ③ 視認性が高い（斜めから見てもよく見える・黒色）がはっきりしている・画像が繊細。
  - ④ 動画が見やすい。
  - ⑤ ポスターのように丸めることのできるディスプレイ（フレキシブルディスプレイ）が作れる。
- といった点である。
- 将来的にはさらに発光効率が数倍に向上する技術

効率が悪くなる。また、パネルが大きくなればなるほど薄膜の厚みにムラが得意という問題もある。より大画面化が容易でコストを低くすることができる製造技術として、発光材料などの溶液を塗る方法（塗布法）も研究されており、筆者はその様な方法に用いることができる新しい高分子発光材料を開発した（図4）。この材料は高分子鎖に発光部位を結合させることにより、容易に非晶質の膜を作製することができる。

しかし残念ながら、前述の真空蒸着法で製造されたディスプレイの方が性能が高く、まだ研究の余地がある。塗布法で最適な材料が開発されれば、有機ELディスプレイの大画面化は飛躍的進歩を遂げるだろう。

ここまできると液晶ディスプレイはとても劣っているように思われるかもしれないが、技術者たちの努力の結果、最近、急激に性能を高めてきている液晶テレビが市場に出てきたことと今とで比較して

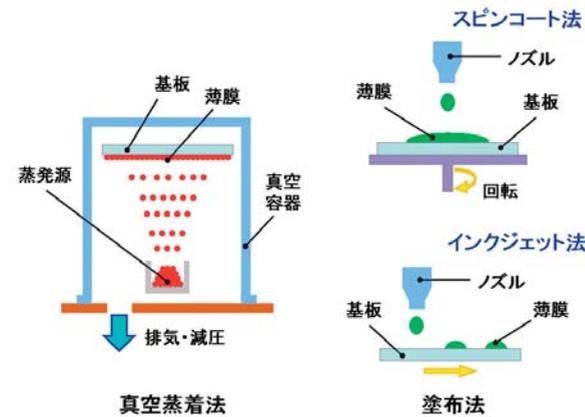


図3 薄膜の作製方法

も研究されており、筆者も現在、福岡大学においてそのような技術の研究を行っている。

一方、有機ELディスプレイを家庭用のテレビのような大型パネルとして市販できるようにするには幾つかの問題がある。それは大画面化が難しいこと

ほしい。バックライトにLEDを用いることにより、ディスプレイの厚みは薄くなり、重さも軽くなった。消費電力も少なくなり、明るくなった。当初は斜めから見ると画像が見えにくかったが、今ではほとんど不自由さを感じない。動画に残像感があったり、なめらかさがなかったが、ほとんど違和感がなくなってきた。また、当初1インチ1万円といわれた価格も今や32インチのテレビが3万円程度で買えてしまう。

このような液晶ディスプレイの急激な高性能化、低価格化の中で、大画面化に問題を抱えている有機ELディスプレイはテレビとして消費者に受け入れられるのだろうか。

2007年12月に世界初の有機ELテレビとしてソニーから「XEL-1」が発売された。画面の厚みがわずか3mmのほか、有機ELの特長を十分に引き出した性能を持っていたが、わずか11インチで20万円と非常に高価で、一般家庭に受け入れられるか

では有機ELテレビは液晶テレビを凌駕しているのだ。これからの市場の動きがどのようになるか楽しみにしたい。

一方、有機EL技術は通常のテレビとして以外にも、フレキシブルディスプレイあるいは面光源（照明）といった側面も持っている。

フレキシブルディスプレイは円い柱などの曲面に貼り付けたり、移動の際にポスターのように丸めたりでき、動きによって変形する衣服などにもディスプレイを取り付けることができる。また、現在LEDが省エネ光源として注目されているが、有機EL光源も次世代照明として注目されている。LEDは非常に明るい点光源なのに対し、有機EL光源は柔らかな光を発する面光源である。また、さまざまな形状をとることもできるので、イルミネーションなどにも応用可能であるが、もちろん室内灯としても利用できる。窓に代わる大きな照明であったり、光る柱であったり、建築の様式さえ大きく変えてしま

疑問符の付く製品と言わざるを得なかった。2010年には事情があり生産終了となったが、事業の採算が合わなかったことも一因と考えられる。大画面ディスプレイ製造技術で期待されていたセイコーエプソンや東芝などは製品化前に早々に撤退していった。有機ELテレビの存続についてこのような危機的状況下にもかわらずである。

しかし隣の国、電子大国韓国ではLG電子が2012年には55型の有機ELテレビを市販すると発表した。大画面の有機ELテレビが製品化されるのは世界初である。その後、市場の動向を見て30型や40型クラスを市販していくと見られている。もちろん同じ韓国のサムスン電子も有機ELパネルの大型化や量産を検討しているが、日本のメーカーでそれに対抗する発表はとても残念ながら今のところ聞かない。

それでも、この韓国の早い動きが筆者の憂慮を解消してくれる可能性は十分あり得る。ポテンシャル

の可能性を持っているといえる。あるいはこちらの方面での消費増・生産増が低コスト化の道を拓いてくれるかもしれない。

将来、街中では至る所に有機EL技術を用いたディスプレイやイルミネーション、家庭では照明やテレビに囲まれ、パソコンは丸めて持ち運べ、スマートフォンはプレスレットやワッペンのように身に付ける物になっていくのではないだろうか。また、医療や科学機器におけるディスプレイはその大きさや重さからほとんどが有機ELディスプレイに取って代わる時代がやってくるのではないかと筆者は予期するものである。

## 爆発事故

## その現象と事故事例

安全システム医工学研究所 所長  
(工学部化学システム工学科助教)

加藤 勝美

2011年度から、福岡大学産学官連携研究機関研究所として安全システム医工学研究所が発足しました。本研究所は、火災・爆発事故の抑制、化学物質の安全利用など安全工学的研究や医学・工学の連携分野である自動車用エアバッグシステムの開発等に関する研究など、産業保安あるいは市民の安全に直結する研究・開発を行っています。

爆発事故が発生していることが分かります。

例えば中国などでは、年間、数百人が爆発事故によって死亡しています。この死者数は、国内の新聞などの情報のみを集計した結果ですので、もしかすると、実際にはこの数倍あるいは数十倍の規模に上るのではないかと考えられます。中国における爆発事故の多くは、炭鉱におけるガス爆発あるいは発破作業に使う爆薬の誤爆などで、日進月歩する中国経済・社会の負の側面とも言えます。

一方、国内に目を向けてみても、必ずしも無視できないほどの爆発事故が近年においても発

本稿では、東日本大震災の影響により、市民の安全あるいは防災への関心が高まっている現状を踏まえ、「爆発事故」という地震などの天災とは異なる一種の人為的災害を主として取り上げ、爆発という現象および過去に起きた爆発事故を紹介したいと思います。

爆発事故発生の状況と対策  
爆発事故といつても一般生活を送る上では、頻繁に起きる事象ではなく、対岸の火事といった印象を受ける方がほとんどではないでしょうか。あるいは、爆発事故なんて本当に起きるの？とさえ思う方もいるかもしれません。しかしながら、過去の事故事例を調査してみると、国内外問わず、非常に多くの爆

表1 国内で起きた主な爆発事故(2000-2008年)

発生年	場所	死者数(人)	負傷者数(人)	概要
2008	静岡	0	13	医療用ゴム工場で釜が破裂
2008	愛知	0	21	製紙工場のボイラー室で火災
2007	東京	3	3	温泉施設でガス爆発
2007	山口	0	14	ドック内で修理中の貨物船が爆発
2007	新潟	0	17	メチルセルロース製造工場で爆発
2007	茨城	4	0	石油精製所のエチレンプラントで火災
2006	愛媛	5	2	製油所で原油タンク洗浄中に爆発
2006	富山	2	12	医薬品原薬製造工場で原料分離作業中に爆発
2005	三重	6	1	タンカー衝突により粗ベンゼン流出・炎上
2004	愛媛	3	0	タンカーのタンク洗浄中に爆発
2004	福岡	0	10	高校の文化祭で液体窒素入りの瓶が破裂
2004	茨城	0	10	木材板製造工場で複数回の爆発
2004	京都	0	10	病院内のボンベ室で液体酸素ボンベが爆発
2004	広島	4	10	公園でカセットコンロのボンベが爆発
2003	鹿児島	10	3	煙火製造工場の配合所で火薬の調合中に爆発
2003	愛知	0	15	製鉄所のガスタンクで爆発
2003	神奈川	0	11	スーパーの生ごみ処理施設で火災、爆発
2003	千葉県	0	11	飲食店でカセットコンロのボンベが爆発
2001	東京	44	3	雑居ビルで爆発火災
2001	宮城	0	10	携帯電話部品工場でマグネシウム合金粉末が爆発
2000	群馬	4	58	化学工場でヒドロキシルアミンが爆発
2000	静岡	7	0	バイクに給油中のガソリンの漏えい爆発事故
2000	福島	0	16	小学校プールの塩素供給タンクの薬剤誤投入による破裂事故
2000	愛知	0	79	火薬類一時置場に置かれていた火薬の爆発事故

生しています。表1は、近年国内で起きた、死者が3人以上あるいは負傷者が10人以上の比較的大規模な爆発事故を抜粋したものです。これらの爆発事故を見てみると、化学工場などの事故が多い一方、病院、公園、学校など、我々の生活に身近なさまざまな場面でも爆発事故が発生しており、必ずしも海外や一般生活から遠くかけ離れたところでのみ発生しているわけではないことが分かります。

こうした事故は「未然に」防ぐことはできるのででしょうか、ということですが、答えはYesでしょう。地震のような天災であれば、残念ながら現代の科

#### 爆発現象

国語辞典にて爆発という言葉を引きみると「物質が急激な物理変化または化学変化を起こし、体積が一瞬に著しく増大して、音や破壊作用を伴う現象」とあります。従って、爆発には物理的な爆発と化学的な爆発の2種類があることが分かります。前者は、単に圧力が一瞬にして開放される現象であり、風船などに空気を入れ過ぎて破裂する、そのような現象です。一方、後者は、ある物質の燃焼や分解などの化学反応によって、熱、光そして音などとともに、急激に圧力が上昇する現象です。化学的な爆発は、その反応が伝播す

学では天災の発生自体を防ぐことはできず、起きてしまった後にいかに被害を極小化するかといった、防災（危機管理）の観点からの対策が主となります。一方で、事故は、人や組織のミスが関係して起きるものですから、起きた後の対策および未然に防ぐための対策の両面からの対応（リスク管理）が可能であると言えます。

では、どうすればこうした事故を未然に防ぐことができるのでしょうか。一般には、人間は間違えるという視点に立つて、間違えようのない、あるいは間違っても事故につながらないような装置や機構にするという

る速度に応じて、さらに爆燃と爆轟に分けることができます。爆燃は、反応が伝播する速度が音速以下、爆轟は、反応が伝播する速度が音速を超える現象で、爆轟は最も激しい爆発の形態といえます。例えば、高性能爆薬と呼ばれる火薬類（コンボジションC4など）は、爆轟の速度が8 $\frac{1}{2}$ を超えると言われていきます。これは、この物質を延々と一直線に並べ、一方の端で着火すると約1秒後には、8 km先に燃焼波面が到達するということを意味しますので、いかに速い反応か想像いただけるのではないのでしょうか。このような著しく速い反応が起きると、瞬時

ハード面からの対策が有効であると言われていきます。一方で、筆者が考えるには、個々人が安全に関する知識（爆発事故であれば、爆発という現象、あるいは過去の事故事例に関する知識）を得るといふソフト面からのアプローチも重要ではないかと考えます。過去の事故事例を精査してみますと、自身が取り扱っている物質の危険性をよく把握していなかったがために起きたのではないかと考えられる事故や、過去に同じような事故が起きているにもかかわらず事故が繰り返される、といったことが非常に多いのです。

にして圧力が上昇するだけでなく、発生ガスに先行して衝撃波が形成され、この波によって近くにある物体が次々に破壊されていきます。

爆発する物質は、何も火薬類だけではなく、家庭にあるプロパンガス、メタン（都市ガスの主成分）なども条件によっては爆発します。このような可燃性ガスの爆発は、燃焼反応（空気中の酸素との反応）ですので、燃焼の三要素（可燃性ガス、酸素、着火源）がちょうどいいあんばいでそろったときに爆発するということとなります。表2は、可燃性ガスの爆発範囲（爆発する可燃性ガスの濃度範囲）

表2 可燃性ガスの爆発範囲および最小着火エネルギー

物質名	爆発範囲 [ vol.% ]		最小着火 エネルギー [ mJ ]
	下限界	上限界	
メタン	5.3	14	0.28
プロパン	2.2	9.5	0.31
水素	4.0	75	0.019

と最小着火エネルギー（爆発するために必要な最小エネルギー）をまとめたものです。例えば、メタンは、5・3・14 vol.%の濃度範囲で空气中に存在し、かつ、0・28 mJ以上のエネルギー

ギーが加えられたときに爆発します。一方で、水素を見てみると、爆発範囲は4・75 vol.%、最小着火エネルギーは0・02 mJですので、メタンなどと比較して、爆発範囲が広く、かつ、最小着火エネルギーが一桁小さいことが分かります。人間の静電気によるスパークのエネルギーは、0・4 mJ程度と言われているので、爆発範囲にある可燃性ガスは、静電気でも着火してしまうということになり、こうした可燃性ガスがいかに爆発しやすい物質であるかお分かりいただけますかと思えます。

万が一、予期せぬところで起きた場合は、甚大な事故につながることは言うまでもありません。次の節では、実際に起きたメタンの爆発事故について述べたいと思います。

事故事例の紹介とその教訓

2007年6月19日、東京都渋谷区の温泉施設にて爆発が起き、3人が死亡、3人が重傷を負うという事故が発生しました。繁華街で起こり、かつ、死傷者も多かったことから連日テレビなどで報道されましたので、ご記憶にある方もいるかもしれません。この事故は、温泉施設で温泉水をくみ上げる際に同時に

地中から漏出するメタンが着火し爆発したという事故です。前節の内容を踏まえると、メタンが爆発範囲の濃度で存在し、かつ、着火源があったために爆発が起きたものと考えられますが、事故に至る経緯を詳しく述べ、もう少し奥に潜む原因も含めて考えてみたいと思います。

ガスを取り扱う工場などでは、爆発下限界の1/4の濃度に制御された環境で作業などを行いますので、2・5 vol.%のメタンは、通常、かなり危険性が高いと認識されて然るべきです。この調査結果に基づいて、施設運営企業は、2005年4月に周辺住民への説明会を開き、ガス検知器の設置とガス濃度を毎日測定することを約束します。しかしながら、同施設運営企業はガス検知器を設置しないまま、

タンに分離され、メタンはガス抜き配管を通じて屋外へ放出される仕組みでした。しかしながら、事故当日、メタンに混じった水蒸気がガス抜き配管のU字部分で結露し、結露した水によってガス抜き配管が封鎖されてしまいます。行き場のなくなったメタンは、じわじわと施設建屋内に漏えいしたと考えられています。通常、都市ガスなどに使われるメタンは、漏えいした時に瞬時に人が気付くような臭剤によってにおいを付けていますが、メタン自体にはお

事故当日から2年以上前の2005年3月に、同地に温泉施設を建設すべく地質調査が行われました。この調査結果では、井戸の入口で濃度2・5 vol.%のメタンガスが観測され、地中から爆発範囲（下限界）の約半分の濃度のメタンが噴出することが分かりました。通常、可燃性

同施設は、図に示すように、ポンプからくみ上げられた温泉水はガス分離装置で温泉水とメ

はできません。さらに、前述のようにガス検知器も設置されて

おらず、かつ、施設内の換気扇も稼働していなかったことから、従業員の気付かないうちに、メタンが爆発範囲の濃度にまで上昇してしまったものと考えられます。その後、制御盤の電気火花によってメタンが着火し、爆発事故に至ったというのがこの事故の概要です。

この事故においては、警報器を設置しなかったこと、ガス抜き配管の設計時に結露に関して考慮していなかったことが最大の原因であったように感じます。では、なぜ警報器を設置しなかったのか、設計を見直さなかったのか、というさらに奥にある原因を考えると、組織とし

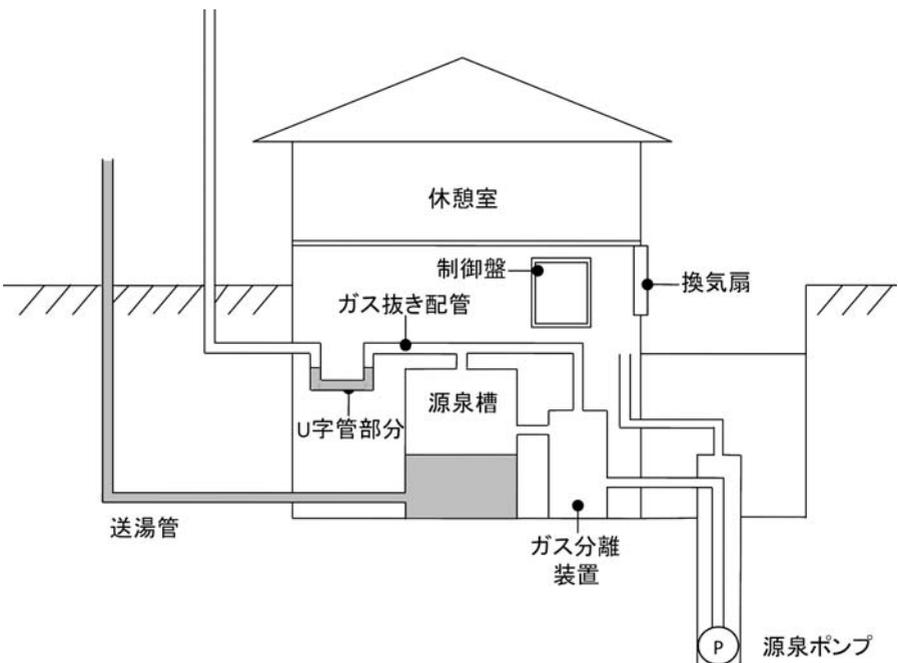


図 源泉くみ上げ施設の見取り図

てメタンという物質の危険性を含め、安全に対する認識やリスク評価が十分ではなかったことに帰着するように感じます。また、関東地方はガス田の上であり、採掘すればメタンが漏出することはよく知られたことで、1991年、千葉県の企業社員寮での爆発事故、2004年、千葉県博物館での爆発事故など、いずれも地下から漏出するメタンが原因とされる事故が数多く発生しています。また、2005年には、東京都の別の温泉井戸掘削中に爆発が起きるなど、類似した事故も発生しており、こういった過去の失敗を教訓として活用できていなかったこと

も事故の背後にある要因の一つではないかと考えます。近年、事故を抑制するためには、組織と個人が安全を最優先する風土や気風、すなわち安全文化の醸成が必要であると考えられています。今回取り上げた事故においても、組織として安全を最優先する気風が欠落していたといえ、過言かもしれませんが、これに関連した原因が根底にはあるように感じられます。

ほとんどの事故の当事者は、事故を起こそうと思って起こすわけではなく、起こるはずがない、あるいは考えてもみなかったところで起きるものだと思います。従って、こうした事故を

別の世界のこととしてではなく、我々の身近にある危険として認識してそれを知り、教訓とすることが肝要なのではないでしょうか。

本稿では、爆発現象およびそれに関連した事故事例を紹介しました。なお、本稿に記述した事故情報の多くは、独立行政法人産業技術総合研究所の事故事例データベース（URL：<http://riodb.ibase.aist.go.jp/riscad/index.php>）から引用しています。さらに詳しい内容については、同データベースをご参照いただければと思います。どうか安全に。



大分県玖珠郡九重町にある星生山の紅葉

# 旧知の仲

大分県九重町長 坂本 和昭

九重町は大分県の南西部に位置する人口1万人程度の小さな町で、住民の多くは農業と観光関係の仕事を生業として暮らしています。日本のどこにでもあのような、過疎化と少子高齢化に苦しむごくごく普通の田舎町ですが、登山やトレッキングコースとして人気の高いくじゅう連山の登山口があり、豊富な温泉に恵まれています。また2006年10月に人道橋で日本一（人道橋には明確な基準がない

ためギネスブックには認定されていませんが世界一の説もあります）とされる九重「夢」大吊橋がオープンしたことなどで、観光地として一定の認知は受けています。本誌『七隈の杜』の読者の方にも「そういえば以前行ったあそこが九重町かな」という程度はイメージしていただけるのではないかと思います。年間500万人前後訪れる観光客のうち、約6割は都市圏を

中心とした福岡方面からとなっていますが、大分自動車道の全区間4車線化により交通の利便性は高まり、九重町民と福岡市民（県民）との交流機会は今後さらに拡大していくものと期待を寄せているところです。このように交通インフラの整備が進むとともに、自動車性能の格段の進歩で今では気軽に引き来のできるエリアとなった九重町ですが、かつては福岡市民にとって、日帰りも困難なところ

るであり、今でこそ町の観光のシンボリックゾーンとして人気の高い飯田高原の長者原、筋湯一帯は数日の宿泊を前提とした登山または湯治を目的とする特殊な場所であつたろうと推測されます。事実、飯田地区は地元でもへき地扱

して、この飯田高原長者原の一面に福岡大学のやまなみ荘が1965年に竣工していますが、期を合わせて1964年には、やまなみハイウェイが開通し、この一帯は避暑地・観光地として急速に発展してきたという経緯があります。もともと景観に恵まれた地域でありましたから、別荘地も今では1,000を超え毎年多くの方々が自然を堪能し、癒やしを求めて訪れるようになりまし

所と呼ばれていま

このように旧知の仲とも言え

る福岡大学と九重町との間で昨年（2011年）7月に相互の発展と地域社会の発展に資することを目的として地域連携協定が締結されたことは、町にとって有意義であり、今後のまちづくりに非常に頼もしい仲間を得たような気持ちです。これまでの普通のお友達が、これからは固い友情で結ばれた親友となつたと言えば大げさかも知れませんが、今後のお付き合い、連携を通じて互いの信頼を深め、提言や協力を惜しまない真の友人となれるように町も取り組みを進めていきたいと考えています。

この半世紀、日本は高度経済成長を遂げ消費は美德と言われがあると考えています。地域が活気を取り戻し、町民が誇りと自信を取り戻す一つのきっかけ、起爆剤としての効果は大きいと考えています。

二つ目は「日本一の田舎づくり」の推進です。この発想にはいろいろな要素が含まれていますが、まずは内に向けた要素とし、一口で言えば九重町の良いところを今一度皆で見つめ直し、掘り起こし継承していこうという提言です。いわば持続可能な過疎地域の基盤固めであり、文化や自然の崩壊を防ぐ活動でもあります。そして外に向けては、本当の田舎が堪能できる癒やしの空間として、九重のブランド

た時代もありましたが、経済の急速なグローバル化に伴う産業の空洞化、加えて少子高齢化の進行による人材の空洞化が深刻な状況となっております。その波は地方において一段と厳しく、冒頭にも書きましたが、過疎化と少子高齢化の進行を食い止めに活カあるまちづくりを進めていくかが町の大きな課題となっております。こういう風に書きますと悲観的な要素でいっぱいのように見えますが、実は今町は二つのコンセプトでポジティブに地域の活性化に取り組んでいます。

一つ目は「夢」をキーワードにしたまちづくりです。これは化を確立することが最終目標となります。しかしこの二つの方向によるまちづくりは、短時間で達成できるものではありませんし、またすべきではないと考えています。大切なことは町民一人一人がそれぞれ意志を持って、目指す方向に向けて取り組むことであり、そのプロセスに大きな意味があると思っています。

このように新たなまちづくりが動き始めたこの時期に、福岡大学と連携協定を結ぶことができたことは町にとって大きな意味を持ちます。「これまで多くじゅう連山の清掃活動などにおいて多くの学生がボランティア

開通時九重「夢」大吊橋が脚光を浴びているその最中に企画されたものですが、ハード（橋）による効果は一時的なものであり、いずれ客足も衰えると考え、これを契機として町を活性化し付加価値を高めればリーピーターも増えるだろうとの考えから、「夢」を冠した商品開発や、夢のある地域づくりを進めてきました。その代表的なものが九重「夢」バーガーであり、最近では九重「夢」ポーク丼も観光客の人気を集めています。これら商品はその売上額や規模で、町の経済を左右するほどのものではありませんが、町民自らが考え商品化する過程に大きな意味

活動を行うなど既に多大な地域貢献をいただいているところですが、今後は場面場面でまちづくりにかかわっていただくことも想定されます。福岡大学が蓄積する知的資源そして何より若い柔軟な発想と行動力に大いに期待しています。また九重町役場には若手や中堅層に福岡大学出身の優秀な人材が多く、彼らは近い将来まちづくりの中心的な役割を担うことになりそうです。そういう意味でも両者の連携が今後さらに深まることを願っています。

このように新たなまちづくりが動き始めたこの時期に、福岡大学と連携協定を結ぶことができたことは町にとって大きな意味を持ちます。「これまで多くじゅう連山の清掃活動などにおいて多くの学生がボランティア

# 福大病院 診療拠点病院と地域のつながり

地域ネット推進センター委員  
 (福岡大学病院 医療情報部長  
 教授) 志村 英生

## 地域連携

## 医療と地域

熱が出た、歯が痛くなったときなど、誰でも近くの診療所にかかっています。比較的健康的な人にとって、医療はあまり身近なものではありません。しかし子どもや中年以降の国民にとって大きな関心のある分野です。大学病院は中でも診療拠点病院といって地域の救急患者や

大きな治療を必要とする疾患や、特殊な疾患などを診断治療する役割を担っています。また大学病院です。から医療者(医師、看護師、薬剤師など)への実地教育を通して、必要とされる人材を送り出しています。子どもでも高齢者でも医療を常に必要としている人たちは便利でかかやすい医療機関を求めているので、住民に信頼され密接な関係

を維持する必要があります。だから医療問題は地域の問題となります。福岡大学病院は、城南区・早良区・西区という福岡都市圏のベッドタウンの住民の医療を担っていますが、糸島地区もその医療圏と言えます。ただ診療拠点病院ですから、何でも診るというわけではなく、周囲の病院やクリニックの先生方と役割

を分担し協力し合って地域全体の医療がスムーズに進むように努力しています。

## 連携

### 1 前方支援と後方支援

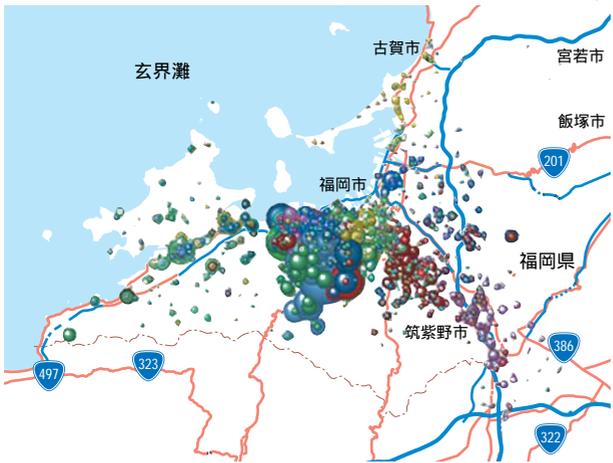
この言葉は、耳慣れないものでしょう。病院から見ると、患者さんが当病院へかかって治療をしたり入院したりすることをスムーズに支援することを前方支援と言います。外来治療や入院している患者さんがほかの病院やクリニックなどに移ったり、自宅でも介護や療養を行うときのいろいろな手続きなどをお世話したりすることを後方支援と言います。病気に慣れていない、専門診

療知識に乏しくて、地域の医療制度に慣れない患者さんや家族にとって、より適切な前方後方支援は、そこに暮らす住民にとって有用な活動といえます。福岡大学病院では地域医療連携室がそれを担っています。

### 2 各連携

主に福岡市民を中心とした地域医療を担っている福岡大学病院では、その目的や規模に応じた地域連携を進めています。診療拠点病院では、患者さんが直接受診する場合は少なく、近くのクリニックなどから紹介状を持って来院されます。病院同士や病院とクリニック間での意思

図1 福岡大学病院に紹介された患者さんの分布(2010年度)  
 円の大きさは数の多さを示しています。



得ることになります。ホームページやパンフレットなども効果がありますが、講習会や研究会、時に先輩や後輩の関係などで連携のネットワークを築いています。福岡大病院では平成23年度から福岡大学病院メディカルセミナーを開催して、この地域の先生方などに大学での治療やその成績などを提示して議論することで、お互いの顔が見える連携を強めています。

(2) がんの患者さんやその家族の方へ  
 がんは国民病となりました。心臓疾患や脳血管疾患の治療が進み、死亡数が減少する中で、

がんはいまだ増加を続け死亡原因の第一位となっています。今では国民の半数ががんにかかり、3割超が亡くなる中で、国は積極的にがん対策を強めてきました。福岡大病院でも腫瘍センターを設立して、集学的な治療を行い、その後の緩和

図3 過去のがんセミナー

回数	講演タイトル	所属	講師	開催日
第40回	がん療養と食事	元栄養部技師長 管理栄養士	秀平キヨミ	2010年12月20日
第41回	『がんを生きる』 ~こころの問題を考えてみましょう~	精神神経科 (症状緩和チーム)	松下 満彦	2011年1月24日
第42回	在宅でのがん療養	精神神経科 はじめクリニック院長	浦島 創	2011年2月28日
第43回	がん治療の最近の話題	腫瘍血液感染症内科	佐々木秀法	2011年3月28日
第44回	「放射線の安全な医療利用」 - 福岡原発事故の混乱との対比 -	放射線科	野元 諭	2011年4月22日
第45回	がんと言われた時に しなければならぬこと	腫瘍血液感染症内科	田中 俊裕	2011年5月27日
第46回	がんに向き合うためには (緩和ケアを含む)	緩和ケア認定看護師 主任看護師 (症状緩和チーム)	堀田 綾美	2011年6月24日
第47回	がん療養における 経済的負担と支援について考える	医療安全管理部 ソーシャルワーカー	田村 賢二	2011年7月22日
第48回	がんの発生としくみを知る	病理部	青木光希子	2011年8月26日
第49回	抗がん剤について	腫瘍血液感染症内科	田中 俊裕	2011年9月16日
第50回	1. 腫瘍センターの歩み 2. 日本のがん医療の進歩 3. 記念講演「運動とがん」	腫瘍センター各部門 腫瘍血液感染症内科 福岡大学スポーツ科学部	各担当者 田村 和夫 田中 宏暁	2011年10月1日

疎通と連携は地域にとって大切なことですから、いろいろな方法で活動を行っています。

(1) 地域医療を支える病院やクリニックの先生方や住民の方へ  
 クリニックを訪れた患者さんが手に負えない病気があった場合、大きな病院や診療拠点病院へ紹介をします。紹介先の病院の特徴や専門性を知り、先生の得意範囲などを理解しておくことは、紹介される患者さんには無駄のない連携を受けられることになります。従って日ごろからどの病院は何を専門としているかなどの情報をいろいろな方法で

図2 地域医療連携室について

地域医療連携室(新診療棟1階)(室長 小河原 悟医師)

- 前方連携業務 地域医療機関からの事前診療予約の受付業務を行う  
 各医療機関からの FAX などによる患者紹介に対して診療科及び医師と診療予約調整  
 2007年度 約1,350件/月 約16,200件/年  
 2008年度 約1,420件/月 約17,000件/年  
 2009年度 約1,450件/月 約17,400件/年  
 2010年度 約1,580件/月 約18,900件/年
- そのほかの受付業務 セカンドオピニオン、禁煙外来、乳がん検診予約、子宮頸がんワクチン予約等
- 後方連携業務 急性期治療方針決定や手術等を過ぎた入院中の患者で転院先や退院後の療養先医療機関が決まらない方に対して退院支援や相談業務。

新規相談支援数  
 2007年度 651件  
 2008年度 526件  
 2009年度 779件  
 2010年度 976件



## 国際交流

# 日本での9年間を振り返って

福岡県留学生サポートセンター（2008年人文学部日本語日本文学科卒業）

張 春 瀟 （中国）

私は来日してもうすぐ10年目に入ります。このたび、福岡大学の『七隈の杜』で大学での思い出などについて書くことを引き受け、大学での生活について振り返り、久しぶりに大学生に戻ったようで、大学の風景や友達の顔が浮かび上がり、とてもワクワクとした気持ちになりました。

私の出身地は中国山東省の省都である「済南市」というところ。市内の北側に黄河が流れ、市内には「七十二名泉」と呼ばれる水量の多く美しい泉があります。済南の別名は「泉城」ともいいます。

私が来日したのは2002年10月11日、秋の日差しが強い日でした。その日から私の留学生活が始まりました。毎日分からないことより新鮮なことばかりで、最初の一週間、ドキドキした毎日をどのように過ごしてきたか、今でも鮮明に覚えています。その後、日本語学校での学習とアルバイトの毎日が1年半も続きました。慣れ親しんだ町から離れたくないこともあり、受験は福岡大学の人文学部日本語日本文学科を選びました。

や相談支援なども行っています。地域の住民への啓蒙活動のために、患者さんやその家族に対して、がんに関する正しい知識を付けてもらうように「がんセミナー」を毎月開催しています。また病院の本館には新しい化学療法室の奥に「がんサロン」を設けて、患者さんや家族のくつろぎと情報交換の場として利用してもらえるようにしました。

(3) 福岡市の一般市民の方へ  
 教育病院・診療拠点病院である当病院では、広く福岡市の住民へも情報の発信を行っていません。病院や各診療科の主催する市民公開講座の開催、有線放送

のi-COMの医療番組である「テレビdeホームドクター」(URL: <http://www.nijy.com.jp/tv/channel/fukuoka/homedr.html?revision=0&>)には毎月福岡大学の医師が出演して病気や治療の分かりやすい説明を行っています。毎月の放送がすでに5年を超えて長寿番組となっています。またほかにも不定期ながらラジオやテレビの健康・医療番組の制作を行っています。

新診療棟開業と地域貢献

2011年1月に新しい診療棟が完成し、福岡市営地下鉄七隈線 福大前駅との直結で天候に左右されない、患者さんに優

しい病院が稼働しています。また、併設された「福大メディカルホール」を開放して、健康や医療問題を考える研究会やセミナーなども行われています。地域の方々が気軽に参加できるように、分かりやすい内容のセミナーも開催していく予定です。健康をキーワードにした地域連携ネットワークを強めて活性化を図っていききたいと思っています。

し、この困ったことは私にとって大切なことでもあります。入学式や学部学科の顔合わせなどの集まりの後に、「科目登録」が始まりました。「必修科目」や「選択必修科目」などの単語が出てきて、留学試験でこのような単語は習ったものの、実際に使う場面はなかったし、今まで中国で決められた授業を受けるのが当たり前だったこともあり、突然、自分で授業を選べると言われると、頭が真っ白になりました。しかし、その時は国際交流センターの方が新入生のために、「科目登録」のための学生ボランティアを手配してくださいました。私は非常に運が良く、私のサポーターは同じ学部の先輩だったため、学部・学科のことをいろいろ詳しく教えてもらったため、最初はどつなるかと心配していた「科目登録」はその先輩の助けで無事に終わり、順調に授業を受けることができました。私は「科目登録」を通じて、その先輩と日本の大学で初めて友達になり、いろいろ話す中で、ある大事なことに気付きました。それ



私の宝物

福岡大学での4年間には数え切れないほどの思い出があります。その中で、今でもはつきり覚えていることが一つあります。それは入学当時、一番困った「科目登録」の思い出です。しか



済南泉城広場

は「日本人学生は私たち留学生を敬遠していることは決してなく、実はいろいろと交流したいと思っている」ということです。それから私は多くの日本人の友達をつくらうと思うようになり、日本人学生と交流するようになりました。

授業の休憩時間や終了後に、日本人学生と日本の漫画について話をしたり、中国のことを話したり、時事から日本と中国の文化までさまざまなことを遠慮なく話し、気付いたら立つたままで1時間も話すことが何回もありました。みんなとたくさん交流をすることで多くの日本人学生と友達になり、楽しい毎日でした。実は今でも大学の友達と連絡を取り合っています。いつも励ましてくれたり、一緒に笑ったりと友達は私にとって何より大切な宝物です。

就職活動

毎日充実した大学生活を過ごしているうちに、ますます日本、そして福岡が好きになり、卒業後も日



サポートセンターで留学生の相談にのる筆者

本で就職したいと思うようになりました。ただし、日本で就職活動をするにあたって基本的な就職活動の仕方、マナーなど、一から勉強する必要があります。それを知らずに就職活動を始めた私は、当初、合同説明会の会場で日本人学生がしない失敗ごと、例えばコートを着たままブースを訪問するなどの基本的な失敗をたくさん経験しました。その後、日本人の友達に相談し、いろいろアドバイスをもらうことで、やっと就職活動を進めることができるようになりしました。

就職活動は私にとっては大学入学時の「科目登録」と並ぶもう一つの大きな難関でした。就職活動の基本的な常識を勉強するのも大変でしたが、最も苦勞したのは「履歴書」の作成でした。履歴書の内容がなかなかうまくまとまらず、どうしたらいいかわからなくなった時、就職・進路支援センターの方に相談に行きました。そこで、「内容の説得力が弱い」とアドバイスをいただき、一緒に自己分析をしていた

だいたり、修正していただいたりと、何度かの書き直しを2週間行い、私の履歴書はやっと完成しました。はじめは履歴書の作成で2週間もかかるとは思っていませんでした。しかし、同センターの方が丁寧に修正や指導をしてくださったおかげで自身の考えもまとまり、内定につながったと思います。その後も、周囲のアドバイスなどにより、大学4年生の11月に内定をもらうことができ、日本で働く夢も実現できました。

現在の私

福岡大学で多くの宝を得た私は、現在、福岡県留学生サポートセンターに勤めています。

このセンターでは、留学生に留学の入り口から出口まで一貫したサポートを提供しています。例えば、県内の大学に在籍している留学生へのアルバイトの紹介、各種生活の相談、就職の支援や情報提供を行っています。また、留学フェアを通じて国内外の留学

希望者への情報提供もします。私は今、留学生の就職・生活支援を担当しており、日本での就職を希望する留学生にアドバイスをしています。私の経験を後輩の留学生に伝え、私と同じ間違いをしないよう、就職活動を頑張ってもらいたいと思っています。

日本でのこの9年間は私にとっては何より貴重な時間でした。また、福岡大学での4年間はさまざまな学びがあり、教科書だけの知識にとどまらず、社会人になっても役に立つ知識ばかりでした。日本に来て9年たった今でも、日本に来て良かった、福岡大学に留学して良かったと思っています。

これからも中国の留学生たちに日本へ留学する魅力を伝え、また中国の人々にも日本、福岡を知ってもらいたいです。これが私の本当の役割とと思っています。



## 国際交流

# Bienvenue aux Francophones

人文学部フランス語学科4年次生

小川 伸



フォルビエールの丘から、リヨンが一望できる。

その想いがあつたからだと思います。

私が留学したのはフランスの真ん中より少し南のローヌ・アルプス地方のリヨンにあるリュミエール・リヨン第2大学です。リヨンは、フランスでパリに次ぐほどの大きい都市でありなが

「ようこそ、フランス話者の世界へ！」タイトルにしたこの言葉は、フランス文化の最初の授業で、あるネイティブの先生がおっしゃった言葉です。私が本学人文学部フランス語学科に入学してから3年以上たちましたが、今でも深く心に残っています。この言葉を聞いた時、「いつかは、本当のフランス話者になりたい」と、夢を抱いたことを覚えています。その反面、日本人が本当にそうなるかどうかの不安も抱いていました。そして、私は、入学してから留学するまでの2年半、福岡大学の直営寮である、国際交流会館で多くの留学生と共に生活しました。異文化を持つ国で、その国の人たちとその国の言葉を使って生活している彼らは、これから勉強していく私に希望を与えてくれ、彼らと接することで今までの自分の人生で知り得なかった世界に触れることができました。彼らが帰国する際に私のことを「日本の弟」と言ってくれました。単純ですが、この時、夢が具体的な目標に変わりました。

「勇気と希望を与えてくれた彼らに再会し、成長した姿を見せたい。」

私が一途に留学という目標に向かって歩んでこられたのは、



ら、世界遺産に登録される旧市街地や丘にそびえ立つフォルビエール大聖堂などが有名で、きらびやかなパリとはまた違う雰囲気です。しかし、確かにフランスを感じることもできる、美しく文化のある町です。一説によると、映画はリヨンで生まれたそうです（アメリカ人はアメリカ発だと言つ）。なぜ、留学先にリヨンを選んだか、というと、2年次生の時にパリを観光した際に、学んだばかりのつたないフランス語を試し、帰ってきた言語が英語だったことに、ショックを受け、「地方の方が、より言語を学びやすいのでは」と考えたからです。もう一つは、私に留学を決意させてくれた留学生在がリヨンで学んでいたことも理由です。単純ですが、知っている人がいることは、非常に心強いと思っていました。

実際に住み始めた時は、文化や常識の違いによるショックは少なくありませんでした。例えばお店での店員の態度や受付などです。到着してしばらくは、インターネットを使える場所が近くのアースト

もしていましたが、行ってみるといろいろな人が話し掛けてくれ、友達が増えていきました。机上では学べない、生きたフランス語に触れることのできる大切な時間だったと、今では思っています。ちなみにパーティーの時は、多少うるさくしても事前に知らせておけば、アパートの住人も寛容に受け入れてくれます（時には注意されますが・・・）。

数々の出会いを通して、自分自身について考える機会も少なくありませんでした。その一つの例で、授業とは別に通っていた語学学校で出会った一人の女性との出会いです。彼女はブラジル人の45歳の女性で、若い時分、学校に行くことができず、早くに結婚し、一人目の夫の時には家庭環境が芳しくない中子どもを育て、やっと手に入れた時間を利用して長年の夢であったフランスにたった一年だけ留学していました。その話を聞いたときは、その場にいるのが恥ずかしくなるほどのショックを受けました。

私は、自分がどれほど幸福で、世界には私が普段当

フード店だけだったこともあり、インターネットを使ったために安い注文で長居する私たちに腹を立てられたり、保険の手続きのためにしばらく並んだ後、ほんの1分窓口対応の時間が過ぎただけで私の労働時間は終了した、と対応を断られたりしました。日本人の常識しか頭がない私には、すぐにはなじめませんでした。しかし、「私が外国人であること」そして、「ここは日本ではないこと」を常に念頭に置くことで、少しずつ変わることができました。そして、なじめばなじむほどに見えてくるフランスという国、そこで生活する人々の良さも見えてくるようになりました。例えば大学生の態度などは、学ぶべきところが多くあると思います。授業中、学生と先生の間言葉が飛び交い、学生が積極的に知識を取り入れようとする姿勢が印象的でした。そして、まじめさだけでなく、個人の家でのパーティーでは羽目を外し、学生という身分を精いっぱい楽しんでいました。初めはパーティーに出るのは怖いような気

たり前だと思っていたことすら、夢にしている人がいて、「時間は誰にでも平等」というのは、文化、経済のレベルが同じ人間の間だけの言葉だと痛感しました。そのほかに、3・11の東日本大震災の時には、たくさんの方が日本人というだけで、心配して声を掛けてくれたり、私が募金のボランティアをしている時なども励ましてくれたり、と人の優しさを切々と感じることができました。チェルノブイリの際にも多少の影響を受けたフランス人は世界的惨事としてあの事故をとらえ、原発国家であるからこそ他人事ではないかのような優しさには、世界は一つであることを、感じさせられました。

ところで、私は留学が決まった時に「Francophoneになる」とは別にもう一つ、テーマを決めていました。それは「再会」です。私には、福岡大学に入学してから寮で一緒に住んだことがあるヨーロッパ人が18人いました。今回、再会できた人は14人で、会えなかった4人のうち3人は、その

時日本で働いていました。再会できなかった人が一人いましたが、彼からは、スカイプなどで、留学の先輩としてのアドバイスをもらいました。再会したほとんどの人の家で、ホームステイをさせてもらいました。最も印象に残っているホームステイは、ヨーロッパの1年で最も大きなイベントであるクリスマスの時に招待してもらったことで、2009年から1年間留学していたエマニュエル君の家でのことでした。たくさんのクリスマスのご馳走やワイン、ケーキなど十分に満足していましたが、招待してくれた家族、その親戚の方々さえも、「エマニュエルと友達になってくれた日本人」として、家族と同じようにクリスマスプレゼントを用意してくれました。そのぬくもりに満ちた行為には、思わず涙が出ました。ほかの再会した人たちも再会した時には私を「弟」と呼んでくれました。また私に新しい「出会い」を与えてくれました。その出会いとは、彼らの家族やその友達もそうなのですが、彼らの後輩とし



クリスマスにホームステイをさせてくれた家族と

て、また日本に興味を持ってくれた人たちとの出会いでした。私はそれを大切にしたいと思い、日本の魅力を伝えました。その新しく出会った人のうち2人は現在福岡大学に留学しています。

再会するにあたって旅行した国は、フランスはもちろんイングランド、ベルギー、イタリアで、ほかにもヨーロッパの中心に位置するフランスにいたことで、いろんな国に行く機会が多くありました。例えば、スイスやベルギーに移動する際は、フランスの新幹線TGVを利用したり、イタリアやスペインには、バスを使って移動したりすることもできました。ほか、ギリシャ、オランダ、ポルトガル、スコットランドと全部で9カ国も回ることができました。友達がいらない国へはバックパッカーとして行くなど、学生ならではの経験もたくさんでき、自信にもつながりました。

私はこの留学で、語学力の向上と自身の見聞を広められたことはもちろんですが、国を隔てた再会を

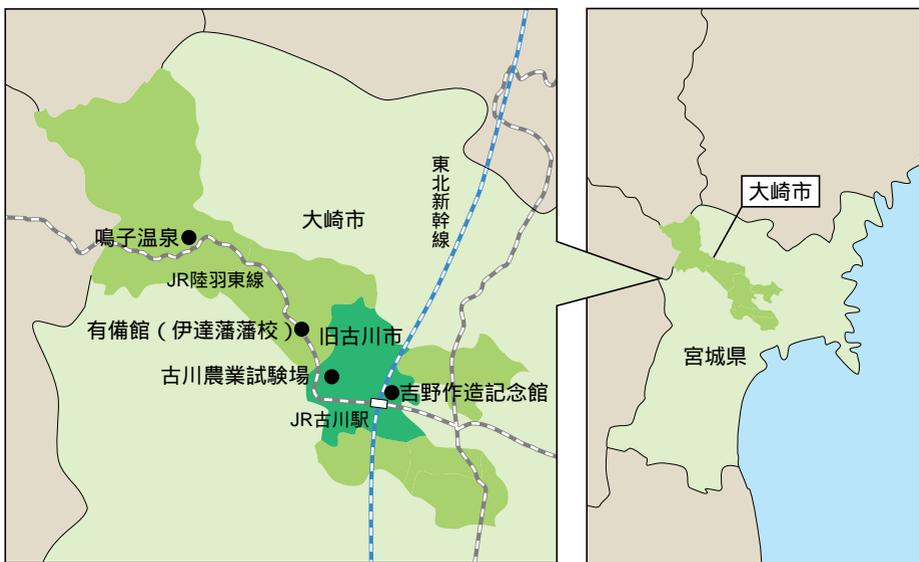
通し、自分の築いてきたものが確かなものであったことだと確信しました。そして、新しい人との「出会い」、これらが私の人生をより豊かにしてくれるであろうと今、期待にあふれています。

留学を考えるにあたって、周りの友達など意見交換をしていくうちに、就職活動に対する不安や実際に留学する意味があるか否かなど、多くの不安がありました。しかし、今ではこの留学を決意したことは、何の後悔もありません。私の人生の中でこれほど私を大きくしてくれた1年はありません。機会を与えてくださった方々、この留学で出会った方々に深くお礼を申し上げます。

今なら、胸を張って言えます。

"Je suis japonais mais je suis francophone!!"

私は、日本人です。しかし、私はフランス語圏人です!!



## 故郷の名前

人文学部フランス語学科教授 遠藤 文彦

古川市は、私が生まれ、18歳で大学に入るまで育った町である。平成の大合併でその名前はなくなり、今は大崎市と呼ばれている。海（太平洋）からは30〜40キロ離れた内陸部だが、山（奥羽山脈）までもまだ30〜40キロ行かなければならない。海も山もない見渡す限りの平地（大崎平野）であり、果てしない空（ただの空…）である。もとよりくだんの大合併で面積は6倍！となり（人口は2倍弱）、米沢から出た伊達政宗が仙台に移る前に城を構えていた隣町岩出山や、温泉やスキー場で有名な鳴子も、みな大崎市になってしまったので、海はさておき山もない町とはいまや言いがなくなってきた。

古川といい大崎といい、どこにあるのか、何県にあるのかさえ、たいていの人は知らない（どこの県

いる。忘れずに言っておけば、ササニシキやひとめぼれが誕生したのは米どころ古川の農業試験場においてである。それにしても町の知名度はそんな程度だから、出身を聞かれてあれこれ説明するのが煩わしいときは仙台だと答えます。そう答えるときもある。そう言われてことさら鹿児島島の川内と思う人もめったにないが、九州に来てからは東北の仙台だと、いわずもがなの説明を加えることがある。ただ、そんなときも宮城の仙台とは言わない。それは仙台の方が宮城よりもはるかに知名度が高いからで、逆に宮城はどこかと聞かれて仙台のある県だと答える方が答えとしては通る。なにせ宮城県にある市町村名を挙げよと問われて仙台の名前さえ出てこない人も結構いたのだから、……3月11日の地震までは。

たしかに宮城県は地震が多い。大学に入った年（1978年）の6月、東北本線（新幹線はまだ開通していなかった）を仙台から古川まで帰るときに乗っていたディーゼルカーが急にがたがたと揺れて停車

にもありそうな名前だ。だから、どこか？と聞かれれば、宮城県の北部、仙台の北隣（といっても30〜40キロ離れているが）、新幹線で言えば仙台のひとつ先の駅と説明する。その古川、いや、新生大崎市から、この夏の甲子園に仙台圏（育英と東北）以外の高校としては久々に古川工業が出場した。大崎地方（大崎市とその周辺地域をこう称す）では初の快挙であつただけに初戦は突破してもらいたかつたが、残念なことに佐賀県勢に敗れてしまった。ちなみに女子バレーでなら古川商業（現古川学園）が全国制覇を何回か果たしており、決勝などでよく九州勢と対戦することがあるので知っている人もいるかもしれない。有名人も数えるほどしか出ていないが、万人に誇れる著名人としては政治学者の吉野作造が

した。脱線か、と思った。が、停車してからも揺れはゆるゆらと続き、車窓から見える電柱がゆさゆさ揺れているのが目に入って、それが脱線ではなく地震であることに気が付いた。33年前（もうそんなになるか！）の宮城県沖地震である。もともと揺れているものに乗っていたので実際の揺れがどれほどのものだったか実感はないのだが、やがて揺れは止みしばらくして列車が動き出したのだったか、あるいは列車を降りて線路沿いを歩いていったのだったか、とにかく最寄りの駅（たしか松島駅だったと記憶している）にはたどり着いていた。日も暮れて、これは待合室で一泊かと覚悟しかけたが、そういうことにはならずすんだ。どうなったのか忘れていたが、どうにか電話（むろんケータイはない）が通じて父が車で迎えにきてくれたのだったと、このたびの震災後に一度帰省した折に母が思い出させてくれた。翌日から被害状況（33年前前のである）が分かってくる、仙台では倒れたブロック塀の下敷きになって

かんできたりして落ち着かず、こういうときにはかけても仕方がない、かけない方がいいと分かっている、でも、繰り返し実家の固定電話に、そして妹の携帯電話にかけているうちに、3時からの会議のことはすっかり忘れて帰宅してしまっていた……。妹が公衆電話からかけてよこしてようやく連絡がついたのは3日後、月曜の朝方であった。皆無事、家もなんともないとのこと。古いのを壊しておとし新築したばかりの家は、頑丈なつくりだったようではほぼ無傷だったが、オール電化にしたのがたまたま、明かりがつかないのはまだしも、風呂はもとより、煮炊きもできない、トイレを流すこともできない。ガソリンがないのには文字通り往生したらしい。スーパーに買い出しに出るにも徒歩が自転車、出てもまともに売っているものさえないという状態がずいぶん長く続いたようである。それにしても、父の里は宮城県でも沿岸部にあり、それゆえ父方の親戚はそちらに多いのだが、地震発生から10日ほどして父の

いぶ死者が出た。古川のが家もずいぶん揺れたようであったが、いずれどこかゆがんだりまがったりはしたのであるが目立つた被害はなかった。この地震をきっかけに建造物の耐震基準が大いに強化され、その後も容赦なく再来する大地震の被害を少なからず減じたものと思われる。

さて、今回の地震であるが、わが古川市では震度6強を観測した。あの日、午後3時前、私は震源地から南西に千何百キロも離れたところにある大学の構内の旅行代理店で航空機の予約を済ませ研究室に向かつて歩いているところだったが、妻から携帯電話で、宮城県で震度7の地震発生との知らせを受けた。7！……、さすがに7は尋常じゃないと思って、さっそく実家に電話をかけたがもう通じない。7と聞いて電話が通じず、何がどうなっているのか知りようがないと、元来大して親思いでもない私もさすがに心配になり、倒れた茶筒かなにかに挟まってどうにかなってしまうている老母の姿が浮

妹の長男、つまり私のいとこが石巻市の中心部で仕事津波に遭って行方不明だったのが遺体で見つかった。石巻専修大学の近くにある彼の家は玄関先まで津波が来たものの浸かりはしなかったとのこと。帰宅していれば、あるいは休日であったなら、難を逃れていたかもしれない。諸々の手続き、埋葬、葬儀のことなど、叔母は兄である私の父を頼りにしていたようだが、なにせガソリンがなくて行けず、すぐには力になれなかったらしい。以上は3月11日の本震のみの話。

というわけで、わが故郷は海からだいぶ離れた内陸部にあり、揺れは相当ひどかったが、沿岸部ほど人的物的被害はなかった（あったにはあった、大いにあったが桁が違う）。ゆえに、オサ、キシの名を報道で耳にすることは比較的まれだったので、今この文章を読んでも、そんな地名は聞いたことがないという方が多いのではないだろうか。一方、被災地として報道される沿岸部の町の名はテレビやラジ

## キャンパス風景

### 壮行会

体育部会各部で活躍し、国際大会ならびに全日本大会に出場する選手の健闘を期し、キャンパス内で壮行会を開催しています。



オで耳にしない日がないと言ってもいくらいである。そんな町の中に南三陸町があるのはいまや皆さんご存知であるが、はじめそれは宮城県出身の私にとっても聞き覚えのない地名であった。調べてみれば、志津川と歌津の両町が合併してできた町であった。風光明媚であったあの土地にびつたり、この上なく美しい二つの地名が、わが故郷の名前同様、例の大合併の波に飲まれてしまったのである。こんなときに名前の話でもなからう、と思われる向きもあるかもしれない。しかし、たかが名前、されど名前である。実際、名前というものは、ノスタルジックな心の痛みにとどまらず、社会に深刻な実害をもたらすことがある。いわゆる風評被害などは名前が地域に及ぼす悪影響にほかならず、いつでも悪いのは名前ではなく、それを発し受け止めるわれわれ人間の方であるが、周知の通り、それはときに甚大なものとなる。その点、ただでさえ改名されたばかりで人の口へのぼることの少ない大崎市

の名の下に埋もれ、以後広くその名を知られる機会を失った感のあるわが故郷古川はまだ運がいい方なのかもしれない……、と思いたいところだが、しかし現実には、いまや何につけことあることに人々の口をつけて出てくる「ト、ホク」という名の下にくぐられてしまえばどこもかしこも同じことで、宮城県の北部にあって原発から比較的遠いところにあるとはいえ、その古川の米も今年はどうな売れ行きになるのだろうか考えると、震災後初の収穫期を迎え、いつもは故郷のことなどあまり気に掛けない私でも、いささか心配になってくる今日このごろなのである。

2011年秋



## すべては読書からはじまった

本を作ること、読むこと。  
その怖さと魅力

フリーライター 入江 香都子

好きなことより苦にならないことを仕事に選ぶ

職業を問われ「フリーライター」と答えると、なぜこの仕事を選んだのか、と訊かれることがある。そんな時、私は即座に答えるのだ。「それが、自分

が大好きだった。その一方で、書くことは好きというより一種の特技だった」と自分では思っている。(小学生時代の作文や読書感想文から、壁新聞、日記や手紙、そして大学でのレポートや卒業論文に至るまで、全く苦にならずに延々と書き続けられた。就職後もそれは同様で、私にとって、「苦にならないこと」を仕事に選ぶことは、「好きなこと」を選ぶよりも重要だったように思う。好きなことは、思い入れがあるだけに状況によって逆に幻滅したり嫌になることもあった。苦にならないことは、感情に左右されず続けられる。そう、食事をするように毎日繰り返しても飽きず、呼吸をするように自然に。ほどなく、創刊して間もない雑誌の仕事を紹介され、私は福岡にやってきた。15年前のことである。

取材とは、失礼な行為である

元手のかからない仕事である。フリーで仕事をしている同業者を見回すと、例えば、カメラマンやデ

にとつて苦にならない仕事だったから」と。

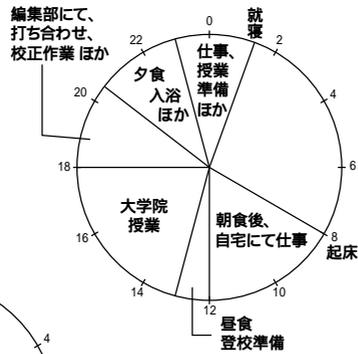
大学院卒業後、地元のイベント制作会社に入社して働く日々の中で描いた夢は「自宅で仕事をする」ということだった。折しも時はインターネット黎明期。メールはおろかパソコン自体が一般的ではなかったころに、これからはパソコンを使い家で仕事ができる画期的な時代がくるといわれ、驚いたものだ。いわゆるSOHO (Small Office Home Office) のことである。自営業の親が家で働く姿を見てきたからか、家に居ることが好きだからか、私は未来を夢想し胸躍らせたものだった。あとは「何をするか」である。

会社員時代に、文章を書くだけでなく、企画書を作りイベントの現場に行き、見積もりを作り営業もして、なんでもやってきたことから、逆にやりたいことは自然と絞り込まれていた。会社勤めを辞めた時、漠然とではあるが、私は「書く」ことを仕事にしたいと思っていた。小さいころから本を読むこと、せいで筆記用具類とパソコンぐらいたらう。

ライターが機能豊富なカメラやパソコンをそろえなければならぬことを思えば、ライターのツールはむしろ必要なのは、旺盛な好奇心と多彩な表現のひきだし(多ければ多いほど良い)だ。取材をする場合には、対象者・物に対して興味を持たなければ的確な質問はできないし、些細なことからも情報収集して、相手から言葉を引き出し話を広げることが求められる。何に対しても好奇心を持つこと、そして人が好きであること、この2点が基本だと思う。

取材で普段行けないところへ行き、見ることにない舞台裏を覗かせてもらい、なかなか出会うことのないような人に会い、さまざまな質問を投げかけ、貴重な話を聞くことができる。このおもしろい仕事に就けたことを本当に幸運なことだと思う。しかし同時に、「取材とは失礼な行為である」ということをいつも肝に命じてもいる。フリーになって間もないころ出会った、一人の編集者(良い本を作るため

グラフ1：  
2011年版ある  
大学院授業日の  
スケジュール



グラフ2：  
2011年版ある  
取材日の  
スケジュール

かの心に届いた時の喜びは名状しがたいものがある。  
アカデミズムとジャーナリズムをつなぐ  
さて、持ち前の「旺盛な好奇心」で、文学や言葉  
についてもっと学びたいと思つたようになった私は、

言葉の向こうに読者が見えているか  
最近、ある人から「言葉を扱う仕事は、怖くはありませんか？」と訊かれた。まさにその通りで、とても怖いことなのだと思う。そして、この「怖い」という意識を持つことが、言葉を扱う仕事をしている人間にはとても大切なのだ。そう思えるからこそ、

には決して妥協しない頑固さで知られていた)から  
教えられた言葉である。  
取材とは、相手の人には見せない舞台裏を覗き、  
普通なら訊かれもしないことをあれこれ質問したり、  
話す必要のない言葉をも取って聞き出すこととして  
することである。その人のテリトリーにズカズカと  
踏み込む、失礼な行為である。取材をする人間はそ  
う心得ていた方が良く、と。それ以来、インタビュー  
の際には、その人の大切な時間をもらい、大切なも  
のやことをみせてもらい、聴かせていただくのだと  
いう気持ちで、意識して持つように心掛けていた。

書くことに対して慎重になるし、謙虚にもなる。そ  
して、書いたことに責任を持てるようになる。

情報として間違いないのは当たり前のこと。誤  
解を招いたり、誰かを傷つける表現をしてはいない  
か、文章は読みやすいか、読者に伝わる言葉を選べ  
ているか、等々。そうやって、原稿を書く時はい  
つも取材した相手のことと、それを誌面で受け取る  
読者のことを同時に考える。だから、表現のひきだ  
しは多いほど良い。繰り返ししてきた本作りの作業の  
中で、経験し、失敗し、学んだことから、「怖さ」  
を幾重にも想定し、最後の校正を終えるその瞬間ま  
で、一言一句、自分に問い続ける作業は果てしない。  
そんな緊張状態が続く、本が仕上がるまでのスト  
レスはなんとも重苦しく、座りっぱなしで机に向か  
う日が何日も続けば、体もついには悲鳴を上げる。  
それでも書き続けられるのは、やはり苦にならない  
ことが大きいのだと思う。そうして、伝えたい思い  
にぴったりの表現を見つけ、世に送り出した文が誰

2005年、福岡大学大学院に入学した。仕事をし  
ながらの学生生活はハードではあるが、自分でスケ  
ジュール調整できるフリーランスのメリットを生か  
して、授業はできるだけまとまった日に受講し、時  
間のやりくりを工夫している。例えば、午後から三  
つの授業がある今年度の火曜日は、午前中と授業後  
の時間を仕事に充てる、という具合に。

やむを得ず欠席することもあるが、基本授業優先  
で、その時々優先順位を決める癖もついてきた。  
原稿の締め切りとゼミの発表が重なれば地獄を見る  
ことになるが、それでも、充実した学生生活で得た  
ことは計り知れない。決して大袈裟ではなく、文学  
を学んで人生が変わった、と言っても過言ではない。  
まず、小説の読みが深まったことで読書の楽しみ  
が倍増し、「表現のひきだし」もずいぶん増えた。  
自分にとって、「苦にならない」書く仕事の原点は、  
読書にあったのだと感じている。また、文学を学ぶ



ことは、特別な資格に繋がるわけではなく、社会で役立つ学問ではないと思われがちだが、これほど実社会で即役立つ学問はないと、今は心から思っている。上質な文学作品に触れ、読み解き方を学ぶことで、それがそのまま実生活の生き方や物事の考え方に応用できることが実感できるからだ。現に、書いた記事が編集者や読者から喜ばれることも増えてきて、そうなると学問も仕事も相乗効果で、モチベーションがぐんと上がる。何年やっけていても、書いたものが褒められるのはうれしいことなのだ。

こうして私は図らずも、「書く」「側」と、文学研究という「読む」「側の立場」、両方を行き来することになった。同時にそれは、大衆に向けて開かれていくジャーナリズムと、専門的な知識に磨きをかけるアカデミズムという、一見正反対に思える分野を横断する試みでもある。が、私はどちらも密接につながっていると思うし、むしろそれらを連関させることに

よって両者のおもしろさは無限大に広がると信じている。そして、どちらにもかかわっている自分だからこそできることがあるのではないかと思つたのだ。最近では、市民向けの文学講座の講師などをやる機会もいただき、その両方の魅力を伝えることに挑戦している。書くことと読むこと、双方に携わっているからこそ感じられる魅力を、ささやかながら一人でも多くの人に伝えていければと思っている。

フリーライター

入江 香都子



イベント制作会社のコピーライターを経て1997年より福岡にてフリーランスのライターに。雑誌、新聞、企業の広報誌等で編集・取材・執筆を担当。2005年より福岡大学大学院人文科学研究科博士課程後期に在籍、ライターとしての経験や視点と文学研究の視点を生かし、文学講座講師や講演も行う。



外国文学や文学理論にも造詣の深い大嶋仁先生のもとで日本近代文学を研究。

「夢」から学ぶこと

財団法人日本サッカー協会  
こころのプロジェクト推進室  
(2005年スポーツ科学部卒業)

今井祐樹

昨今、少子高齢社会の到来や都市化・高度情報化

の進展など社会的変化の中で、子どもを取り巻く環境も著しく変化してきた。核家族化が進み過保護な子育て・ゆとり教育の弊害が、内部また外部的ストレスのはけ口を見いだせず、いじめや不登校、自殺願望を持つ子どもが多く社会的問題になった。

そんな中、サッカー界は何ができるのか。私の仕事の原点である。

に「福岡大学進学」という小さいがしっかりと目標ができたことは、悶々<sup>もんま</sup>としていた自身の生活に再度メリハリを生み、結果として、何とか進学することができた。

進学を機に、私は、再度「夢」を持つことができた。「サッカーにかかわる仕事に就きたい」

漠然とした「夢」だったが、その夢を持てたのはスポーツを取り巻く基礎的な知識や現状、競技力を向上させる最新のトレーニング内容、それらを学び実践できる環境が整備されている福岡大学に進学したことで見えた多くの可能性だった。

「夢」を持った私にとって大学での生活は日々刺激を与えてくれるものだった。

これまでの私は、自慢できることではないがあまり勉強というものを積極的に取り組んだことがな

高校時代の私は、「サッカー選手」という「夢」を追い求め部活動に励んでいた。しかし、けがを繰り返し、入院。多くの時間をリハビリに費やした結果、高校卒業前の私の選択肢には「サッカー選手」「進学」もなかった。けがからの復帰が、「ゴール」になってしまい、その先のことイメージでできずにいた。

しかし、「可能性も広がる」と担任の先生から「大学へ行け」との後押しを受け、これまで未知であった進学の道を選択した。

ただ、進学を一度も考えたことのない私にとっては、入院時のリハビリ中、散歩の際に見かけた大学「福岡大学」以外の大学を知らず、受験科目などの情報も皆無。無謀な受験となった。

けがによる入院期間が長く、通常の授業をあまり受けることができていない私の学力を補うための勉強は、一日15時間でも足りなかった。

それでも、全くイメージできていなかった「進路」があった。だが、スポーツの専門知識を学ぶことが自身の成長につながると感じられたのは再度「夢」を持つことができたからである。中でもスポーツ社会学で学んだヨーロッパの総合型地域スポーツクラブやスポーツ文化に興味を持った。例えば、学校教育の中で培われてきた日本の体育「スポーツと、文化・権利として行ってきた欧米との「スポーツ」の」とらえ方の違い。日本でも2010年までに成人の週1回以上のスポーツ実施率を35%からヨーロッパなどの先進国並に50%に上げるために、ドイツのようなスポーツクラブを作ろうという試みである「スポーツ振興基本計画」などは非常に興味深かった。多種多様なニーズに対応でき、生涯スポーツや地域コミュニティを形成できる施設は今後のスポーツ発展の柱だと感じられるものだった。

卒業後、株式会社大分フットボールクラブ（大分トリニータ）に就職して日本サッカー協会が行う\*スポーツマネージャーズカレッジを受講したのも大

学での授業がきつかけである。

そして、\*<sup>2</sup>Jリーグ百年構想を促進する中でも総合型地域スポーツクラブが担う役割を大分フットボールクラブで行っていけるよう施策を考え、取り組む部署に入り活動した。さまざまな活動から感じたのは子どもたちの精神・身体育成への寄与。この役割の大きさだ。遊ぶ時間の少ない現代の子どもたち。遊びやスポーツから学ぶ仲間とのかわり方、想像力や忍耐力。それらの未発達がもたらす弊害は、いじめ、自殺や引きこもりなどの社会的問題と無関係ではないはずだ。

そんな中、2007年、日本サッカー協会では、子どもを取り巻く社会的問題に対して「夢」をテーマにプロジェクトを発足させた。それは、JFA ころのプロジェクト」というもので、「夢」を追い求め「夢」をつかんだ先輩の経験から、「夢を持つこと」の大切さを伝えていくものである。「仲間を尊重すること」の意味、「フェアプレー精神」の

「あきらめない気持ち、支えてくれる仲間の大事さ、努力することの大切さ」など次世代を担う子どもにもメッセージを送るものである。

総合型地域スポーツクラブのような施設や環境を整備していくことは「夢」を持ちやすい環境につながるかと信じている。その環境の中で、子どもの健全な成長を視野に入れたとき、「夢」を持つこと、その「夢」に向かって一生懸命取り組むことが、子どもを取り巻くさまざまな問題を解決するとは言わな

いが乗り越えていく大きな力となるはずだ。大分フットボールクラブを退社する際に新たな可能性を感じた私は、現在、日本サッカー協会のころのプロジェクト推進室で全国の多くの子どもたちを見ている。

「サッカー選手になって、ヨーロッパで活躍したい」  
「野球選手になって、メジャーリーグでプレーしたい」  
「パティシエールになって、人を幸せにしたい」  
「夢」を発表する子どもの顔は照れくさそうだが、



ユメセン（夢先生）授業風景  
2009年7月9日 岡山県玉野市立宇野小学校での様子  
夢先生：安永聡太郎氏（元プロサッカー選手）

真の意味を理解してもらい、自立心と社会性に富んだ、元気で魅力的な子どもをばくむと同時に「夢を叶えるために何をすべきか」を伝えていくもので

希望に満ちた素晴らしい顔をしている。

こんなすてきな顔をする子どもは、いじめをすることも悩みを抱えたときに自殺を思い立つこともないだろう。「夢」という目に見えないものの力を再度感じさせられている。

自身を振り返ってみても、「サッカー選手になりたい」との幼少期の「夢」は叶うことはなく、今の職を務めているが、「夢」や「目標」を追うことで自らが人間として大きく成長してきた。

また、一生懸命「夢」に向かい取り組んでいると必ず支えてくれる仲間ができる。

サッカー部で共に汗をかき切磋琢磨した仲間には多くの刺激を受けた。それはもちろんサッカーの技術もだが、トレーニングに取り組む姿勢や考え、また人間としての強さや優しさを感じたことは大きな意味で視野を広げることにつながった。

志した「夢」にたどり着けずとも、仲間と共に懸命に進み、視野を広げ下を向かなければ次の「夢」

を見つけて出すことができると感じさせてくれたのも仲間のおかげだったと感じる。

大学入学時に持った「サッカーにかかわる仕事に就きたい」という夢はそんな仲間たちからの刺激や支えがあったからこそ叶えることができたと感じている。

また、今もなおその仕事を続けられているのは、「夢」を追いかける中で得られたさまざまな経験があるからだろう。

大人になると「夢」という言葉がどこか恥ずかしいものになりがちである。しかし、「夢」を持ち懸命に取り組んでいる人の顔はやはり輝いている。また、「夢」を追いかける人には必ず信頼できる仲間ができる。

子どもの問題が大きく取り上げられている中、今、何ができるのだろうか。一つの答えとして大人が「夢」を持って懸命に取り組む姿を子どもたちに見せることではないだろうか。



筆者、日本サッカー協会 JFA ハウス前にて  
(2012年1月)

\*1 JFAスポーツツマネジャーズカレッジ(以下S M C)

自立した魅力あふれるスポーツ組織づくりを推進し、スポーツ文化の創造、人々の心身の健全な発達と、社会の発展に貢献できる、優秀なスポーツマネジャーを養成することを目的とした人材育成事業。S M Cで学ぶスポーツツマネジメンタル地域に根差し、人々に愛される、魅力あるクラブづくりの必要不可欠なツールとなる。地域の未来のため、クラブの自立と共生のため、ビジョンを持ち計画し行動できるマネジャーを育成する。

\*2

リーグ百年構想  
「誰もが気軽にスポーツを楽しめるような環境を整って初めて、豊かなスポーツ文化ははぐくまれる」という考えのもと、生活圏内に緑の芝生に覆

「夢」を持った人間は強い。なでしこジャパンからもらった勇氣や元氣も、選手みんなが世界一という「夢」に向かってひた向きに取り組む姿勢があったからこそ。

未曾有の困難に見舞われたわが日本。復興の力となるのは子どもたちのひた向きなまなざしと輝く笑顔。

今まで学んだ、組織や施設の整備を進めていく必要を感じながら、「夢」発見の機会を創造していきたいと強く思う。

「夢」は子どもにも大人にも勇氣と力を与えること信じている。

われた広場、アリーナやクラブハウスなどのハード面と年齢、体力、技能など誰もが目的に応じて優れたコートの下で、好きなスポーツを楽しめる場を整備する。

また、「する」「観る」「支える」、などのニーズに合ったスポーツの楽しみ方を提供することで世代を超えた触れ合いの機会を創造することを目指す。

\*3

JFAこころのプロジェクト  
このようなリーグの理念を分かりやすく訴求するために、リーグは「リーグ百年構想」スポーツで、もっと、幸せな国へ。」というスローガンを掲げ、リーグとクラブ、リーグ入りを目指すクラブが「地域に根差したスポーツクラブ」を核としたスポーツ文化の振興活動に取り組んでいる。

JFAこころのプロジェクト

リーグ、なでしこリーグ、JFL、Fリーグの選手、およびそのOB・OGや他種目のスポーツ選手(ユメセン)として小学校で授業を行う。「夢先生」は、「夢の教室」となる小学校を訪れ、自らの体験をもとに「夢を持つことの大切さ」「夢を叶えるために何をすべきか」「フェアプレー精神の重要性」などを講義と実技を通じて子どもたちに伝える。

プロスポーツ選手になるといふ夢を叶え、そしてなお、新たな夢に向かって日々努力を重ねている「夢先生」の言葉は、プロスポーツ選手という一職業を越えて子どもたちに伝わっていくのではないかと考える。

「ひろがれ! 福大」弁当の日」  
 商学部講師 太宰 潮

はじめに:「弁当の日」との出会い

「弁当の日」という活動を「存じだろつか。主に小・中学校で広がっており、親は手伝わずに、子どもたちだけで弁当を作るといふ活動である。弁当作りを通じて、家族とのつながりや家族への感謝を確認できること、また普段口にしない食品がどのように届いているのかなどの社会的な知識と、それに携わる人々への気付きなどを得ることが出来る。2011年10月時点で700校以上も小・中学校で実践されており、ここ福岡では西日本新聞社がその後押しをしていることから、特に広がりを見せている。私自身は2008年に東京から福岡大学に講師として赴任したが、外食産業の研究も行うことから、

作って持ち寄っていた。2008年度から初めてのゼミ生「一期生」を持つことになったのだが、普段学生に「自発的に行動すること」の大切さを伝えていく手前、まずは行動に移すということから、手始めにゼミ内で実施することにした。自分のお弁当(業界用語では「完全弁当」と呼ぶ)を作ること、ゼミ生に課したのである。実施を伝えるときには学生たちは非常に当惑していたが、ふたを開けてみると、立派な弁当を各自が作り上げてきた。

弁当の日は、気が付くと太宰ゼミの定番・名物となっていた。基本的には月一回のペースで、「弁当委員」が設定するテーマによる「一品持ち寄り制」として実施を行っているが、今までにさまざまなテーマが設けられた。「包む」、「春」、「ワールドカップ・ベスト8の国の料理」、「だ・ざ・い・う・し」。おの頭文字で始まる料理、「カレー」などなど。頭文字の回には、「オムレット」を作ってきた学生が多く居たり、「春」というテーマの回には、「異性を

「福岡で面白い食の活動がある」と知人に紹介してもらったのが、「弁当の日」との出会いであった。2008年3月に九州大学にて行われたイベントに参加し、そこで助産師である内田美智子氏のお話、それに「弁当の日」の創始者である竹下和男先生のお話。そして九州大学の学生の活動報告に触れることができた。

先生方のお話を聞いた時点で、この活動はこれから広まると直感し、福岡大学でもやってみたくと思うようになった。また自身が専門とするマーケティングの研究にも応用が可能だと、小売などの視点からさまざまなことを考えるに至ったのである。

福大で「弁当の日」を実践しゼミ活動への定着

2008年の4月に着任してから、講演会や本などで「弁当の日」のことを調べていた。九州大学では、「九大・弁当の日」として既に何回もの実績を積み重ねており、大学生たちが自分たちで料理を

ペア同士での弁当の交換



異なる学年での弁当の交換



おとす」という裏テーマを設定して料理を作ってくる者が居たりと、たまのお昼を楽しく過ごせるようになっていった。回によっては2年次生・3年次生

など上下の代が合同で実施をすることでゼミ内の交流を図ったり、また男女でヘアを作って「完全弁当」を交換し合う、ということも行ってきた。男女ペアで交換した際は、女子学生の食べる弁当なのに、男子学生が「脂ギタギタの肉たっぷり」弁当をあえて作って来たりするところが非常に面白い。また、自分ではできない料理に挑戦し、「スカイプで親と話し合いながら作りました」という今どきのコメントを残してくれた学生も居れば、「お父さんが釣ってきた魚を私が料理しました」と言ってくれた学生もいる。大学生でも、弁当作りを通じて家族とのコミュニケーションが生まれているようである。

そうして何回もの「弁当の日」を重ねていると、マーケティングを学ぶゼミではあるのだが、いつしか『弁当の日』がなけりゃ、太宰ゼミじゃない！とまで主張するゼミ生が現れるほどになった。2年次生のゼミの説明会の際にも、学生の間では「あそこのゼミに入ったら弁当を作らなければならない



毎年の「プレおせち」

ることもできた。片言の韓国語と日本語が飛び交いながら、必死に交流する学生たちの姿があった。留学生の方々には、日本の文化の一端を感じ、味わってもらえたかと思う。

普段の弁当の日の活動以外にも、学生が自発的に、

ぞ」という情報が出回っているようだ。ゼミの志望動機にも、「弁当を作って交流してみたい」というコメントがかなり多く入るようになった。マーケティングを学ぶゼミなのにこうした現象が起こるのは、本能的にこの活動の重要性を理解しているからでは、と勝手な推察をしている。

#### ひろがる・弁当の日

回を重ねていくと、さまざまな機会とのつながりができていく。九州大学箱崎キャンパスでの九大・弁当の日」に学生たちを連れて乗り込んだこともあれば、年末の「プレおせち」(おせち料理のどれか一品を持ち寄り、重箱を完成させる)では、インターネット上で九大のおせち料理と比較をした。おせち料理は田作りなどが似ることが多いが、同じ料理でも家によって味付けが異なるものを食べ比べるのも一興である。なお「プレおせち」は、2010年末には、韓国から来日中の留学生の方々と一緒に食べ

いろいろな場所で行われる弁当の日関連のイベントに参加するようにもなり、本学の近くにある梅林中学校の弁当の日に見学に行った学生もいた。太宰ゼミの活動を知り、ほかのゼミでも、「弁当の日」を実施するところが現れてきている。2010年度には、10月に竹下和男先生を、12月には九州大学の佐藤剛史先生と西日本新聞社の佐藤弘氏を本学に招き、ご講演を頂くこともできた。竹下先生のスライドショーでは、余命いくばくもない母親が、娘に味噌汁の作り方を教える「はなちゃんのお味噌汁」というシーンに涙を流すゼミ生の姿が見られたほか、講演後に「今日の夜から、台所に立ちます!」と宣言し、翌日に「ちゃんとお母さんと料理しましたよ!」と笑顔で伝えてくれた学生もいた。

2011年度からは「福大・弁当の日」を月1回ほどのペースで実施している。私のゼミ生が多くなってしまっているが、学校の教職員を目指す学生、他ゼミで興味を持った学生と料理を食べること

もあれば、大学の事務職員の方にご参加いただくこともある。学生たちにとっては、普段深く接することがない人たちとの交流の場にもなってきた。そのほかに、学生の最大の難関である就職活動にも思わぬ効果をもたらしている。農業や食に関する企業の面接で、「弁当の日」の話に企業の方が興味を持たれる、ということが分かってきたのである。食についてのさまざまな経験は、企業の方にも評価を頂いているようである。

おわりに

弁当の日は、個人のマーケティング研究にも多分に影響を及ぼしている。具体的には、地元の小中学校で弁当の日が実施される際に、近隣の小売店もしくは商店街が売り場を作り、小中学生が買い物にきた際にはひと言かふた言掛けることで応援し、地域でのコミュニケーションを増やす取り組みを行っている。福岡市では愛宕小学校と梅林中学校と当仁

つは、「福岡の学生は料理ができる」と言われるようになることである。小・中・高・大で活動がつながり始めたら、その日が来るのは遠くはないだろう。その日まで、「福入・弁当の日」から、徐々に、少しずつでも着実に、活動を広げていきたい。



「弁当の日」を紹介するスーパーの店頭の様子

中学校で、北九州市では田原中学校と南曾根中学校の弁当の日に合わせて、取り組みを実施してきた。中には、農業体験・収穫体験で生徒たちがお世話になった先の産品を、限定的に店頭へ並べ、まさに「顔の見える生産・顔の見える消費」を実現してきた例もある。

福岡市・当仁中学校の弁当の日の際は、校区内の唐人町商店街にて応援活動を実施した。パネルやのぼりを商店街内に設置し、9つの店舗に「弁当の日」を応援すること、食材や調理のことについて「声を掛けてください」とするメッセージを掲示した。その結果、若干ではあるが、お客さんと商店街の方々との交流を促すことができた。商店街は「コミュニティーの担い手」と呼ばれるが、弁当の日を介して、地域のお店と地域住民の血の通う交流ができれば、と考えている。

本学附属の若葉高校においても、1,000人規模で弁当の日が行われるようになった。私の夢の一

**福岡大学指定寮**

**指定寮の紹介と入寮のすすめ**

学生部学生課 **山口雅剛**

1 福岡大学指定寮とは

本学には大学が運営する三つの直営寮と民間が経営する指定寮を備えている。直営寮とは、男子寮の「自修寮」、外国人留学生と日本人学生の男女混住の「国際交流会館国際交流棟」、体育部会各部に所属するトップアスリート（男子）が生活する「体育寮」である。本稿では特に指定寮の紹介をしたい。本学の指定寮制度は、1965年からはじまり45年以上の歴史と伝統を持ち、多くの学生を社会へと送り出してきた本学が誇る独自の制度である。

指定寮は、大学周辺の民間下宿のうち本学の教育方針を理解し、学生が学業や課外活動に専念できる

環境を整えているものを大学が厳選し、指定した寮である。発足当初は、約50寮に約2,000人が入寮していた。しかし、寮主の高齢化や世代交代などに伴い現在は、男子16寮(定員565人)、女子7寮(定員183人)の計23寮に約750人が入寮している。これは、全学生の約25人に1人が入寮していることになる。そこには、学部学科、学年、出身地が異なる多くの学生が集まっている。食事は朝夕二食付きで、大学直営の「自修寮」の栄養士が作る献立と同一のメニューにより、栄養バランスが取れた手作りの食事を提供し、食費も同一業者に食材を発注することで安価となっている。各寮には、寮主・寮母が常駐し、親代わりとなり学生の日常生活を支えている。また、指定寮は、入寮している寮生全員で構成する自治組織「寮友会」を形成し、新入生オリエンテーションや研修会、スポーツ大会などを企画・運営している。さらに全指定寮の寮主・寮母による「寮和会」を組織し、指定寮で生活する学生を

ナーを学内に設置し、保護者や受験生からの相談にも応じ、希望があれば、指定寮の下見も可能となっている。

### 3 住居から学びの場へ

前述したように、本学の指定寮は総合大学の特徴を生かし、学部学科、学年、出身地の異なる多くの学生が日々共同生活を送っている。そこには規則があり、例えば、食事時間は、朝食は午前7時30分から午前9時30分、夕食は午後6時から午後9時30分までと定めている。また、入浴時間や門限も定めているため規則正しい生活環境を構築している。そのほかにも、寮内でのあいさつ励行、ゴミは指定された曜日を守るなど社会生活を営む上で基本的なルールを身に付けている。また、多くの学生が共同生活を送っているためさまざまなトラブルも起こる。夜、騒がしい、「風呂は一人で入浴したい」などが挙げられるが、これらは実家やアパート生活とは違う寮ならではの問題であり、社会に巣立つための訓練だ

大学と寮和会そして寮友会が三位一体となって学生のサポートに当たっている。このように指定寮は福岡大学が提供する全国的にもユニークな制度である。

### 2 指定寮入寮への流れ

毎年、本学からの合格書類の中に「自宅外通学予定の皆さんへ」という寮の案内を同封している。そこには、諸経費や条件などを記載し、希望者は同封の「入寮申込書」に必要事項を記入し、本学学生課へ返送してもらう。その後、選考、割当を行い、申込者に選考結果通知を発送している。許可者は、選考結果通知に同封した誓約書に、記入・捺印の上、決定した寮に提出すると同時に入寮費を納入後、入寮決定となる。入寮の条件は、1年間の在寮義務をもつけ1年ごとの契約で、希望すれば4年間ないし6年間在寮が可能である。

オープンキャンパスや入学試験の際には、寮友会(学生組織)と寮和会(寮主組織)が臨時の相談コー

と考えればよりよい成長の機会となる。

さて、2011年12月初旬に実施した1泊2日の「指定寮研修会」も、大学としてソフト面で支援している行事の一つである。実施に当たっては、学生組織である寮友会執行部が中心となり約2カ月前から準備をし、寮長会議を開き、研修の趣旨説明および参加の呼び掛けを行っている。研修会の内容については、事前に学生課と打ち合わせを行い、協議の上決定している。写真の研修会では、80人近くの学生が参加し、他寮の学生とグループを作り、グループディスカッションを行い、指定寮の良い点や問題点について議論を展開した。そこでは、前述した共同生活の不自由さを指摘した意見も出たが、例えば「夜、騒がしい」との問題が発生した際は、寮長を議長に寮会議を開き、寮生全員で問題解決に向け議論をする。また、一人暮らしの寂しさや不安もなく、多くのかけがえのない仲間と出会うことができ、コミュニケーション能力が形成できたことや、先輩か



指定寮研修会の様子

ら学生生活や就職情報を得ることができると良い  
点が多数挙げられた。

またこの日は、「生活を共にする学びの場」である。

## ボランティアと私

東日本災害ボランティア  
「福岡大学派遣隊」

商学部第二部商学科3年次生 森高 麗菜

2011年8月22日、A班、J班、そして私の所属するH班の乗った1号車のバスは、岩手県の陸前高田市に到着しました。この時が、私がこの目で直接被害の様子を見た最初の瞬間でした。文字どおり山のように積み上げられた、かつて家屋や家財道具だったもの、ぐしゃぐしゃになり積み重なった自動車、崩れ落ちた橋や道路。これらを目にしたとき私は、被害のあまりの大きさに比べて、人ができることとあまりの小ささに愕然とし、驚きと悲しみ、そして痛みを覚えました。その時から数カ月がたち、復興が続く今でもその様子を思い出すたびに心が苦しくなります。

4 担当者からみた福岡大学指定寮、そして入寮の  
すすめ

学生たちは、指定寮での数多くの経験や体験を通して議論する能力やコミュニケーション能力、そして考える力などが養われる。入寮してすぐに、「なぜ入寮したのか」と質問すると多くの学生が、「親に言われて」と回答する。しかし、日々寮生活をすることで、寮の学生と議論をしたり、研修会やスポーツ大会に参加し、ほかの寮の学生と交流をすることで大きく成長する学生が多く、学生の潜在能力に驚かされる場面は少なくない。昨今、住まいを寮ではなくアパートに求める学生が多い中で、企業が求めるのはコミュニケーション能力、問題解決能力を有した人材である。指定寮で生活をした多くの学生たちが社会人として幅広く活躍することを願い、今後より良い指定寮を目指して学生たちを支援していきたい。

大学で事前研修を重ね、準備をし、そして現地での活動をする、このすべての段階で手を抜いたところなどないつもりでした。それでも活動を終えて、家族や友人知人、先生方や大学の仲間に「大変だったね」「お疲れさま」、そんなふうに声を掛けてもらうたびに、複雑な気持ちになることがありました。「自分は全然何もやれていない」、「ねぎらいの言葉を掛けてもらう資格なんてない」と言ってしまうたら、と何度も思いました。

私たちは事前研修として6月から6回にわたり、グループワークをしたり講演を聞いたりしました。グループワークでは10人程度のグループに分かれ、積極的に意見や情報の交換を行いました。事前研修は、現地での活動に向けてのスキルアップに加えて、初めの数回はグループのメンバーが毎回異なることもあって、メンバー間の信頼関係を作る意味も大いにあったように思います。きっかけや思いの強さややりたいことは違っていても、被災した方々のため



に何かをしたいという思いから集まった多くの仲間たちと出会うことができました。きっとこれから素晴らしいことができるという確信と、それを全員で成し遂げるのだという信念が私の中に芽生えました。

しかし、第一回目の研修があった日、私だけでなくおそらくその場に居たほとんどの仲間が、大きなショックを受けたのではないかと思います。なぜならば、私たちは事前研修があることは分かっていたながらも、それをこれから自分たちで運営していかなければならぬとは到底考えてはいなかったからです。

私たちは「これからのグループワークをどう進めていくかは学生たち自身が考えて決めていくことであり、現地と連絡を取って情報を集めたり、活動場所や宿泊地を決めたりするのも学生たちの仕事である」と告げられました。私は急なことに面喰らい、思わず周りの仲間と顔を見合わせてしまうほどでした。

事前研修の時間とが重なることが多く、お互いを理解するまでに時間がかかってしまったことの悔しさが、時がたつにつれて大きくなっていきました。けれどもそう思えるようになるまでには長い時間が必要でした。

現地での時間を除いて、事前研修を行っている時期から帰福後しばらくの間は、周りの目を気にして自分を偽っていました。なぜそんな事をしていたのかわかりませんでした。しかし、本稿を書くにあたりあらためて考えたところ、その原因はボランティアに熱心な人に対するコンプレックスだったのではないかと気付きました。

例えば、事前研修では、講義が早く終了して時間が空いたなら、それが5分だけだったとしても行くようにしていました。これは自ら進んで参加するというよりも義務のように考えての参加だったように思います。参加表明をしたからには時間があれば行かなくてはいけないし、途中から行くことよりも

恥ずかしいことですが少なくとも私は、普段の講義のような受け身の姿勢であり、ただ知識を与えてもらい、それを吸収すればいいと無意識のうちに考えていたように思います。活動場所も活動内容も宿泊地もすべて大学が決定して、私たちは事前研修を受けた後に現地に行つて決められた活動をするのだと思い込んでいました。

グループごとに次回の研修までに調べてくることを決め、研修以外の時間も使い、情報を集めて報告し、また次回までにやるべき事を決めるという手順で進めながら何とか無事にやっていました。しかし、それにはやはり学生課の方々や福岡大学派遣隊長の秋山先生、福岡大学OBであり福岡市消防局西消防署の消防士である森田さんをはじめとして、たくさんの方々協力や支援があったからだと思います。また、少し大げさかもしれませんが、苦業を共にしてきた派遣隊のメンバーは、私にとって大事な人々になりました。私は履修している講義の時間と

時間がありながらも参加しないことのほうが恥ずかしいことだと考えていたからです。そして何より、同じボランティアのメンバーの目を恐れていたためでした。寝る間を惜しんで情報を集めたり資料を作ったり、勉強時間を削ってボランティアに時間を割くことも、その理由の大部分はコンプレックスを克服するためと自分をよく見せるためでした。

私はHグループのサブリーダーに立候補しました。中心に近い所で、積極的に活動を進めていきたいと考えた上での決断であったことは確かです。しかし、これもまた誰かのためというよりも、自分はちゃんと参加できているのだと自分自身を安心させるためだったのかも知れません。

私はこれまでにボランティアというものに参加したことはほとんどありませんでした。そのコンプレックスから、少しくらい自分のことを犠牲にしても活動するのがボランティアであり、みんなもそれぞれ何かを犠牲にしてボランティアをしているし、

それが苦ではないのだろうと思っていました。しかし、私にとっては苦しい日々でした。みんなは誰かのために自分を犠牲にすることをいとわない優しい心を持っているのに、私は他人のために自分を犠牲にできない非情な人間なのだと日々感じていました。みんなとは違う、でも責任は全うしなくてはいけない、次第におろそかになっていく勉強。どれも中途半端な自分が悔しくて、部屋に帰って一人泣くこともありました。『ボランティアは自己責任』当初から言われていたこの言葉のプレッシャーによる、誰にも頼れないのだという不安や、帰福後には心の中で現地のことを思っただけでも自分のことを優先させている罪悪感も加わって、普段の生活に戻ってもなお、私にとって苦しい時間が続きました。

そんな時、活動中に会った多くの方々のことか思い出されました。

私たち1号車のメンバーは陸前高田市広田町にある佐藤さん宅前の土地でボランティア活動を行いました。夏場であるために草が生い茂り、それらの間に津波で流されてきたものがそこら中にあるといった状態でした。

私たちは草を取り、流されてきたものを仕分けしました。以前に別のボランティア団体が来たということもあって、大きなものは分別されていました。しかし、小さなものや、おそらく津波で運ばれてきた砂の中に半ば埋まってしまったものなどがそこら中にまだまだたくさん残されていました。それに、木材やガラスなどは粉々になっており、人の手でできない作業だと思いました。流されてきたものの中には衣類や食器、調理道具、ぬいぐるみなど、人の暮らしを感じさせるものもたくさんあり、以前ここに人の暮らしが確かにあったのだということをおぼろげに感じることができました。

佐藤さんは、『ボランティアの力なんて大したものではない』と思っていた。けれどもボランティアに来た人たちは皆一生懸命やってくれて、びっくりし

それが苦ではないのだろうと思っていました。しかし、私にとっては苦しい日々でした。みんなは誰かのために自分を犠牲にすることをいとわない優しい心を持っているのに、私は他人のために自分を犠牲にできない非情な人間なのだと日々感じていました。みんなとは違う、でも責任は全うしなくてはいけない、次第におろそかになっていく勉強。どれも中途半端な自分が悔しくて、部屋に帰って一人泣くこともありました。『ボランティアは自己責任』当初から言われていたこの言葉のプレッシャーによる、誰にも頼れないのだという不安や、帰福後には心の中で現地のことを思っただけでも自分のことを優先させている罪悪感も加わって、普段の生活に戻ってもなお、私にとって苦しい時間が続きました。

そんな時、活動中に会った多くの方々のことか思い出されました。

私たち1号車のメンバーは陸前高田市広田町にある佐藤さん宅前の土地でボランティア活動を行いました。夏場であるために草が生い茂り、それらの間に津波で流されてきたものがそこら中にあるといった状態でした。

私たちは草を取り、流されてきたものを仕分けしました。以前に別のボランティア団体が来たということもあって、大きなものは分別されていました。しかし、小さなものや、おそらく津波で運ばれてきた砂の中に半ば埋まってしまったものなどがそこら中にまだまだたくさん残されていました。それに、木材やガラスなどは粉々になっており、人の手でできない作業だと思いました。流されてきたものの中には衣類や食器、調理道具、ぬいぐるみなど、人の暮らしを感じさせるものもたくさんあり、以前ここに人の暮らしが確かにあったのだということをおぼろげに感じることができました。



左端に見えるのが佐藤さん宅。2階部分にまで津波が押し寄せたという。



作業前に亡くなった方々に対し黙とうを捧げた。かつて民家があった場所には草が生い茂っていた。

たし感心させられた」と話してくれました。また、実際に、私たちが広田町の仕事をボランティアセンターから割り振られたことは、広田町の方々にボランティアが頑張っている様子を見てもらい、元氣になっただけのためでもあるのだとボランティアセンターの方も教えていただきました。

佐藤さんはそのほかにもいろいろなことを話してくださいました。佐藤さんは高校を卒業後、海の仕事に就き、人生のほとんどの時間を海と共に過ごしてきたようでした。何カ月も航海し、日本から遠く離れた国々の港を訪れたそうです。航海には船医としての資格を持った人が必要で、内科、外科をはじめ幅広い知識が必要となるその資格を、佐藤さんは自分で学んで取得したと語っていました。

佐藤さんは、大学へ行きたかったともつぶやいていました。しかしまずは自分自身のためにも家族のためにも働く必要があったそうです。「皆さんは大学で学んでいる。素晴らしいことだ。頑張ってください。」

そう言うてくださった佐藤さんや、仮設住宅で出会った人たち、そのほかにも多くの人のため、そして自分自身のためにも私たちは絶えず多くのことを学ばなければと感じました。

この数カ月間、多くのことがありました。この数カ月が自分の人生の中で大きなターニングポイントだったように思います。例えば、高過ぎるヒールを履いても全力疾走できずに転んだりつまずいたりするだけかもしれません。ですが、今ある姿より上を目指したいと思ったら、少しくらい背伸びをする必要なのかもしれないと思いました。それにはきつと努力や痛みがあるだろうけど、その分今までより少し違った自分や景色を見ることができるようになると感じます。もしそれが思ったものと違って、自分に合うやり方を探したりアイデアを考えたりすることも成長へのきっかけになるのだと感じました。

私はこれまで、ボランティアというものを重く考



防波堤は一部が崩れ、樹木は塩害で変色していた。佐藤さんは人が流されていく様子をただ茫然と見ていることしかできなかったと語ってくれた。

え過ぎていたように思います。本稿を執筆する中で、活動中の写真を見る機会がありました。私は、写真の中の仲間たちは皆生き生きとしているのに対し、自分の表情が硬いことに気が付きました。特に陸前高田市で撮られた写真は、人が亡くなった場所であることから、笑うこともためらわれました。しかし、写真の皆の表情を見て、自然にいつもの自分で活動すれば良かったのだと気が付きました。

ボランティアは自分がそれをやりたいと考えたからこそ一生懸命にやれるものだと思います。誰かにやれと言われてやることもないし、押しつけのようにするつもりでもない。誰かのために何かをしたいと思った時、自然になされる活動なのだと思います。なのでいろいろな生き方があるように、ボランティアにもいろいろな形があってもいいのかもしれないと今、私は考えています。

ニーズに合わないことをして迷惑になることもある、これは私が今回の活動に当たる前に言われたこ

とです。しかし、自分の限界を超えてまで無理にやるうとしても自分が苦しいだけだということも学びました。自分を殺すのではなく自分らしさとバランスをとりながら、そして周囲と支え合いながら自然に歩んでいけばいいのだと思えたら、今までよりも少しはボランティアに積極的にかかわり、生きていけるような気がしています。多くのことを教えてくれた今回の活動と、周囲の人々や仲間から感謝し、筆を擱ぎます。

東日本災害ボランティア「福岡大学派遣隊」  
2011年8月21日(日)から8月25日(木)までの5日間、本学学生および教職員104人が東日本大震災の被災地である岩手県(陸前高田市)、宮城県(気仙沼大島石巻市、南三陸町)でボランティア活動(被災家屋内の清掃、瓦礫の撤去、除草作業)に取り組んだ。24日(水)には、現地の石巻専修大学の学生との交流も行った。

促進を図り、さらに「安全・安心」な社会を推進していくことを目的に、全国で警察庁が行う防犯ボランティア支援事業が2010年に始まりました。この支援事業では47都道府県で各1団体がモデルケースとして選ばれ、活動物資の提供や防犯活動実施について各種支援が行われます。この支援に福岡県のモデル団体として福岡大学が選ばれ、私たち「ななくま元気にするっ隊」が発足することになり、同年6月26日(土)発足式が行われ、活動をスタートさせました。本稿では、「ななくま元気にするっ隊」発足後の活動について紹介します。

福岡大学内には、障がい者支援や児童福祉等を行っているボランティア団体は既に取り組みしていますが、「防犯」に重点を置いたボランティア団体は私たちの団体が初めてでした。私は、高校生の時に学校のボランティア活動に参加したことがある程度でほとんどボランティア活動は初めてでしたが、発足時にグループリーダーを務め、2年目からは代表に就任

## 「ななくま元気にするっ隊」活動報告

法学部法律学科2年次生

永石 琴乃

犯罪の認知件数は警察の検挙・抑止活動の成果が表れ、2002年度のピークを境に減少傾向にあります。市民の中にも「安全・安心」が強く意識されるようになり、地域ぐるみでの防犯対策が重要であるという認識から、全国の自治会、PTAを中心に防犯組織が結成されてきました。全国的に防犯組織は増えていますが、活動を継続させていくことに問題を抱えている団体も多いようです。それは、防犯活動を行っている主な世代が、60歳代という団体が多く、構成員の負担が大きいというのも一つの理由のようです。

このような現状を受け、大学生を中心とした若い世代と地域ボランティアとの協働による防犯活動のしみました。

発足に向けての準備段階の過程では、隊員が集まるだろうかというのが最も不安な点でした。しかし、学内で広報をすると反応がよく、今まで何らかのボランティア活動をしたことがある人やこれからボランティアを始めたいという人が学部・学年を越えて集まりました。特に「防犯」という点から将来、警察官を志望する人が多く集まり、最終的に64人(2010年6月時点)集まりました。防犯活動を行うにあたっては、地域とのつながりが大切であるということから福岡大学がある七隈の名前を入れ、学生と地域の連携の架け橋になって元気のある学生の力を地域に生かしたいという思いから、「ななくま元気にするっ隊」という団体名を付けました。隊には博多弁の「〜たい」も掛けています。

最初は皆、「防犯」に関してほとんど知識がない状態でしたので、できるときにできることを「をモットー」に活動を始めました。地域と連携して活動して



「二輪車盗難防止キャンペーン」で二重ロックを呼び掛ける札を一台一台に付けている様子（2011年5月19日）

いこうと決めたものの、多くの学生が福岡大学周辺に下宿しているにもかかわらず、地域の方との交流はほとんどない状態でした。地域との連携には、まず学生である私たちが地域のことを知らなくてはと思います、地域調査を兼ねて2010年7月から地域清掃活動を行うことにしました。七隈校区を中心に福岡大学周辺の清掃をしていると、住民の方から声を掛けられることも多く、感謝の言葉を多く頂きました。同時に、地域清掃活動を定期的に行ってほしいという要望も多く頂きました。学生だけで月1回程度行っていた清掃活動ですが、現在は地域の方と協働で行う清掃活動を企画しています。

地域との連携をどのように行っかが私たちの課題で、その解決を目指して活動しているうちに地域の方々との交流が自然に生まれていきました。この中で、大学生と連携して活動していきたいと思ったださる方が多くおられることが分かりました。福岡大学の周辺地域の自治会は防犯に力を入れているも

のが多く、大学生もぜひ自治会活動に参加してほしいという要望を多く頂きました。

自治会では夜間パトロールを実施しており、私たちの団体も積極的に参加しています。何度も参加している学生の中には、地域の方々との交流が徐々に深まり、自主的に地域のお祭りなどに参加している学生もいます。これらの活動に加え、NPO法人の方と協力して、小学生の安全教室の指導補佐をさせていただいたり、子どもの職業体験イベントに警察ブースのスタッフとして参加し、警察OBの方と防犯教室を行ったりもしています。

そういった活動の中で、警察の方から福岡大学周辺は二輪車の盗難が多く、福岡大学生の被害が多いということを教えていただきました。この現状を改善するために、学生を対象に「二輪車盗難防止キャンペーン」を行いました。

また、福岡市の性犯罪の認知件数が2010年度の人口千人当たりで、全国19政令指定都市中3番目に多いという深刻な状況があります。その現状を改善するために行われた推進事業の検討委員会委員として私たちの団体から代表者が選ばれたことから、「性犯罪防止活動キャンペーン」も学内で行いました。これらのキャンペーン活動は今後も継続していく予定です。

「ななくま元気にするっ隊」は「防犯」を主軸に活動していますが、「防犯は連携が非常に重要である」と活動を通して感じました。連携のためにはその相手である、地域や各種団体の協力が必要で、そういった方々との交流が連携を円滑にするには非常に大切です。そのため、県や県警等主催で行われる交流会には積極的に参加し、他団体との交流を密に行うようにしています。

これまで地域との連携を重視して活動を行ってきましたが、他大学や専門学校にも防犯ボランティア団体があり、現在はこちらとの連携にも力を入れています。同世代との連携を深め、協働していくこと

を目的に2011年6月に「ACT」という連盟を発足させました。ACTとは「Arch Of College Team」の略称で学校間のつながりという意味が込められています。福岡大学のほかに福岡工業大学、九州産業大学、麻生公務員専門学校計4校が所属しています(2011年10月現在)。発足して間もないですが、2011年6月から協働で天神大名地区の落書き消しを月1回程度行っています。ACTの活動後は各団体に共通する問題を加盟している団体のリーダーを中心に、問題の解決に向け話し合いの機会を持つようになっています。また、年末には北部九州の学生防犯団体を集めた「北部九州学生防犯ボランティアサミット」に参加し、学校間での学生交流を行っています。

地域の状況によって多様な要望がある中、それに応えて大学生が防犯活動に参加している事例は非常に少ないため、実際に活動をしていると反響が大きいいことを肌で感じます。しかし、防犯活動の効果は

## 未来への第一歩

福岡大学附属大濠中学校1年生 高尾 彩瑛子

緑あふれる大濠公園。その隣にある、凜としたたずまいの福岡大学附属大濠中学校・高等学校。私は、中学校の女子第一期生として入学した。私は、期待と不安でいっぱい足どりで校門をくぐった。私は、この門をくぐるために生まれて初めて受験勉強をした。塾に入ったのは、小学3年生からだっただ。だが、「受験」とか「志望校合格」とか、そういう言葉を意識するようになったのは、小学5年生の後半ごろからであった。

考えてもいなかった「受験」は、話で聞くよりも大変だった。まず、放課後の過ごし方が変わってきた。徐々に遊ぶことを控え、勉強と向き合う日々が増えていった。

すぐに表れるものではないため、活動を継続させるのが非常に難しいと感じています。また、学生も大学での勉強のほかに、アルバイト等で忙しい人も多く、就職活動が始まると、ますます継続して参加することが難しいという現状があります。

ボランティア活動を通して、同世代だけでなく幅広い世代、職種の方と交流する機会に恵まれ、人と人とのつながりができました。また、自分から積極的に動くこともこの活動を通して学びました。ボランティア活動を始めた当初は、活動に多くの学生が参加することに意義があると思っていました。しかし、活動を継続する中で、そうではないことが分かりました。心を込めて一つひとつの活動を行っていくことが本当に大切なことであり、そうすることで本当の絆ができることに気付きました。今後、「できるときにできることを」をモットーに活動を続けていきたいと思っています。

本格的に受験に打ち込むようになった小学6年生の夏期講習。この日の社会の授業で、私は大きな影響を受けた。授業の題は「国際連合と世界の平和」であった。この日から私は将来、国際連合(以下、「国連」と言ふ。)の職員になりたいという夢を持った。

私は、国連の「人種も国境も全てを超えて、全ての人々のために機会と正義を強化し、より健康的で安定した世界を作り上げる」、「世界の平和と秩序を守る」という考えに憧れた。また、国という殻に閉じこもらず、「全て」を超えることで、世界の平和により貢献できるとも考えた。

私は、小学1年生の時に見た、漢字の練習ノートの裏表紙を思い出した。「国連とユニセフの活動を応援しています」と書いてあった。あの時は幼心にも、すごいと思ったのだ。今考えてみれば、昔から国連の職員になりたかったのだと分かる。なぜ、そこまで心に残ったのか。それは、今でもよく分か



らない。

数日間、そんなことを思っていた。ふとカレンダーを見れば、この日は8月6日、広島に原子爆弾が投下された日であった。テレビニュースから、平和記念式典の様子が流れてくる。そして、国連の事務総長潘基文氏のスピーチ。私が憧れる国連の最高責任者である彼の、核兵器の廃絶を願う言葉は、私の心に深く残り、国連の職員になろうという夢への執着心は、一層強いものとなった。

この日から私は、何故戦争を続けるのだらうかと、あらためて考えるようになった。戦う者たちは彼らなりの正義を持ち、その名のもとに戦っている。そんな彼らを止めるのが国連の役割であり、それを可能にできるのも国連なのだ、と思った。ここで戦わずに、平和的に解決する力がないのなら、国連などただの飾り物になってしまう。

先日、ニュースで、テロについて扱っていた。自爆テロで、30人以上の国連職員が犠牲になったそう

は国連職員への攻撃が過激になり、国連は常時人員を募集しているが、なかなか集まらないようだ。この厳しい現実を受け入れてもなお、私は国連の職員になりたいと思っている。

私には、この学校の校舎の中で好きな場所がある。それは視聴覚室だ。以前、校長先生が「この視聴覚室は、大濠公園、アジア、そして世界へ広がるような向きになっている」とおっしゃっていた。巨大なガラス越しに大濠公園が見える。その向こうにアジアが、そして世界が、見ることはできないが広がっている。この学校から世界へ羽ばたいていきたいと思わせてくれるこの部屋に來ると、あらためてこの学校に入学できて良かったと感じるのだ。校長先生の話と、視聴覚室からの景色は、これからもずっと忘れないだろう。

小学校の時と違い、英語、数学と新しい科目が授業に登場した。特に英語は全くといっていいほど習ったことがなかったので、とても苦戦している。

だ。調べてみると、国連職員はテロ組織などにひんぱんに狙われるそうだ。給与も多くはなく、職員になるために必要な条件もたくさんある。英語、フランス語のほかには中国語、スペイン語、ロシア語、アラビア語なども覚えなければならず、その上に命の危険まであるとすれば、職員数が少なくても仕方がない。職員数は国連事務局で8,700人程度、国連の関連機関全体で6万4,700人程度であり、全て合わせても世界的な活動をする機関としては、極めて少ない人数となっている。どれだけ少ないかといえば、アメリカのジョージア州の公務員の数や、オーストリアの首都ウィーンで雇用されている公務員数、さらにはドイツニderlandとドイツニワールドが雇用している人員数を大きく下回る人数という具合となる。1992年以降、161人も職員が死亡したほか、117人の職員が人質にとられるなどの事件も起こり、1948年以降、1,580人以上もの軍事、文民要員が命を失っている。最近

だが、最初は模様や文字の羅列にしか見えなかったのに、言葉としてとらえることができるようになってきたので、英語という科目に対する苦手意識が薄れてきたと思う。町中を歩く時に英語を探し、見つけては読むという動作を無意識のうちにするようになっていた。初めて読むことができた時の喜びは、今も忘れられない。今までできなかったことができるようになることの喜びを、英語が教えてくれた。これからも英語をがんばろうと思う。私の夢の実現のためにも、大切なことだからだ。

たくさんの先生方が、私たちに「日本に限らず世界へ」「君たちが大濠中学校の歴史を、新たに作り出してほしい」「大濠中学校から羽ばたいて」などのメッセージをくださる。私たちは、この学校の男女共学第一期生であるから、それゆえの期待も大きいと思う。先生たちから期待の言葉をもらったたび、それに応えなければと思うのだ。

男子校として歴史がある福岡大学附属大濠中学校

最初の女子生徒として入学できたことを、私としても光栄に思っている。この学校の新たな歴史の幕開けと同時に走り出した私たち。同じ受験という道を進んできた新たな仲間たちとの出会いは、とても新鮮だった。仲間たちと共に、それぞれの夢に向かって走っていきたいと思う。

大きな夢も、身近な所から。少しでも世の中のことを知るように、世の中の役に立てるようにと思いい、私はボランティア部に入った。ボランティア部は、先日の文化祭で、東日本大震災の被災者の方々へ心温まるメッセージを送る、お手紙プロジェクトに参加した。多くの方の協力のおかげで92枚のメッセージカードを作ることができた。私はまだ12歳だが、自分にできることで被災者の方々の役に立ちたかった。

私は、今もこれからも人の為に行動を起こしていきたい。そして、一人でも多くの人が人間として喜びを感じて生きていけるよう尽くしていきたい。

高校で、わたしがこれから進んでいくべき道への鍵を見出していくことへの予感だったのかもしれない。しかしその時には、特にこれといったはつきりした目標も持たず、受験を決めてしまった。それから受験当日までは本当にあつという間で、受験前日、とても緊張したことくらいしか覚えていない。

そんないきさつの受験だったためか、合格通知が届いたときも「高校生になる」という実感が全くなく、自分の高校生像も想像できなかった。ただ、特別進学コースのスーパー特進クラスに合格できたことで、漠然と「学習にがんばる自分」を想像した程度だった。2011年4月9日、私は若葉高校に二期生として入学した。百年を越える歴史を持つ学校。「若葉高校」となり、新たなスタートを切ったばかりの学校。私たちの入学でスーパー特進クラスがやっと三学年そろった、躍進を目指す学校。しかし明確な目標がなく、期待よりも不安の方が大きかった私の心は、中学校からの環境の変化に戸惑うこと

世界には、将来を夢見るどころか、明日をもしれない命の、私と同じ子どもたちがたくさんいる。しかし、私は平和な場所で、生活に困ることもなく、将来を夢見ることができる。私は、自分の置かれている環境を幸せに思い、応援してくださる先生方や家族に感謝して、未来に向かって走り続けていきたい。

## 多くの「鍵」を見出して

福岡大学附属若葉高等学校1年生 山田望月

中学三年生だった昨年の夏、私はなかなか進路を決められず迷っていた。そんなとき、ふと目に入ってきたのがこの福岡大学附属若葉高等学校のパンフレットだった。女子校だということに抵抗を感じたが、何かが私を惹きつけた。今思えばそれは、この若葉

ばかりだった。

そんな中で行われた入学後すぐの実力テストの日、私は全く解けなかったが、「みんなこれくらいだろう」と油断していた。しかし、結果は最悪だった。これが、勉強面で自分の未来へと続く道に大きな扉を感じた最初の瞬間だった。自分が入ったクラスのレベルの高さを痛感した。中学生のころ、塾以外に家で勉強することは試験前くらいしかなく、家庭学習の習慣は全くといっていいほどなかった。そんな生活を高校に入学してからも続けていたのでは、良い点数が取れるはずもなかった。堅固な、大きな扉を実感し、私は今までの自分を後悔し、この日から変わろうと決意した。だが今まで勉強する習慣がなかったため、何から始めたらよいのか分からない。まるで、扉に鍵穴はあるのだが、自分の手の中に鍵が一つもないような状態だった。

そこで私は、先生方がおっしゃったことや友人や先輩から「こうしたら良い」と聞いたことは全て実

践し、その中から自分に合った方法を見つけることにした。大変だったが、さまざまなことに取り組むうちに、「鍵」が一つまた一つと姿を現していくようになった。早朝から課外授業があり一日の授業時間が長いこと、そのための多くの予習が必要なことも、「高校生らしい」と、少し大人に近づいたような気がして全然苦ではなく、むしろうれしかった。それが当たり前の毎日になっていく中、高校生の忙しさがよく分かってもきた。入学前は部活動に入り、勉強との両立をがんばりたいと思っていたが、学習の「扉」を開く鍵を見出すことに、大学へ行き、より高く自分を高めていきたいという気持ちが強くなり、今はともかく勉強に専念することに気持ちが固まってきた。

そうして、高校入学後二度目のテストであり、最初の定期調査でもあった中間調査で、私はこれまでで最も良い結果を残すことができた。自分の進み行く前に立ちほだかる扉に合う「鍵」を見出したと実感

みや、これからの自分の決意を後押ししていただけたような、私が未来へと進んでいく「鍵」となるお話だった。私はまだ将来の夢は決まっていない。けれども若葉高校でなら見つけられる気がする。数多くある福岡大学からの出張講義も、夢を見つげるための鍵となる。今は自分の将来の幅を広げるための下積みの時期だと私は思う。夢を見つけていない私は、やりたいことが見つかった時困らないように、たくさんさんの「鍵」を用意しておくべきだ。そのためには、「今をどう生きるか」ということを考えなければならぬ。日々の積み重ねが大きな力となっていく。それが実践できる環境がここ、若葉高校には十分ある。例えば放課後に大学生が自習室である食堂にチューターとして来てくれること。大学生は近くに居てそして目標にしたい存在で、話しやすく、とてもありがたい存在だ。

最初は抵抗を感じていた女子校も、女性同士気兼ねなく語り合えて、今ではむしろ女子校で良かった

感した瞬間だった。扉が開いた。入学後すぐの実力テストの結果を挽回しようと思死にがんばった自分の努力が報われたようで、とてもうれしかった。努力をすれば結果は必ずついてくる。たとえ結果がすぐ出なくとも、あきらめずに続けていくことが大事だと思えた。同時に、先生方をはじめ、友人たちといった周囲の、自分を高める環境としての確かさも実感できたのだ。

さらに、この中間調査の最終日に私は別の「鍵」を見出した。それは、福岡大学からお越しになった人文学部英語学科教授の山内正一先生のお話だった。先生は、高校生活の過ごし方とは、すなわち「人間」としてどう生きようとするか、ということであり、過去も未来も自分が「こうなりたい」と思う気持ち次第で変えていくことができる、自分がその日その日をいかにしっかりと生きるかで、「今」が輝き、それはまた自分だけでなく自分の周りをも輝かすことにもなる、とおっしゃった。それまでの私の取り組

と想っている。昔の自分と同じように女子校ということに抵抗を感じている人たちに、女子校の良さ、そして若葉高校の良さを教えてあげたい。部活動がたいへん活発であり、一方放課後の食堂は自学自習する人で溢れていること。先輩後輩関係なく仲がよいこと。生徒を大切に思い、一緒になって真剣に考えてくださる先生方がいらっしゃる。何より、時には笑い合い時には競い合える仲間がいること。とても魅力的な学校だ。こんな学校で高校三年間を過ごせることに感謝したい。踏み出したばかりの私たちの歩みの中、これからごだけだけの生きる「鍵」を見つけつつ道を築いていけるのか、楽しみでならない。

# 「会計専門職プログラム」の開設

商学部教授 中川 誠士

2012年4月から商学部・商学部第二部で「会計専門職プログラム」(以下、「プログラム」という。)がよいよスタートします。会計学学習の実践的側面を強化するために外部の専門学校と提携した点で、商学部・商学部第二部にとってはおそらく初めての試みでありますので、まずプログラムの概要から紹介させていただきたいと思えます。

## 会計専門職プログラムの概要

このプログラムを一言で説明するならば、「会計学的素質に優れた学生を入試時と入学後に選抜し、

ば受講資格を失います。これに並行して1年次未より専門学校による実践的授業を福岡大学内の教室において夜間の時間帯に受講します。専門学校による授業は、3年次に学生が公認会計士試験を受験する時点でいったん完了しますが、希望者はさらに公認会計士試験受験上級コースあるいは税理士試験受験コースを受講することもできます。また、受講者は、プログラムに在籍する期間を通じて、プログラム担任の専属教員(公認会計士試験の合格者)から専用自習室において個別指導を受けることができます。専門学校による授業に関する受講費用は、大学が負担します。

## 会計専門職プログラムの狙い

プログラムでは、学生が卒業までに公認会計士試験に合格することが目標として設定されており、これが、これは特定の職業的資格の取得がプログラムの至上命令とされていることを意味しません。むしろ

学部伝統的な理論的会計学に公認会計士・税理士受験専門学校が提供する実践的授業を組み合わせた特訓コースを学習させることにより、グローバル社会または地域社会に貢献できる優秀な職業会計人を育成しようとするもの」ということになるでしょう。募集人員は45人で、このうち20人を入試を通じて商学部第二部5人、商学部経営学科15人、25人を入学後に実施される選抜試験を通じて(商学部第二部5人、商学部3学科20人)募集します。合格者は、商学部の指定された会計学関連科目とゼミナールを1〜4年次に履修しつつ(所定単位を修得しなければ

プログラムの目的としてここで強調しておくべきことは、学生にあえてハイレベルの目標を目指すことによつて、目標実現のために自主的かつ計画的に努力することができる人材を育成することであり、また、会計学領域での一定の能力の修得を足掛かりにして(仮に公認会計士試験には合格できなかったとしても)、隣接・関連する分野にチャレンジすることができる真に「考える力」を持つ人材を育成することであり、従つて、プログラム学生は3年次に公認会計士試験に合格しなかった場合でも、上級コースあるいは税理士試験受験コースのさらなる選択、ファイナンシャル・プランナー、中小企業診断士や国税専門官等の受験、あるいは本学大学院商学研究科への進学(特別推薦入学制度を準備中です)などに向けて学習を継続するよう指導されます。またプログラム学生の勉学への真摯な取り組みが、プログラム学生以外の一般学生へ波及する効果も期待されております。

強調すべきいま一つの目的は、学力と勉学意欲に欠ける学生を大学教育に順応できる水準まで引き上げること（昨今これも大学教育における重要な課題ではありますが）よりも、むしろ優秀な学生の能力をさらに伸ばすことにあります。公認会計士や税理士の受験対策にはいわゆるダブル・スクーリングが一般的には必要であり、それ故にせっかく優れた資質を持ちながら経済的理由ゆえに会計専門職への道を断念する学生が少なくありません。本プログラムにおいて専門学校による授業の受講費用を大学が負担するのは、そのような学生にもチャンスを提供し、難関資格の取得を目指しての競争に参加する学生のいわば分母を大きくすることにより、優秀な学生層全体がさらに向上する可能性を高めるためでありま

す。

会計専門職プログラム設置までの経緯

以上紹介しましたようなプログラムの内容は、商

第二部の入学定員の30人削減、削減分の商学部への振り替え、商学部と第二部の学生を対象とした会計専門職プログラムの設置を柱とする答申案が最終的にまとめられました。案は9月16日に学部長会議でいったん承認されましたが、その時点では肝心要の商学部でまだ正式に提案されておらず、次に議論の場は商学部教授会に移りました。入学定員の変更という速断できない重大な問題を含んでおりましたのでなかなか意見がまとまらず、10月13日に審議が開

始されてから合意に至るまで4カ月を要しましたが、結局翌年1月25日の商学部教授会でほぼ原案通りの形で（商学部第二部の入学定員の削減数は35人に増えました）承認され、さらに3月14日に大学協議会で承認され、小委員会の提案はやっと日の目を見ることとなりました。

学部の長束航教授が数年来温めてきたアイデアにその多くを拠<sup>よ</sup>っておりませんが、それが具体化するに至った直接的契機は、2010年2月26日に大学執行部を中心とした「学部・学科再編特別委員会」が立ち上げられ、その下に商学部第二部改革小委員会が設置されたことであります。小委員会の座長には第二部主事を務めていた関係で筆者が指名され、メンバーには、商学部の川上義明教授（当時学部長）、村上剛人教授、福山博文教授、山本和人教授、長束航准教授（当時）に就任していただきました。夜間の時間帯でしか学ぶことができない社会人を中心とした勤労学生に対する「教育の質」を維持するとともに、商学部第二部の「新しい魅力」を打ち出すために、そして全国的に夜間学部が次々と廃止される趨勢<sup>すうせい</sup>の中で伝統ある商学部第一部を存続させるだけではなくさらに発展させるために、改革すべきことは何か、ということがメンバー全員の共有する問題意識でありました。6回の小委員会を経て商学部

商学部・商学部第二部の専門教育と会計専門職プログラム

難産の未誕生したとっぴいプログラムであります。商学部の専門教育の一環としてそれはどのような意義を新たにもたらすことを期待できるでしょうか。言うまでもないことではありますが、どの学部においてあれ専門教育は、本来、専門科目を学習させることを通じて、学生が卒業後に職業生活を営んでいくことに必要な能力を育成すること、つまり学生のキャリア形成を支援することを目的の一つとして想定しているはずであります。特に商学部・商学部第一部は、その原点である福岡高等商業学校が「九州中最も活気ある所謂北九州の地に此種（高等商業）学校の設けなきは…真に遺憾の極なりとす。…福岡・久留米二市の間に一高等商業学校を設立し、以て将来の世界的商戦に対応するに資せんとす」（設立趣意書『福岡大学』二十五年史<sup>1</sup>、3・4ページ）という理由で1934年に創設されたこと

そのような意味で、商学部・商学部第一部の伝統的な理論的会計学と専門学校が提供する実践的授業を組み合わせた特訓コースを学生に学習させ、在学中に会計専門職にかかわる資格を取得することを目標とさせるとともに、それが叶わない場合にもそこでの集中的学習を足掛かりにして学生が柔軟に隣接する分野へ進むことができるよう指導することによ

ら、学生が柔軟に隣接する分野へ進むことができるよう指導することによらぬ、また設置されている専門科目のほとんどすべてが社会に現実に存在するさまざまな産業、職業や仕事を切り取ってその学問の対象としていることにみまますように、学生のキャリア形成や職業的自立の支援を重視した教育を伝統的に行ってきたと言えます。とはいえ、講義において、理論的側面が偏重され実践的訓練にまではなかなか手が回らない傾向のあったことは否めません。このような傾向は多かれ少なかれ全国的にみられる問題であり、近年文部科学省が教育と就職との関係をより根本的に問い直す「キャリア教育」を推奨しているのもそのような問題を踏まえてのことであると思います。ただし、キャリア教育を通じて養成されなければならない能力については、「学力」、「社会人基礎力」（経済産業省）、「就業力」などいろいろな言葉が使われていて、教育の現場が混乱させられている面もないとはいえないかもしれません。教育の現場に身を置く立場からしますと、社会人基礎力等の言葉に

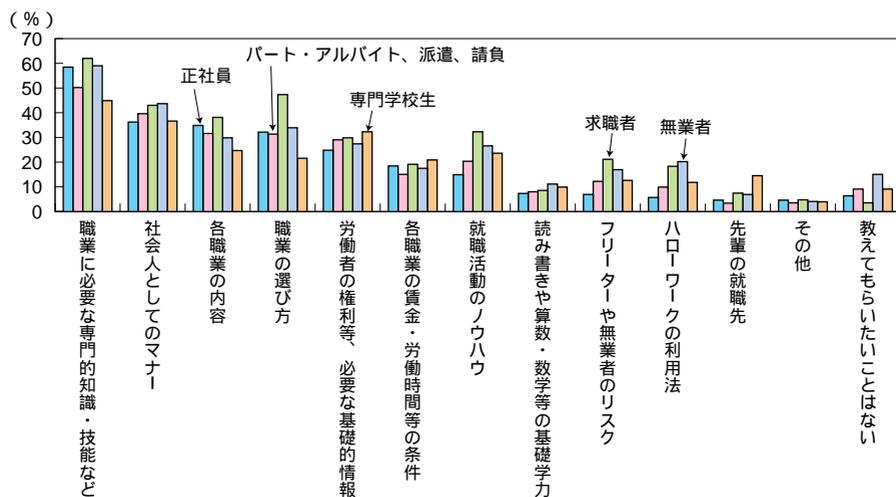
り、学生の社会的・職業的自立を支援することを強く意図した会計専門職プログラムは、商学部・商学部第二部の専門教育のあり方を、その原点に立ち返ってとらえ直すこととともに、広い意味でのキャリア教育の方向性においてもとらえ直すことの一つの試みであると考えます。

誕生したばかりの会計専門職プログラムがこれから順調に成育し、申し上げてきましたような目的を達成できますよう、努力を重ねていきたいと存じます。

込められている「勤労観・職業観」および「汎用的・基礎的能力」の育成といったことだけではなく、もう少し具体的職業に関連した、つまり将来のキャリア形成に直接・間接に関連した専門的な知識や技能の養成についても同等以上の熱意を持って取り組む必要があるのではないかと気がいたします。

もちろん、これだけをもってその根拠としようというわけではありませんが、厚生労働省の委託調査結果（前ページ図、参照）からは、そのような能力の大学における養成に対する潜在的ニーズがあることが推測されます。

図 学校生活を通じてもっと教えて欲しかったこと（複数回答）



資料出所 (株)UFJ総合研究所「若年者のキャリア形成に関する実態調査」(2004年厚生労働省委託調査)

(出典)『平成20年版 労働経済の分析』

<http://www.hakusyo.mhlw.go.jp/wpdocs/hpaa200801/b0081.html>,

アクセス日：2011年11月21日。

### 学校法人福岡大学が「AA - (ダブルA マイナス)の格付けを維持

学校法人福岡大学は、外部評価の一環として、株式会社格付投資情報センター (R&I) から、今年度で8回目となる格付け評価を受けました。その結果、昨年に引き続き発行体格付け「AA - (方向性は安定的)」を維持しました。「AA - 」は、21段階ある格付けの上から4番目の高い評価であり、本学の歴史や伝統、健全な財政運営に基づいた教育・研究・医療におけるさまざまな取り組みが総合的に高く評価されたものです。

格付け取得の目的は、学校法人福岡大学の信用力を自ら確認し、教育・研究・医療活動の維持・向上につなげることにあります。今後は、この評価結果を下記のように活用していきたいと考えています。

1. 学校法人福岡大学の信用力、財務の健全性、将来性を判断する指標として、学生・生徒、保護者、卒業生、受験生などに開示し、ブランド力の向上に生かす。
2. 信頼度の高い第三者による評価結果を、時代や社会の期待に応える学園づくりを生かす。

本学は、今後も教学と経営の一層の充実に努め、教育力の高い魅力ある学園づくりを目指します。

### 大学基準協会の定める「大学基準」に「適合」(平成21年3月23日付)

学校教育法により、大学はその教育研究水準の向上に資するため、教育研究、組織運営および施設設備の総合的な状況に関し、7年以内ごとに、文部科学大臣が認証する評価機関(認証評価機関)の実施する評価を受けることが義務付けられています。

そこで、本学は、2007(平成19)年度に実施した自己点検・評価活動に基づき、平成20年度に財団法人大学基準協会による大学評価ならびに認証評価を受け、平成21年3月12日付で同協会の定める「大学基準」に「適合」していると認定されました。認定期間は2009(平成21)年4月から2016(平成28)年3月までとなります。

本学は、今後、認定とともに受けた助言(26項目)・勧告(1項目)事項に対する改善を行い、平成24年7月末日までに同協会へ「大学基準協会大学評価結果に対する改善報告書」を提出します。

『福岡大学の現状と課題(2007年) 福岡大学自己点検・評価報告書』ならびに「福岡大学に対する大学評価結果ならびに認証評価結果」については、本学公式ホームページに掲載しています。

## 福岡大学校歌

作詞/狩野 満 作曲/飯田 信夫 編曲/平井 哲三郎

ちくしのーはーげーんかいのしお ざいはるか せ ぶりね  
 とうときーはーもーゆるひのあつ きいのちかけ いせい  
 ゆかしきーはーじーゆうなるがく のほこりか ゆうじょう

をーゆび さすとこ ろーう つくーしーきーわれ  
 のーはた かざしつ つーた くーまーしーきーわれ  
 のーわか くさもえ てーた とーうーべー

らがほこーう われ らがりそーう みちこそは け  
 らがほこーう われ らがほう ふい ゆめこそは お  
 らがほこーう われ らがしめ と きこそは や

わしかれ ひ とらし きーひと にある べ くーか  
 おいなれ あ たらし ぬーつち ふ みしめ てーあ  
 がてゆけ う つろわ きぬーまこ をむね にーつ

がやける あす をのぞみて わ かーきーひーのーきよ  
 ないはる うはる にはよわじ わ たーかーなーあ  
 どいあ うきょう をうたわん ひ たらーけーゆーくーあ

うをまなば ん  
 きをいら ん  
 すをうたわ ん

三、 ゆかしきは  
 自由なる学のほこりが  
 友情の若草もえて  
 讃つべきわれらが母校  
 時こそはやがて使命  
 つつらわぬ誠を胸に  
 うといあう今日を歌わん  
 ひらけゆく明日を歌わん

二、 とうときは  
 もゆる火の熱きいのちか  
 経世の旗かざしつ  
 たくましきわれらが母校  
 夢こそは大いなる  
 あたらしき土ふみしめて  
 花散るう春には酔わじ  
 ゆたかなる秋を祈らん

一、 筑紫野は  
 玄海の汐さいはるか  
 背振ねを指さすところ  
 うつくしきわれらが母校  
 道こそはけわれらが理想  
 人らしき人にあるべく  
 輝ける明日を望みて  
 若き日の今日を学ばん

## 編集後記

未曾有の大震災、そして福島原発事故発生から間もなく1年を迎えようとしています。1日も早く被災地が復興することを願ってやみません。この歴史的大惨事あって、人と人との「絆」の大切さ、そして「生きる」ということを私たち日本人だけでなく世界中の人々があらためて感じたのではないのでしょうか。

「生きる力」

人と出会い、学び、理解し、人生を自分の力で生きていく力を養っていく。どんな苦境であれ、それに負けないよう生きていく。それでもやはり、人は一人では生きていけない。助け合い、支えあってこそ生き抜いていける。

本誌『七隈の杜』は、本学の創立70周年記念事業の一環として創刊されたもので、主に地域に対し大学の知の発信を行い、広く学術文化を伝えることを趣旨としています。第8号は「生きる力」をテーマに本学関係者、地域の方々にご寄稿いただきました。

本学教授陣からは長い人生の基盤となる学校教育、愛情・ぬくもりのある家庭、病气やけがになったときに命を救う医療、生活を豊かにする最先端技術など、総合大学ならではの多分野かつ学術的な面から紹介。また、大分県九重町からは、本学との長年のお付き合い・今後の展望といった地域との絆についてご寄稿。社会で活躍する本学卒業生からは、現在の仕事で携わる「スポーツを通じた子どものこころの育成」、「留学生支援」における熱い想いを綴っていただきました。そして、社会的にボランティアの意識が高まる中、地域における防犯活動、東日本大震災における被災地支援活動について、本学学生が「ボランティア」に対する姿勢・葛藤を著してくれました。第8号を発刊するにあたり、執筆を快く引き受けてくださった皆さまに厚く御礼申し上げます。

混沌とした社会。日々の生活や将来に不安を感じることもあるかもしれません。だからこそ、自分の力で、そして周りの人々と支えあって、人生を豊かに、幸せに生き抜いていく力を養っていききたいものです。本誌を手にとってくださいました皆さまにとって、本誌が「生きる力」を得るきっかけになれば幸いです。

『七隈の杜』 第8号

福岡大学創立70周年記念事業誌

2012(平成24)年1月31日発行

編集 福岡大学広報課

発行 福岡大学

福岡市城南区七隈八丁目19番1号

TEL 092 871 6631(代)

fupr@adm.fukuoka-u.ac.jp

http://www.fukuoka-u.ac.jp

『七隈の杜』に対するご感想、ご意見をお寄せください。